

Tokyo Urban Tech

NICHE

工学院大学建築系学科同窓会誌

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1025/>

2004 Vol. 28



国土交通大臣指定住宅性能評価機関 国土交通大臣指定確認検査機関 (財)住宅保証機構検査機関 住宅金融公庫検査機関

株式会社 住宅性能評価センター

性能
評価

建築
確認

保証
機構

金融
公庫

弊社は、皆様にご声援いただき、多くの住宅の性能評価及び確認審査を行っております。

現在、住宅性能評価・建築確認・住宅金融公庫・(財)住宅保証機構の審査・検査等を通し、多くの同窓会の皆様方にご利用頂いているところですが、更に幅広くご利用頂けますよう、サービスの充実と業務拡大に努めてまいります。

今後ともさらなるご支援を承りますよう、お願い申し上げます。

簡単
申請

申請ソフト【EFFVISIT】を利用して手軽に申請書(確認・性能評価)を同時作成。

短
時間

事務所に居ながらのインターネット申請や訂正作業が可能。1~2日の迅速な審査。

合理的

建築確認・住宅性能評価・(財)住宅保証機構・住宅金融公庫の一括審査・検査。

安
価

性能評価料は全国一の安さ。確認審査料もセット利用で割引に。

支
援

性能表示標準資料・オリジナル詳細図・各申請マニュアル等のご提供。

安
心

経験豊かな検査員・評価員による、的確な審査・検査。親切で丁寧な対応。

OB
特典

工学院大学卒業生の皆様への特典です。

- 申請ソフト【EFFVISIT】及びIDを無償貸与致します。
- 木造住宅構造計算ソフト【STRDESIGN】【STRPRIME】【自動伏図(仮称)】を20%OFFにて提供します。(富士通エフ・アイ・ピー(株)製ソフト)
- 確認申請・住宅性能評価申請専用CADを50%OFFにて提供します。

募
集

パートナーを募集しています。

- 社員 **建築基準適合判定資格者(建築主事資格者)**
本年度卒業予定者
勤務地：新宿区、静岡市、浜松市、金沢市、宇都宮市、名古屋市
- 代理申請 **住宅性能評価・建築確認等の申請サポート事務所**
設計事務所 …ハウスメーカーや地域工務店等からの代理申請業務
(住宅性能評価・構造計算・各種申請等ソフト支援・提供)

会社
概要

- 住 所 〒160-0022 東京都新宿区新宿2-3-11
東京建物御苑前ビル5F
- 資本金 1億円
- 業務内容 ・品確法 設計・建設住宅性能評価：設計審査、現場検査
・建築基準法 建築確認審査：設計審査、現場検査(500㎡以内の建築物)
・住宅金融公庫などの公的金融機関の審査：設計審査、現場検査
・(財)住宅保証機構 保証住宅：受付窓口、現場検査
- 社員数 90名 建設評価員 約120名(拡充予定)
- 営業区域 ・住宅性能評価業務、保証機構検査業務：沖縄及び離島を除く日本全域
・建築確認、住宅金融公庫業務：東京都(島しょ部を除く)、神奈川県、埼玉県、千葉県、茨城県、栃木県、群馬県、山梨県、長野県の全域
：11月営業開始予定…静岡県、愛知県、三重県、岐阜県

OB
OG

- 代表取締役会長 田野邊 幸裕 (建築学科 昭和44年卒)
(建築系学科同窓会 会長)
(校友会 監事, 学校法人評議員)
- 代表取締役社長 杉山 正博 (建築学科 昭和45年卒)
- 取締役 大塚 廣 (建築学科 昭和44年卒)
- 技術推進室 宮田 奈津 (建築学修士 平成15年卒)
- 建築基準適合判定資格者
石川 良男 (建築学科 昭和37年卒)
帯金 貞介 (建築学科 昭和38年卒)
勝谷 尚武 (建築学科 昭和45年卒)
中島 範義 (建築学科 昭和47年卒)
漆間 幹 (建築学科 昭和47年卒)
門脇 賢治 (建築学修士 平成11年卒)
望陀 佐和子 (建築学修士 平成13年卒)
竹下 賢治 (建築学修士 平成15年卒)
須藤 光俊 (建築学科 平成15年卒)
小田 恵美子 (建築学科 平成15年卒)
村松 弘一 (建築学修士 平成15年卒)
西川 恵理 (建築学科 平成15年卒)
泉澤 恵子 (建築学科 平成16年卒)
- 審査統括部 加藤 朝子 (建築学修士 平成13年卒)

問
い
合
せ

上記のOB・OGまで、皆様からのお問い合わせをお待ちしております。

TEL 03-5367-8730
FAX 03-5367-8825

E-mail info@seinouhyouka.co.jp
URL http://www.seinouhyouka.co.jp

NICHE 2004 Vol.28

CONTENTS

会長挨拶

田野邊 幸裕 NICHE Vol.28の発刊に寄せて
同窓生みなさまの更なるご支援をお願いします。……………2

NICHE Topics

- 大仮装フェスティバル 2004 開催……………4
新企画 第1回 まちなみ歴史探訪 初田亨……………5
①望月大介 工学院大学附属中学・高等学校校舎新築計画について……………6
②特集／本当に強い大学2004、工学院大学人材創出力で全国3位
③初田教授著書、福岡大学の入試問題に……………9
④藤木研究室 国際学生デザインコンペ
Grand Prize(最優秀賞)受賞……………10
⑤田中雅子
第21回すまいまちづくり設計競技に 特選・国土交通大臣賞受賞……………11
⑥窪田亜矢 日本建築学会論文優秀賞入選!……………12
⑦小原勝彦さんが活躍する岐阜県立森林文化アカデミーが
平成こども塾活動拠点施設 プロポーザルのコンペで最優秀賞
⑧藤木研究室 大地の芸術祭 越後妻有(Tsumari)アートトリエンナーレ 2003
「十日町に服を着せようプロジェクト」……………13
⑨2003作品……………14
原武 修士プロジェクト作品(武藤賞、最優秀賞)
都市における中間領域の空間構成に関する研究
片桐和也 卒業設計(最優秀賞)アートネットノ ウズマクトシラ オウダンスル
山形章 卒業設計(優秀賞)共進化・フォルムを生産するプロセスのモデリング
⑩森野和彬 第28回 鳥人間コンテストに初出場!……………16
⑪広沢雅也教授、耐震補強の課題で活躍
⑫野部達夫 ROOMVENT2004・ポルトガルに参加して……………17
⑬ベルリン工科大学との国際ワークショップ 2004
⑭小野里憲一 世界地震工学会、カナダ・バンクーバー 2004年8月……………18
⑮宮本俊輔 第8回世界木質工学会議 フィンランド・ラハティ 2004年6月
宮本俊輔 第1回「坪井記念研究助成」に採択……………19
⑯東正則教授、連載3年記念特集 グリーンライフ(平成16年4月1日)に掲載
⑰東教授ゼミ生8名活躍
都心ビル街農で潤せ 大学生が構想 ごみ堆肥で循環型も……………20
⑱小野正行 近畿大学 産業理工学部長に就任
⑲平野久雄 スペシャルオリンピックス 500万トーチラン・出雲路ルート……………21
⑳高橋孝栄 みなさ〜ん、山下研OBで〜す。
㉑工学院大学名誉教授 中嶋泰(なかじまやすし)先生 ご逝去……………22
㉒工学院大学建築系学科同窓会総会と校友会総会が開催
校友会新年会 記念講演会……………23
㉓「父(武藤清)を語る」
日本の超高層ビル(霞ヶ関ビル)誕生秘話 森永光子……………24
㉔新刊書紹介 10冊……………26

特別企画

同窓生を訪ねて

静賀正樹
ものづくりは人との出会いとつながり 建築関係の雑誌編集に携わって……………32

NICHE座談会②

社会人入学の同窓生が語る 社会に出てから、再び学び続ける大切さ……………36

新企画 世界の建築家と工学院大学

- ①波多江健郎 ホセ・ルイ・セルト……………42
②北沢興一 アントニン・レーモンドと私……………48

輝かしき先輩たち⑥

類洲環
明治神宮外苑のシンボル「絵画館」を設計した 小林正紹……………54

同窓生からの便り

- ①竺 覚曉 私の仕事「乱読」と「雑学」……………60
②松本正富 建築の設計から研究へ……………64
③楠 昭 街づくりに参画して学んだこと……………66
④鱒沢 曜 プロジェクトを通して学んだこと……………68

a round the world

- ①Yuka Raeube スイスでの8年間……………70
②出口 紋 Spain 色……………73
③濱奈津子 建築体験から得たもの
ヨーロッパ環境共生まちづくり研修ツアーを終えて……………76
④飯島貴智 都会のオアシス「アトリウム・ポケットパーク」……………80
⑤松田宏之 フェリックス・キャンデラを訪ねる メキシコ建築見学……………82

NICHE GALLERY

- ①西村 武 駒沢大学附属苫小牧高等学校……………84
②石田 亨 ルネ青山ビル……………90
③澤崎 宏 夢みなとタワー……………94
④高橋憲一郎 霜降り山のレストラン……………98

また会う日まで

広沢雅也 ニーチェの原稿……………102

建築系学科 ホームページの紹介……………104

学科便り

- ①宮澤健二 第一部建築系学科の近況……………106
②安原治機 建築都市デザイン学科の近況……………108
③宮城干城 第二部の近況……………109
④嵩 英夫 大学院建築専攻の近況……………110
⑤久田嘉章 2004年度大学入試について……………111

2004年度 運営委員会名簿……………112

会費・寄付金……………114

卒業生名簿 平成15年度……………116

表紙デザインのコンセプト、編集後記……………132

同窓生みなさまの更なる ご支援をお願いします。

皆様には同窓会活動に格別のご支援・協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

2001年4月に前高木会長より建築系学科同窓会会長を、引継ぎ任期(3年間)を、皆様のご支援ご協力のお陰で無事努めることができました。また、5月に開催した総会で、2期目(2007年3月31日まで3年間)の会長を継続することになりました。同窓会の皆様の更なる支援とご理解をよろしくお願い申し上げます。

原稿締切り近い、7月14日の某新聞に「福井地震から56年」という主婦(82歳)の追悼記事が掲載されていました。『長い戦争から開放されて、やっと穏やかな日々が送れるようになった直後の1948年(昭和23年)6月28日午後14分福井地方は、生涯忘れられない未曾有の大地震に見舞われた。激しい上下振動のため、一瞬のうちに数千人が下敷きになってしまった。私は、幼い3人の子をつれて2階と階下の割目から辛うじて出る事が出来た(中略)途中、息子さんの足に大きな梁がのしかかり、どうしても取り除けない母親が手を合わせて「許してくれ」涙声で言っていた姿がよみがえってくる。戦地からやっと復帰した兄は下敷きとなり悲痛な最後であった…』

この福井地震(死者3,769名、全壊36,184棟)後、建築基準法が制定されましたが、1995年1月17日兵庫南部沖地震(死者6,433名、全壊106,906棟)において、教訓が十分に生かされませんでした。また、東京の新名所「六本木ヒルズ」で起きた事故はあまりに痛ましい。今回の事故が起きるまで32件の回転ドアの事故が、ヒルズ内で起きていた事実が驚かされ、過去にも全国で多数の事故があるという事実。その様な条件の中で採用した設計者・施工者の姿勢・

資質が問われる。

2年前にある住宅コンペの審査に立会った時、プレゼンの段階で応募した設計者にたいして、審査員の一般市民から質問がありました。地震に大丈夫ですか?階段に手摺がないが子供は落ちないか?建築確認審査は合格しますか?との質問に、「建築確認は合格しないと思う、デザインが重要です」と答えた。設計の思想を取り違えたこの設計者に、啞然とした事を思い出し、我々建築に携わる人間として責任ある行動を、痛切に感じる昨今です。

報告事項

■第39期 2004年度建築系学科 同窓会 総会開催

2004年5月30日(日)10時30分から新宿キャンパス5階0511室で開催いたしました。

議案

1. 38期(2003年度)事業結果及び収支決算(案)の報告について
特に、ホームページの充実、新規事業の取組み、「2級建築士アカデミック講座」等について、報告いたしました。

2. 39期(2004年度)事業計画及び収支予算(案)について

①新運営体制

会長及び副会長:3号議案

監事:望月大介、南雲正博

(以上2名)

学生協力者 総務:安部 健

(大学院2年)

NICHE:小野あゆみ(大学院2年)

②同窓会誌(NICHE)28号を11月初旬に発刊

編集長:大場光博 副会長

委員:鯉坂誠之、伊藤真人、谷口宗彦、高木雅行、田野邊幸裕、初田亨、三好薫

③ホームページの充実

担当責任者:関谷真一 副会長、

担当:鯉坂誠之、学生・協力者

(HP募集)

④新規事業<現役学生との交流>の取組み

担当責任者:三好薫

担当:高城文一、高橋昭彦

⑤生きた教材として見学会・研修会の開催

担当責任者:初田亨 副会長

担当:伊藤真人、学生等(HP募集)

⑥現役学生に対する支援事業

【2級建築士アカデミック講座】

担当責任者:谷口宗彦 副会長

担当:学生

⑦会員同士の交流事業

(NICHE-C-net)

担当責任者:加藤隆弘

担当委員:鯉坂誠之、協力者

(HP募集)

3. 会長及び副会長の承認

会長:田野邊幸裕

副会長:大場光博、北澤興一、関谷真一、高木雅行、谷口宗彦、初田亨

(以上6名)

任期:2004年4月1日から2007年3月31日

まで

■八王子キャンパス…ニュース

第1部の学生が1・2年次を過ごす八王子キャンパス(約23万m²)は、自然に囲まれた静かな環境の中にあります。八王子キャンパスは開設以来40年が経過し、魅力ある再整備計画に着手している中、新たな大学用地として「戸板女子

幸田 裕野邊

●昭和44年 鹿屋高等学校出身
●鹿屋島県立 鹿屋高等学校 出身
●大学1部建築学科卒業



短期大学八王子キャンパス(敷地:21,000m²)」を取得いたしました。現キャンパスから西に約500mに位置し、南側には八王子市の清水公園に隣接するなど、緑豊かな平坦な敷地で教育環境としては、良好である。2005年までは高等学校の仮校舎として利用し、その後大学の新しい教育体制の施設として利用される予定です。

■ 付属高等学校校舎を「望月大介教授」が設計

生きた教材として八王子キャンパスには、多くのOB作品があり、新に付属高等学校が建替えになるに当たり、同窓の望月大介(建築都市デザイン学科教授)が基本設計を担当される事になりました。NICHEが皆様に届く頃は、現在の高校校舎は解体され、基礎工事に着手していると思います。

同窓会としては、工事中の現場見学会等の実施を考えています。参加希望の方は、HPでご案内いたしますので、年明け後には注目しておいてください。建築系の学生にとって、生きた教材となる作品が出来ることを願っております。

■ 新事業として産学共同「いえづくり講座」(仮称)

～NICHE Collaboration-Network(略称NICHE-C-net)～

会員同士の交流及び活性化を図りながら、社会に貢献する事を目的とする。工学院大学AIフォーラムと建築系学科同窓会の共同主催とし、産業界から賛同会社を加え、社会との交流事業として仮称「いえづくり講座」を、有志を募り本年度中に実施にむけた検討を致します。プロ(専門家)に学びながら

《自分達の家》を自分で設計

●講座内容:資金計画・敷地調査・街並み・設計・デザイン・インテリア・設備・登記等

●講師:工学院大学建築系学科卒業業者

●補助者:現役大学院生(学生との交流)

●事業推進責任者:加藤隆弘 事務局:鯉坂誠之

●パートナー:工学院大学、賛同者(会社・官・個人)

…HPで随時報告いたします、注目してください…

■ ニッチウェブ編集局(ホームページ)

同窓会ホームページ(NICHE-WEB)は、同窓会会員、大学、学生との情報交換の場として設けました。会員の皆様方のご意見ご提案等も気楽に交換できる場として、有効活用して頂けるようにと考えています。是非活発にアクセスして、BBS掲示板などにご提案下さい。尚、皆様のホームページとのリンクを図りますので、お申込みください。ホームページがない場合は、学生が実費にて作成いたします。気楽に下記受付窓口にご相談下さい。

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wd1025/>

受付窓口:関谷真一

<yuis@thy3.3web.ne.jp>

編集局:鯉坂誠之

協力者OB:樋田紘一

学生:小林茉莉M1・豊川智彰4年・大西由紀子4年・斎藤嘉友3年・鬼塚準三3年

■ 大好評の学生支援

【2級建築士アカデミック講座】

昨年9月末に現役学生を対象に募集(70名定員)したところ、数日で定員に達し、72名の学生で締切りました。受講者の今年7月の学科試験結果では、2次試験が終了しないと全体結果は集計できませんが、7月中旬の日建学院(新宿校)で受講した38名中35名の学科合格者が出た模様です「鉄は熱いうちに」12月の結果発表に期待しています。本年度は、7月中旬に100名を定員として募集を開始いたします。ある機関が実施した大学生に対するアンケート結果によると、学生が大学に望む事の第1位(43%)が「就職支援」、第2位(32%)が「資格取得支援」となっています。

卒業見込み学生対象の【2級建築士アカデミック講座】に引続いて、在学生全員が取得可能な技術資格についての講座【宅地建物取引主任者・2級福祉住環境コーディネーター・測量士補等】を模索中です。出来れば本年度中実行に移したいです。

■ 「工学院大学校友会STEC VISAカード」加入のお願い

この同窓会誌『NICHE』や同窓会活動は、皆様方の会費で成り立っています。校友会では「工学院大学校友会STECカード」を発行しております。未加入の方は是非加入し、同窓会年会費の自動引落しなど、手続きの簡素化にご協力をお願い申し上げます。

※推進状況は、出来るだけ建築系学科同窓会のホームページに掲載いたします。アクセスしてください。

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wd1025/>

大仮装 フェスティバル 2004開催!



2004.12.4 sat pm4:30-7:00

過去に、「大交流懇親会」「大屋台村フェスティバル」と銘打って行われていたイベントを行います。
同窓生・先生・学生が一緒になって楽しみ、歓談する大交流イベントです。

今年ちょっと趣向を凝らし、来場者の皆様に「仮装」していただくことになりました。

でも、心配ご無用!当日に、入場ゲートで簡単な仮装グッズを装着していただくだけで結構です!

仮装グッズは、同窓会で用意します。もちろんご自分で大仮装される方歓迎です。

たとえば、あなたは蝶ネクタイと帽子をかぶるだけでも良く

タヌキのぬいぐるみを着ても良いし、女装をするのも良いのです。

おじさんには女の子の、おばさまには男の子のメイキャップスタッフが、あなたの顔をお化粧しちゃうかも?

ふだんとチョッとだけ違う洋服やスタイルをしてみるのもいいじゃないですか。

そこかしこで、たくさんの笑顔と大きな笑い声が生まれることでしょう。

そこには、ちょっとだけ彩られた懐かしい顔が集まります!

「劇的ビフォーアフター」として仮装コンテストや「研究室対抗仮装合戦」等も行う予定です。

「大仮装フェスティバル2004」が終わったあとは、

各自の企画で、2次会として同期会や研究室の懇親会を積極的に予定していただきたいと思います。

建築系学科同窓会としては、大仮装フェスティバルのみの主催です。

名称／大仮装フェスティバル2004

日付／2004年12月4日(土)

時間／午後4時30分～午後7時00分

場所／工学院大学新宿校舎1階アトリウム

会費／3000円

出欠席は同封の返信用紙にてFAX03-3340-0588(同窓会事務局)かメールにてお送り下さい。

詳しくは建築系学科同窓会事務局TEL03-3340-3529(谷口研究室)

または 建築系学科同窓会ホームページまで

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1025/>

緊急!!ご協力の程お願い申し上げます。

フェスティバルを実行するためには、宣伝、会場設営、受付、屋台接待、
後片づけ等とたくさんの仕事があります。

これらの仕事を学生さん達と一緒にしておこなってくれるOB・OGの方や

フェスティバルに屋台を出して頂けるOB・OGの方(簡単な料理で)を募っています。

ご協力の程お願い致します。

ご協力頂ける方は、建築系学科同窓会事務局TEL03-3340-3529(谷口研究室)

または交流会幹事:三好まで(miyoshi@fy-g.co.jpかTEL03-3323-7311)までご連絡下さい。

そして、全国の「地酒大会」を予定しています。

各支部や有志の方々「地酒等」の寄贈よろしくお願い致します。

送り先は建築系学科同窓会事務局まで

〒163-8677 東京都新宿区西新宿1-24-2 工学院大学校友会

新企画

予告!

第1回 まちなみ 歴史探訪



馬車道



新港埠頭煉瓦倉庫再開発



イセザキモール

町を
歩こう!

建築学科 教授
初田 亨



第1回の「まちなみ歴史探訪」を計画しております。日時は、まちを歩くのによい季節ということから、春先（2005年）を予定しております。詳しくは同窓会ホームページ<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1025/>で2005年1月頃から紹介します。場所は横浜の関内地区です。

「歴史を生かしたまちづくり—横浜関内地区」

いま、横浜の関内地区が輝いています。2002年には、明治44年と大正2年につくられた、横浜赤レンガ倉庫1号館・2号館の保存・改修が終り、ショップ、食事、ビールなどを楽しめる場に生まれ変わりました。また、同じ年の暮れには、国際コンペが行われた、横浜港大さん橋国際客船ターミナルも竣工しました。

横浜の関内地区は、昭和40年代からまちづくりが積極的に行われてきたところで、日本のまちづくりをリードしてきたところでもあります。ここで目標とされてきたものは、歩行者空間を大切にすること、そしてまちの個性を育てながら、まちづくりを進めていくことでした。具体的には、歩行者空間を大切に、「緑の軸線」と「商業の軸線」をつくることを中心に展開されました。またその過程で「歴史を生かしたまちづくり」を掲げ、歴史的建造物の保全と活用を進めていったのです。山下公園、日本大通り、そして馬車道商店街、イセザキモール、元町などが順次整備されていったのです。

第1回目の歴史探訪として、横浜関内地区のまちづくり、そして建築を訪ね歩くことを企画いたしました。建築、そしてまち歩きを楽しみながら、赤レンガ倉庫でお茶（ビール）を飲んだり、中華街で夕食をとることも考えています。楽しみながら、勉強しましょう。ぜひご参加ください。

工学院大学付属中学・ 高等学校校舎 新築計画について



グラウンドより南立面を見る

はじめに

これまで八王子キャンパスでの中学・高校施設については2001年春に中学校舎が竣工し、高校校舎、体育館、図書館などは既存のままでありました。とくに校舎については耐震補強が求められるなど建設時から40余年をへて、その再生計画が中学校舎建設時から問われておりました。高校校舎の建て替えについては本学が2003年初秋、戸板女子短期大学敷地の入手がまとまりその結果、この敷地を高校校舎に当てることで、建設計画が決まりました。

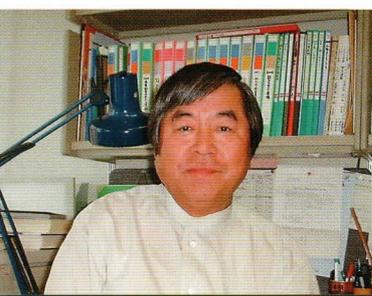
中学校舎建設については、当時学内の八王子整備実行部会を中心に設計：

久米設計、施工：清水建設で進められ、学園側の担当者として私に関わることになりましたが、建築設計の関与はなく、内外の色彩計画、各部詳細の一部手直しの域を出ずに終わりました。

基本設計に至る経緯

このような中学校舎建設の経緯から、高校校舎新築計画に伴う基本計画について、理事会より2003年10月 たたき台としての素案を諮問されました。あくまでも素案の計画にあったのですが、これを具体的基本設計案に進めることを

望月 教授
建築都市デザイン学科
大 介



了解されるまでには、いくつかの問題点がありました。ご承知の通り、これまで学園八王子キャンパスは1963年開校以来、初期は清水建設による設計施工方式ではじまり、次の段階では本学教授による設計と施工監理であり、その後、卒業生OBに設計委託する方向がとられ多くの方々が設計・建設に参画されてきました。しかしながら、ある時期以後、理事会は本学専任教員への設計委託を止め、外部に設計者を求める既定方針がとられていました。このことは本学建築系教員にとっては残念であります。専任教員が建築教育の延長として、設計の機会を得たいと考えていました。

大学に建築学科がありながら外部設計者への委託は他大学でも見られると聞いておりましたが、何とか基本設計案

だけは私たちの手でまとめたいとの意向を大橋理事長はじめ、常務理事会にご理解をお願いしました。その後、理事会での承諾を頂き、よりよい校舎実現に努めることを確約し進めることになりました。その位置付けは「八王子校地建設部会：基本設計担当責任者」として建築デザイン全般：望月、構造計画：小野里憲一講師、設備計画：野部達夫助教授の構成でのスタートです。

基本設計案のプロセス

このような経緯から素案Aから出発しE案まで5案を作りました。これらの与条件は現況のプールを残すことが計画の

前提です。本体は4階建て延べ床面積約8500～9000㎡の規模で、現在地で再構成です。ここでの問題点はキャンパス内を対角線に走る高圧線で、その直下の建築制限があり、建設条件として大きな制約要因であります。

配置計画の基本は南側にクラスルーム3層24クラス、北側に特別教室、講堂さらに西側に事務管理関係所室を配置した構成です。とくにクラス棟と北側特別教室棟を4階まで吹抜空間のアトリウムとしたデザインが特徴で、室内空間に視覚的一体感を持たせるものです。むしろそれに伴うリスクはあるのですが、大学新宿校舎との共通イメージを作ればと考えました。その後、プールを屋上階に載せ校地の有効利用を計るべきとの意見があり、その方向での計画案が



正面エントランス



北面外観

求められ、FからHの3案を提案しました。問題は構造的負担よりもプールの大きさと、その階下の諸室配置と構成の調整に苦慮いたしました。

A案からH案の主なデザインコンセプトは下記の通りです。

*このキャンパスの主役は生徒たちである。

*生徒間及び教職員のコミュニケーションの活性化を促すキャンパス計画である。

*アトリウム空間を通して学内全般の視覚的繋がりを計る。

*ホームルームを中心に諸室への展開をさせる。

*中学校舎との視覚的一体化を計る。

*図書館については中学校舎との中間に配置する。

以上のようなコンセプトで設計が進められ、平面計画では明快な配置を前提に、それぞれ機能別空間群ゾーンに分け、4カ所の階段室で結ばれています。立面計画は建築全体の立体的バランスと西日対策と日除けの問題、アトリウムの採光とその調整、屋上緑化と理科系の象徴としてのミニ天文台など新たな提案が含まれています。

構造計画は鉄筋コンクリート造耐震壁付柱・梁ラーメン梁構で、スパンは中学校舎と同一ユニットとしています。設備計画では冷暖房は各階個別対応をはじめ、太陽熱集熱版の設置と雨水再

利用など省エネ対策も含まれます。

外構計画は玄関側の門及び庭園整備と南側テラスの植栽、既存駐輪場の整備と増設、図書館跡地の緑化などです。

基本設計案の確定

このような形で実施設計準備段階(日建設計担当)へ移行したのですが、キャンパス現況の詳細な敷地調査と高圧線高さについて東電の専門測量の結果、校舎北棟屋上東に設置予定の「屋上プール」が特別高圧線距離線直下での6m(電気通信法)に抵触することが判明しました。



アトリウム内観

そこで再度地上でのプール設置案を検討し、平面計画と配置計画の修正をし、とくに北棟の講堂、教員室、特別教室などの見直しでスリムな平面に落ち着きました。

また図書室についても別棟でなく校舎と一体化することで中学校舎に近い場所に配置しました。最後にプールの配置については、城戸校長をはじめ関係の方々と検討し、図書室北側に設置が決まり、中学校舎とのバランス

を保つことができました。

まとめとして

このような経過をへて「中学・高等学校校舎基本設計」が2004年6月確定し、現在、日建設計担当者(本学卒業生:朝田志郎、浦俊弥両君)を中心に実施設計に入っています。校舎竣工は2006年春を予定しています。

このたびこの様な形で本学園高校校舎建設の基本設計担当の機会を得ましたことは、学園の皆様のご理解とご支援によるものです。また建築系学科教員として、その任の重さを痛感しております。

今後は確かな実施設計を期待し、さらには学園側責任者としてよりよい校舎の竣工を見守りたいと思います。卒業生の皆様にはどうぞよろしくご支援のほどお願いいたします。

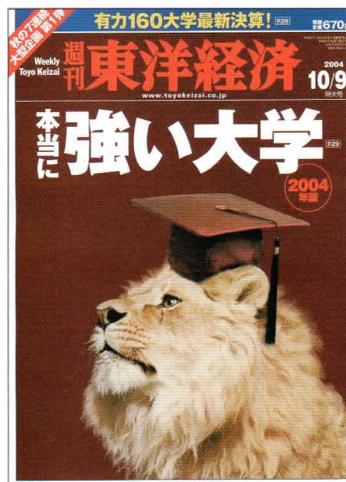
特集／本当に強い大学2004 工学院大学、人材創出力で 全国第3位にランク

「2007年受験生全入り時代」を迎え、大学間の競争がいよいよ厳しさを増してきた。個性あるプログラムで国の「競争資金」を獲得する大学がある一方で、時代のニーズに合わない大学は、退場を迫られている。さて我が工学院大学は如何に？

現在、工学院大学は工学部だけの単科大学から脱却し、新学部を一気に3つ増やす方向で進んでいる。従来の工学部に加え正式名称ではないが、「国際工学系学部」、「情報系学部」、そして我が国最初の「建築系学部」の<4学部構想>が平成18年度開講を目指し準備中である。卒業生としても頼もしい限りである。その折りもあり、週刊「東洋経済誌」が「本当に強い大学」特集を組んだ。

その評価は財務・経営・教育・研究の「4つの力」で大学の力を徹底検証している。次代を生き抜く本当に強い大学ベスト30が提示されたが、なんと有名総合大学に混じって全国五百以上ある大学中から<第11位>と、高く評価された。他に同誌の評価では、「財務力」第36位、「経営革新力」第21位、「研究力」第32位で、トップ50大学が提示された中に全て入っている。特に、人材創出力ではなんと第3位にランクされた。学生の「付加価値」を高め社会に送り出す力でこれ程までに高く評価されたことは、何としても喜ばしい。我々OB・OGとしても大いに誇りとなる。詳しくは週刊「東洋経済誌」10月9日号をご覧ください。

〔東洋経済 平成16年10月9日号〕取材/NICHE編集部



週間東洋経済

順位	大学名	学生数	卒業生数	就職先数	就職先数/卒業生	
1	立命館大学	10	10.0	53.9	394	26
2	慶応義塾大学	6	10.0	30.9	2200	26
3	工学院大学	6	78.0	30.0	191	23
4	明治大学	6	6.0	44.1	1116	23
5	慶応義塾大学	6	60.1	---	---	20
6	同志社大学	6	71.7	---	605	20
7	早稲田大学	5	35.7	22.1	215	20
8	東洋大学	4	78.0	30.0	113	19
9	関西学院大学	2	72.9	37.0	528	19
10	関西大学	2	72.1	46.4	406	19
11	立教大学	2	71.8	46.1	521	19
12	京都府立大学	4	68.9	59.8	47	19
13	明治大学	4	68.7	59.8	703	19
14	近畿工業大学	2	62.7	34.8	190	18
15	東洋大学	2	62.7	34.8	332	18
16	東洋大学	4	75.7	41.4	2	18
17	津田塾大学	3	60.4	46.0	3	17
18	南山大学	3	75.0	45.8	90	17
19	東洋大学	3	73.0	38.5	160	17
20	愛知大学	2	64.2	43.5	115	17
21	法政大学	3	63.0	36.2	402	17
22	上野大学	4	68.0	32.4	154	17
23	名城大学	2	74.7	34.5	79	16
24	法政大学	2	66.2	33.0	158	16
25	東洋大学	3	64.2	38.3	158	16
26	立教大学	1	61.8	---	5	15
27	学習院大学	1	67.4	43.6	179	15
28	創価大学	2	61.7	44.0	7	15

工学院大学、人材創出力で全国第3位にランク

初田亨教授の著書が、 福岡大学の入試問題に採択。

平成16年5月20日付、福岡大学学長 山下宏幸先生より「本学平成16年度入学試験において、推薦入学の国語問題に使用させていただきました。(略)」との連絡が初田先生に届きました。使用された著書は、初田亨著「職人達の西洋建築」講談社選書メチエ95です。

設問はB5版、5ページ分が該当しますが、一部を抜粋しますので、解答してみてください。

2004年度 国語 問題 (1～5ページ)

(1) 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

日本が西欧の建築に接した時、最初にそれに向かいあったのは棟梁・職人たちであった。そしてその中で、彼らがつくったものが和洋折衷の建築である。

問一 棒線部分の「和洋折衷」ともっとも似た意味の語の番号を記せ。

- 1.和洋建築 2.和魂洋才 3.和漢漢才 4.和洋合奏 5.和漢混交

(抜粋/問六迄あり) (一部を抜粋/解答は編集後記参照)



職人たちの西洋建築 (講談社選書メチエ95)

2004 International Student Design Competition Solar Energy in Architecture 2004

国際学生デザインコンペ 最優秀賞受賞 建築学科 藤木研究室

①韓国ソーラーエネルギー学会 (KSES) 主催

Solar Energy in Architecture "2004 International Student Design Competition"の審査が平成16年9月19日(日)に韓国明治大学で開催され、審査員として参加してきました。審査員5名(韓国3名、日本2名)、80数点参加の内 金賞 Plant=Architecture 工学院大学学生作品、藤木研究室、10月に韓国で開催される国際会議に招請される予定。銀賞 Sunlight filtering with foliage(日本の学生作品と思われる)他 KSESでは、13回目の開催だそうで大変力を入れていました。 大野二郎/日本設計

②審査会

第13回目のKSESの学生コンペ審査に審査員として初めて参加しました。私は日本では比較的早くからソーラー建築を目指した建築作品を手掛け、ソーラー技術を建築デザインに高める作品を作ってきました。今回の審査会では、大学3年生を中心としたと思われる参加作品の多くは全体的にレベルが高いことにまず驚きを感じました。しかしながら、CAD表現や表面的なデザインを先行する余り建築機能技術の内容に乏しいものも見られ、日本と同様に今後の建築設計業界および大学教育の課題だとも思われます。その中でも入選以上に評価された作品は、一定のレベルに達しソーラー技術と建築機能を程よくマッチングさせ建築デザインとして完成度の高い作品群でありました。特に金賞に選ばれた「Plant=Architecture」は、植物的な形態を隠しながらソーラー技術を、夢のある建築デザインに高めたところが評価されました。太陽エネルギー建築の重要性を認識し、長年継続して学生コンペを開催しているKSESに尊敬と敬意を表します。

大野二郎[(株)日本設計 第3建築設計群 副群長]

③コンペの目的(要項より抜粋)

『世界的環境保全の発展』は新たな時代を生きる人類に課せられた最も重要な任務の一つである。我々の都市環境を考える上で、太陽エネルギーをはじめとする様々な自然エネルギーを利用していくことがこの問題の最も有効な解答だといえるだろう。自然エネルギーを利用した設計技術教育の有効性を高めると同時に、環境に優しい建築について学生諸子に深く考えてもらうことがこのコンペの狙いである。

今回の課題は、あらゆる自然エネルギーの活用とその研究・展示を目的とする「ソーラーサイエンスセンター」の設計である。来訪者が自然の重要性を学べる施設であるとともに、実際の建築空間の中で様々な自然エネルギーを体感できる場が求められている。

④「建築の植物化」

私たちの案には、「建築の植物化」というタイトルを付けました。これからの建築が目指すべき方向性のひとつだと考えたからです。作業は、主に3年生が担当しました。当初はかなり甘く考えている節も見受けられましたが、厳しい指導とハードなスケジュールに最後まで良くついてきてくれたと思います。それでも、やはり上級生の力を借りなければ決して完成には至らなかったでしょう。先輩たちはとても頼もしい存在でした。そうした意味で、最後にはとうとう一夜を共にすることになった私も含めて、これは藤木研究室の総力を結集した自信作です。

工学院大学建築学科 助教授 藤木 隆明

⑤受賞者/工学院大学 建築学科 藤木研究室

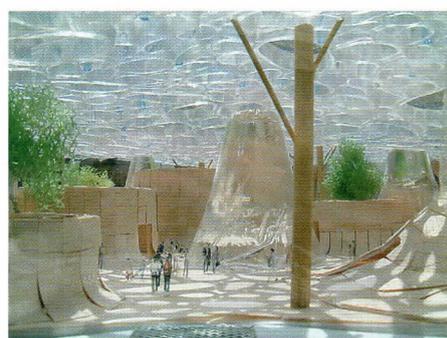
⑥受賞名/Grand Prize(最優秀賞)



作品に取り組んだ藤木研究室の皆さん



金賞受賞の図面 Plant Architecture



受賞作品の模型写真

第21回すまい・まちづくり設計競技に 特選・国土交通大臣賞受賞 つくばエクスプレス開通で広がる 自然を生かす新郊外居住の可能性

まちづくり月間実行委員会と(財)住宅生産振興財団は、「第21回(平成15年度)すまい・まちづくり設計競技」の入賞を決定。平成16年6月25日、国土交通大臣が表彰した。今回のテーマは、「首都圏郊外地域における、自然を活用した環境負荷の少ない住宅地の形成」で、課題地は茨城県伊那・谷和原丘陵部地区の一部約1.4ha。平成17年開通するつくばエクスプレス沿線のまちづくりで、自然を生かす先駆的な試みの提案に、新しい郊外生活を求める人々と住宅産業関係者双方の熱い視線が注がれた。

●審査委員長 藤本昌也氏(建築家・関東学院大学教授)の批評(抜粋) 〈時と共に味わい増す街へ、住民がコミットできる仕組みを〉

特選の作品は、この地域の特色でもある屋敷林を取り入れたり菜園を組み込むなど、田園居住ならではのアイデアが盛り込まれ、よく練られた作品に仕上がっています。全国どこに行っても同じような街並ではつまらない。郊外に限りませんが、地域の気候や地形、歴史に根ざした独自性が重要です。

●特選受賞者のことば 田中雅子さん 柳和宏さん 〈人と土の新しい住まい方、地域性生かしサステナブルに〉

この課題で最も大切なポイントは「郊外」で「くらす」ということはどういうことなのかということ。私達はこの課題地のような「郊外」と呼ばれる関東平野の旧農村地帯に住んでいます。そのため身近な問題として取り組むことができました。

「郊外」とは、戦後、東京に集中する人口の受け皿として、都心周辺へと拡散していった住宅の供給地です。その開発は基本的に、既存の地域を刷新し新しい住宅地をつくるという形で行なわれてきました。その結果できた住宅地は、どこでも同じ均質な場所になってしまっています。郊外が拡散していった結果、現在の「郊外」での生活は、長い通勤時間をかけて都心の勤め先に向かい、都心でほとんどの時間を過ごし、寝るためだけに郊外の住宅へ帰る、というのが一般的な形になっています。

そこでは「郊外」でくらす意味も、居住する地域を選択する理由も、資金的な問題とか「庭付き一戸建て」の偏重といった、消極的なものでしかありません。そのためつくられたニュータウンは「まち」となることはなく、地域から切り取られた場所になりがちです。「郊外」は、その土地に「くらす」という、本来の人の生活をないがしろにしてきたのではないのでしょうか？

●そこで私達は「人と土の新しい住まい方」を提案します。

結論を導き出すにあたって根幹となったのは、「地域性」と、本来の人の「くらし」の尊重です。それによって、魅力的でサステナブルなまちをつくることができるのではないかと考えました。重要なのは、どのようなくらしをするのかを考えること、その選択肢を豊かなものにすることです。郊外にアイデンティティーを与えることが、郊外の再建につながるのではないのでしょうか。最後になりましたが、相談ののってくださった工学院大学の窪田亜矢先生に感謝いたします。

(資料/日本経済新聞(夕刊)平成16年6月25日(金)、要約/NICHE編集部)



nora* net「のらネット」人と土との新しい住まい方



nora* net

工学院大学建築都市
デザイン学科 4年
(窪田研究室)
現在/千葉大学大学院
修士課程

田中
雅子
合作者/柳和宏

日本建築学会論文優秀賞入選！ 窪田亜矢講師

窪田亜矢講師は、3月23日、日本建築学会の「都市建築の発展と制御に関する論文」において入選（優秀賞）されました。今回の応募テーマは、「豊かで持続的な社会を構築するための都市建築の発展と制御に関する方策について」、広くアイデアを募るために関連学協会協賛のもとに「都市建築の発展と制御に関する論文」を募集し、応募総数90編という同学会の予想を超える多くの応募論文の中から優秀賞入選11氏の一人として選ばれました。窪田講師の入選論文は、「持続可能性の実現に向けて～政策統合と討議デモクラシー」と題され、日本建築学会の「経済優先の考え方が相変わらず支配的で、豊かな生活環境を実現できずにいる日本の都市の現状に対し、（中略）専門分野を越えた横断的な議論を巻き起こしながら、市民にとって真に豊かな都市空間をつくり出すための具体的な方法を提案すべく、その最初のステップとして実現した（同学会HPより）」論文募集に応募したものです。今回は、日本建築学会の呼びかけに応じた、空調衛生・地盤・土木・造園・都市計画・不動産・コンクリート工学の7つの学会・協会の協力により、大学研究者に加え、行政関係者・民間企業等の建築家・プランナー・技術者など所属・立場など幅広い分野の専門家からの応募があり、大学院生を初めとする多くの若手から、学会を代表する錚々たるメンバーからの応募も数多く寄せられました。

窪田講師の受賞コメント

「受賞そのものもちろんですが、受賞論文『持続可能性の実現に向けて～政策統合と討議デモクラシー』を多くの学生さんが読んでくれたことをうれしく思いました。日頃の授業では教えなくてはならない項目が多いので、どうしても自分の意見を語る時間が不足しがちだからです。じっくりと論文を書ける時間を確保してくださっている同僚の先生方、大学にも感謝しています。ありがとうございました。」なお、入選論文の授賞式は、8月末に開催された日本建築学会大会で行われました。

（資料/工学院大学広報部広報課）

●日本建築学会HP

「都市建築の発展と制御に関する論文」入選報告掲示板ページ

http://www.aij.or.jp/jnetwork/scripts/view11.asp?sc_id=151

●日本建築学会HP募集論文入選（優秀賞）作及び佳作論文、論文選考経過PDF:

<http://www.aij.or.jp/jpn/databox/2004/040414.pdf>



研究室ゼミで指導中の窪田先生



建築都市デザイン学科
講師

窪田 亜矢

小原勝彦さんが活躍する 岐阜県立森林文化アカデミーが 平成こども塾活動拠点施設 プロポーザルのコンペで最優秀賞



「木造建築スタジオ」での活動状況
(作業台で子供達の活動)

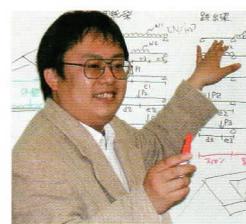
岐阜県立森林文化アカデミー「木造建築スタジオ」で小原勝彦さんは教育・研究・設計で活躍しています。平成こども塾活動拠点施設プロポーザルで小原さんの教え子達の特定非営利活動法人 WOOD ACが、平成16年8月に最優秀賞を受賞しました。応募数は25件でした。

小原さんの着任時(平成13年)、同校が旧組織を大幅に改組し、2年制の専門教育機関として発足しました。小原さんの所属する「森と木のクリエイター科」は入学条件が大卒以上で、少数教育で、質の高い学生を育てています。その成果の一つがNPO「WOOD AC」の設立とその後のバックアップです。岐阜県立森林文化アカデミーは、校舎が木造で有名ですが、森林や木造建築の教育としても、専門家の間で評価され、今回のコンペ受賞も木造関係者では話題となっています。

研究室連絡先 / 0575-35-3889

経歴

- 1996年3月 工学院大学建築学科・建築コース卒業(宮澤研)
- 1998年3月 工学院大学大学院修士課程・建築学専攻修了(宮澤研)
- 2001年3月 工学院大学大学院博士後期課程・建築学専攻修了
工学院大学より課程博士(工学)を取得、
「木質構造のエネルギー吸収性に着目した耐震性能評価に関する研究」(指導教授・宮澤)
- 2001年4月 岐阜県立森林文化アカデミー・助手
- 2004年4月 同アカデミー・講師、「木造建築スタジオ」所属



平成13年修了

小原 勝彦

NICHE Topics 8

大地の芸術祭 越後妻有^{つまり}アート トリエンナーレ 2003 工学院大学 藤木隆明研究室 十日町に服を着せようプロジェクト

十日町は古くから絹織物や着物にゆかりの深い街である。そこで“きもの”という言葉と和服としてだけでなく、もう少し広い意味で「衣服」ととらえ、街の中のいろいろなモノに服を着せていくことを考えた。服を着せる候補としてすぐに思いついたのは「電柱」であった。普段はあまり意識されていないが景観的にはとても邪魔な電柱に、さまざまな衣服を着せることで、自分たちの街を、もう一度新鮮な目で見直して欲しいと願った。また、街灯にも300メートルに渡って服を着せることを計画した。(企画書/抜粋)

平成15年6月15日、十日町市昭和町通り。工学院大学藤木研の学たちが街灯にフィンランド製の黄色地の鮮やかな“きもの”を着せた。昭和町通り商店街協同組合の関野健治理事長(53)「発想自体びっくり。美しく目立つ作品で、誘客効果が期待できる」と設置にゴーサインをだした。

(抜粋/平成15年6月19日(水) 新潟日報)



2003 作品

2003年度
修士プロジェクト作品
(武籐賞・最優秀賞)

原 武

都市における中間領域の
空間構成に関する研究
～公共施設の空間構成手法の検討～

2004 修士論文 澤岡研究室

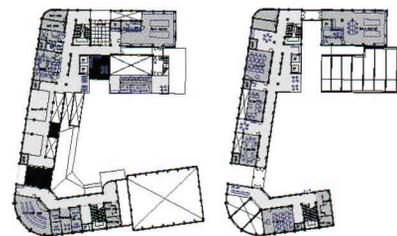
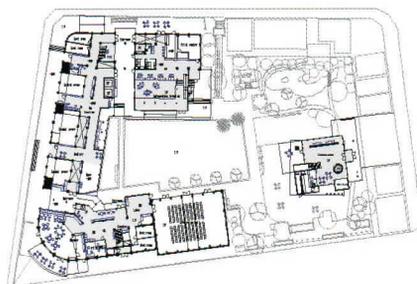
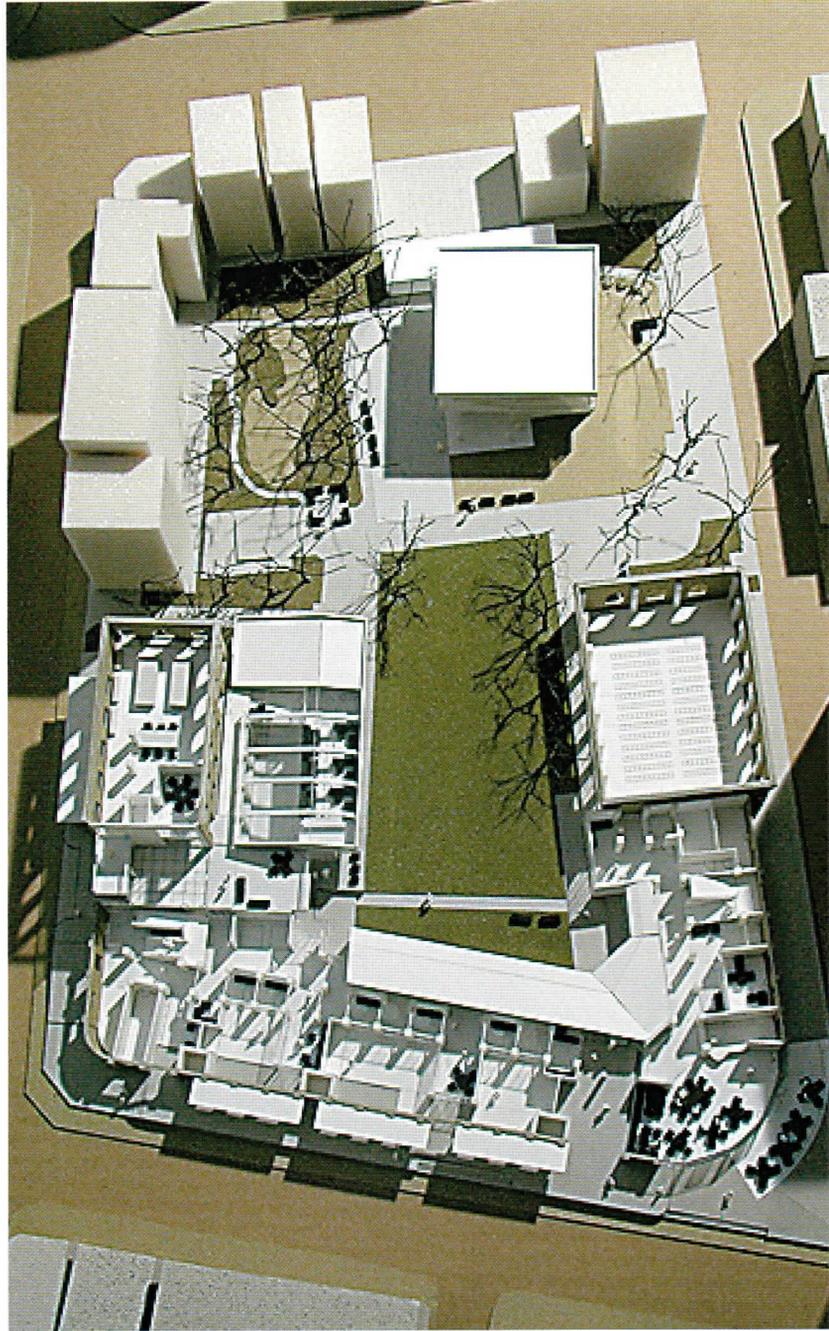
研究の背景と目的

■公共施設に適した空間構成の検討

パブリック性の強い要素を持つ公共施設を計画するうえで、必要な空間はどのようなモノであるべきだろうか。

東京の都市の中には人々に親しまれる、ブランド化された多様なアクティビティを内包している地域がいくつも存在している。それらの地域には、人々を引き寄せる要因が何かしら存在しているはずである。魅力的な都市の構成要素をピックアップすることができれば、パブリックな施設の空間構成に適用できるのではないだろうか。

論文では、人々が多く集まる地域(神楽坂・原宿・代官山)を検証していくことで、多くの人々のアクティビティを促す空間を作り出す要素を抽出していく。



2003年度卒業設計 (最優秀賞)

片桐和也

建築都市デザイン学科 谷口研究室

アートネット ノウスマクトシヲ オウダン スル

アーティスト・イン・レジデンスとはアーティストに構想や研究に没頭する時間を与えることを主眼とし、異なる環境や文化の中で過ごすことで、彼らの創作活動に新たな展開を切り開く自己鍛錬や相互啓発の機会を提供するものである。日本でAIRが認知されるようになったのは1990年代前半のことで、創作活動の場として日本に魅力を感じ来日を希望する海外のアーティストは多い。そこでアートというものを街全体に広げていくには、市民がアートに身近に触れられ関心を持つことが非常に重要であり、日常的にアートというものに触れられる施設を計画することが必要である。このことを考えると、アートの創作のプロセスを共有しながらアートを身近に感じてもらえるような施設計画が必要である。また、国際的な交流も盛んに行っていることなどから、海外からアーティストを招待して交流を図ることで、より専門的な芸術に触れる機会を提供する。

加えて、専門的な分野であるアートにおいて、新百合ヶ丘周辺には数多くの芸術系大学があり、相互の交流は、学生にとってもプロにとっても新鮮なことであり、アート活動を活発化することができるのではないかと。加えて、今計画が進められている新百合ヶ丘駅と川崎駅との間を結ぶ「川崎縦貫高速鉄道」が完成すれば、さらなる発展へとつながっていく。

これらのことから、この新百合ヶ丘にアーティスト・イン・レジデンスを計画し、アートのネットワークの核となるように位置づける。



2003年度卒業計画 (優秀賞)

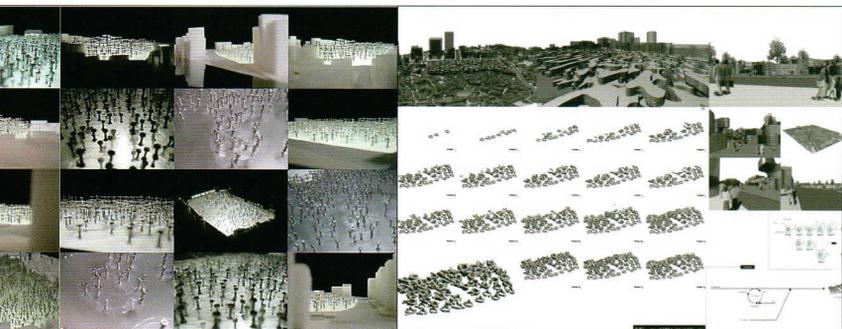
山形 章

建築学科 藤木研究室

共進化-フォルムを生成するプロセスのモデリング

自然環境に対する共生的振る舞いや代謝バランスを、人工環境でもつくりだそうとする建築的フォルムを生成するプロセスを提起する。都市過密化による人工廃熱増大や、人工地覆の増大と緑被・水面の減少によって発生した都市中心部の高温化、つまりヒートアイランドを解消させるために風を起す建物を計画する。敷地には最初に、任意でつくったユニットのプロトタイプとなるものを配置する。次に配置するフォルムは、風解析シミュレーションで任意で作成した複数のフォルムの中から、前世代ユニツから派生した風をよりよく流れるフォルムを任意選択して、フォルムを決定する。この作業は、生命の形態や機能が環境に適応するための進化同様に敷地全体に連鎖していく。

つまり、任意ではあるがフォルムを決定する条件は風である。敷地緑化によって周辺との温度差により風が発生して、且つ建物ボリューム変化による密度差によりさらに風は引き起こされる。その風により空気の流れがおこり、ヒートアイランド現象は解消に向かうであろう。



第28回 鳥人間コンテストに初出場!

平成16年7月31日、8月1日に琵琶湖で開催された第28回鳥人間コンテスト(主催/読売テレビ放送株式会社)に、建築学科(建築コース)3年の森野和彬をプロジェクトリーダーとした本学学生チーム Birdman Project Wendy(約60名)が激しい競争率の図面審査に合格し、滑空機部門へ出場しました。建築都市デザイン学科2年の久保田彩夏・中村新菜の二名も自らの役割を果たし参加しました。Wendyは機械工学科助教授 飯田明由先生が中心に指導されて創立3年目。今回が初出場ですがメンバー丸となり機体の設計・製作に取り組んできました。

Wendy琵琶湖初参戦 大会当日。近年の異常気象を象徴する、通常とは全く異なる進路をとった台風が西日本に直撃していました。7月30日の夜から雨と風は勢いを増し、大会中止も考えざるを得ない状況にあり、度重なる大会側とリーダーとのミーティングが持たれました。強風と豪雨からブルーシートで機体を守りながらの作業はなかなか捗らず、メンバーは時間と戦いながら最後の調整。11時30分セレモニーとともに大会は開催されるも、悪条件の中棄権や機体未整備、補助者が転落失格など多くのチームが涙を吞みました。その中で九州大OBチームが170mを超える飛行。追い風4~5m/sの悪条件下での素晴らしい飛行に会場は沸き上がります。15時、いよいよWendyの機体が3年間目指し続けたプラットフォームへ向けてゆっくりと移動を始め、機体はメンバー全員の想いと共にプラットフォームを上っていきスタンバイに入ります。悪天候の為助走時の駆け込みが制限されるなど条件は更に厳しいものでしたが、ついにWendyは荒天の天空へ向け助走開始。フライト。

記録17.33m Wendyの初記録。距離としては納得出来るものではありませんが、私達があのような状況下で最善を尽くした結果です。失格でも棄権でもなく、大会が中止となり機体を無傷のまま持って帰るなどではなく、工学院大学に記録を持ち帰ることが出来たこと、これが来年への第一歩です。応援ありがとうございました。来年もまた琵琶湖を目指します。今回の「鳥人間コンテスト」活動記録をHPに掲載。

<http://fluid.mech.kogakuin.ac.jp/~iida/tori2004/index.html>

またWendyのHPもご覧いただければと思います。

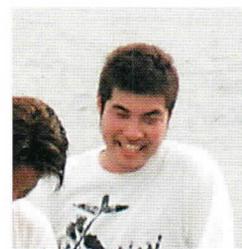
<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wvs2025/tori.html>



機体最終組立て作業



メンバーが全員集合



建築学科3年
赤木研究室

森野
和彬



プラットフォームからテイクオフの瞬間

広沢雅也教授、耐震補強の課題で活躍

①建設技術新聞 平成15年11月17日第592号

研究室めぐり 「工学院大学建築学科 広沢雅也研究室」

阪神・淡路大震災のあと耐震診断・耐震補強技術の分野は、建築技術の花形となったといっても過言ではない。工学院大学建築学科の広沢研究室(広沢雅也教授)は、その代表ともいえる存在。主な研究テーマは、①既存RC造建物の耐震診断・補強方法、②RC柱梁接合部および2次壁付き柱の耐震性能、③既存RC造校舎、集合住宅、S造体育館の耐震診断、補強などが挙げられている。(抜粋)

②建設技術新聞 平成16年4月19日第602号

都市防災と危機管理特集《災害に強い街づくり》

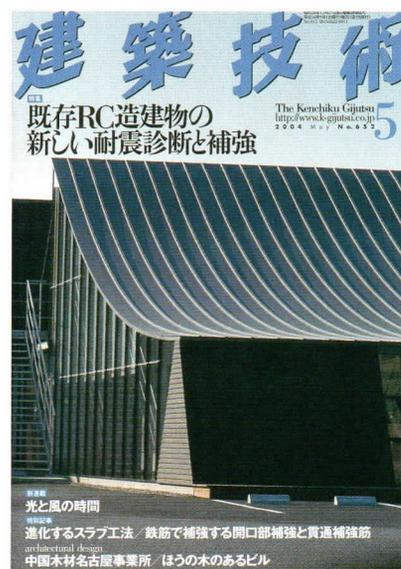
耐震補強の課題を追う(細心の関連大型部材実験を中心に)

工学院大学工学部教授 工博 広沢雅也

既存鉄筋コンクリート系建物(RC系建物)のストックは、新たに新築される建物と比べてはるかに多く、また、近年の環境問題への関心の高まりなどから、既存建物の長寿命化が求められている。このような社会的潮流の中で、地震国である日本では、既存建物のほとんどが旧耐震基準により設計されていることから、その建物が持つ耐震性能の適切な把握と改修が求められている。(中略)最近、「大変形下におけるRC造袖壁付柱の耐震性能に関する帯筋比や構造スリットの影響」に関する大掛かりな実験を行ない、結果をまとめた。RC造袖壁付柱の耐震性について述べたい(抜粋/NICHE編集部)

③建築技術 特集・既存RC造建物の新しい耐震診断と補強 2004.May No.652

編者 広沢雅也教授 最新の既存RC造建物の耐震改修技術をまとめました。



建築学科 教授

広沢 雅也

NICHE Topics 12

ROOMVENT2004・ポルトガルに参加して

小生の研究室では修士課程の学生に海外の学会発表を義務づけているが、今年はポルトガルのコインブラで9月5日から4日間開催されたROOMVENT2004という換気・空調及び室内環境を対象とした国際会議に参加した。コインブラはリスボンから列車で2時間半ほどのところに位置するポルトガル第3の都市で、会場となったコインブラ大学を中心に発展した中世の雰囲気漂う学園都市である。

会議には30カ国から250名が集まり、本学からは野部と庄司陸美(野部研究室修士2年生)が参加した。野部は「椅子型パーソナル空調システム」、庄司は「机前縁吹き出し型パーソナル空調システム」に関する研究成果をそれぞれオーラルセッションで発表し、各国の研究者と活発なディスカッションを行った。

会議後の晩餐会はマルコスパレスと呼ばれる元離宮で行われ、各国の研究者がうち解けた雰囲気の中でポルトガル料理とファド(ポルトガルの伝統音楽)を楽しんだ。英語の発表というハードルは学生には高いものの、苦労を上回る成果が得られたものと確信している。



晩餐会にて左から近本(立命館大)、野部、セバネ(フィンランド)、庄司、ファンガー(デンマーク)



会場となったコインブラ大学会議場

建築学科 教授

野部 達夫

ベルリン工科大学との国際ワークショップ 2004年9月7日～11日

工学院大学建築学科 山本理顕教授が代表、講師：山本理顕、倉田直道、澤岡清秀、田島則行、西森陸雄、理科大：小嶋一浩の各先生が9月7～11日にかけて工学院大学新宿キャンパスで開催。（協賛／東京ガス）

ベルリン工科大の院生、理科大院生、本学学部・院生で約7名の混成×6グループ。テーマは南新宿のある場所を設定し、「TSUBO」という概念で、ある1点に手を加えることで土地の持つ魅力を引き出し、まち全体が改善されるような新たな更新の手法を提案。ベルリン工科大から教授1名、助手3名、学生12名が参加、「初日の会場が28階」でびっくり。

9月11日（土）夕方、新宿パークタワー1Fアトリウムで展示6作品の講評が行なわれた。新宿の西と南側の地形模型作成に3週間、資料準備や運営に山本研のM1繁田尊友、高橋潤さんらが中心となり約30名の学生が活躍。英会話のネックも乗り越えて、作品は形やプログラムなど予想外のものが提出され、ものを作り上げた喜び、交流が一番の刺激となりました。（取材/NICHE編集部）



アトリウムでの作品講評

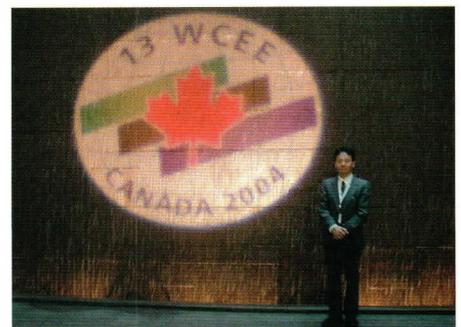


閉会式での諸先生のご挨拶

世界地震工学会、 カナダ・バンクーバー 2004年8月

13WCEE（世界地震工学会）は1956年に開催されて以来4年に一度開かれる国際会議であり、地震のリスクを軽減するため世界中から研究者が集まり、知識と情報を交換し、研究や施工技術などを紹介します。また様々な分野から研究者が集まり刺激を与え合うことで既存のものを更新していくための触媒的な役割も果たしています。今年カナダのバンクーバーにあるカナダプレイス（1986年に開催されたバンクーバー万博のカナダ館）で会議が開かれました。本学からは構造系の教員（広沢雅也、宮澤健二、久田嘉章、小野里憲一）が中心となり大学院生（西村彰敏、阿川雅樹、柴山明広、鱈沢曜、津田千尋）や研究生（宮本俊輔）とともに耐震技術、地震防災等に関する研究発表を行いました。

（報告/小野里憲一）



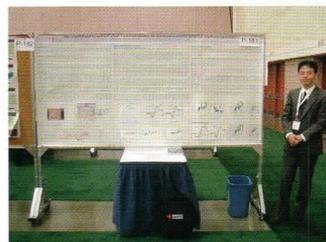
会場にて（小野里）



会議場（カナダプレイス）



ポスターセッション（鱈沢）



ポスター前にて（小野里）

建築学科 助教授

小野里
憲一

WCTE2004 第8回世界木質工学会議 フィンランド・ラハティ 2004年6月

今年度の世界木質工学会議はフィンランド・ラハティで6/14～6/17に開催された。国内からは、官公庁の研究機関や、大学関係者など、本学から宮澤健二教授、院生の阿川将樹、田中勝、研究生の宮本俊輔が参加。1988年が初めて2年ごとで今回が8回目。会議の内容は木質構造、木質材料等に関する研究発表会。アメリカ、カナダやヨーロッパなど、アジアから中国、韓国などが参加し関心が高い。

木材は再生可能な唯一の構造材料、そして空気中の二酸化炭素を吸収し固形保存した材料であり、これを長期保存できる建築物へ活用することは、二酸化炭素の排出削減の一つと考えられる。しかし、構造材料としては多くの欠点も抱えている。その欠点の一つが接合方法にある。木材は、鋼材やコンクリートのように接合部の一体化が難しく、接合具という物を用いることで接合が可能となる。木質構造は、接合部の性能が建物全体の性能に大きな影響を与えるので、接合部の性能をどう良くしていこうかと、国内外で接合部の研究・開発に力を注いでいる。

会議は、口頭発表と展示した作品に応えるポスターセッションで、私は後者になります。自分の研究内容で、H形鋼と集成材が抜け落ちないためにはどうするのか?との質問に、接合部の真ん中にボルトいれ引き抜けの対応を考慮していると回答した。

また、海外への旅行が初めてで、フィンランドは緯度が高いせいか、夜になっても空が明るいのが印象的だった。街の中にも緑や自然が多く、片言の英語で交流して人の優しさを感じた。

建築学科 宮澤研究室研究生 宮本俊輔(談)



フィンランド、ラハティ市内



会場のシベリウスホール



シベリウスホール内のエントランスホール

第1回 「坪井記念研究助成」に採択

第1回(2004年)「坪井記念研究助成」(助成金100万円)が採択されました。応募総数は21件で、この内採択が6件でした。

宮澤健二教授は2002年に第4回「坪井賞」を受賞しています。これはツーバイフォー建築協会賞で、ツーバイフォー建築協会は以前の「坪井賞」を今年度から研究助成に変更しました。その第1回の研究助成に宮本俊輔さんが選定されました。師弟コンビで「坪井賞」と「坪井記念研究助成」を受賞しました。これは本学の枠組壁構造の教育・研究成果の表れです。

連絡先/工学院大学 宮澤研究室/03-3340-3470

Mail/re04003@ccs.kogakuin.ac.jp

Phone/03-3340-3470(宮澤研究室)

Fax/03-3340-3470(宮澤研究室)

経歴

平成11年3月 近畿大学・九州工学部
(九州産業理工学部へ改称)・建築学科卒業
平成11年4月 工学院大学・大学院修士課程入学
平成13年3月 工学院大学・大学院修士課程終了
(指導教授・宮澤)
平成13年4月 工学院大学・大学院博士課程後期入学
平成16年3月 工学院大学・大学院博士課程後期満期退学
現在 工学院大学大学院研究生 学位論文準備中



宮澤研究室研究生

宮本
俊輔

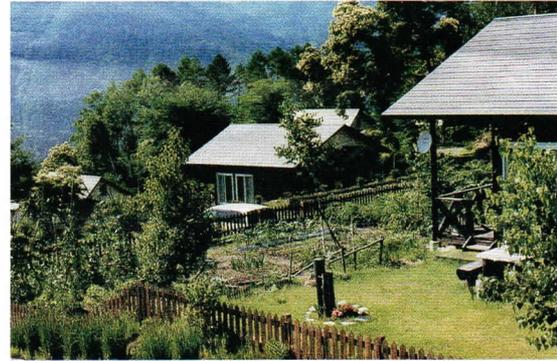
東正則教授、連載3年記念特集 グリーンライフ(平成16年4月1日)に掲載

「今、最も注目されている都市と農村交流の場 成功への秘訣10カ条」

高い人気の滞在型市民の農園

最近全国各地に続々と生まれてきている滞在型市民農園は、ユニークな都市農村交流施設である。連載3年目(36回)を記念して、滞在型市民農園の成功の秘訣を紹介している。滞在型市民農園は、都市のような利便性の追求ではなく、いわゆる「スロー・ライフ」に適した施設が必要なのであるとして、次のように10ポイントに整理した。『1.辺鄙な場所ほど適地2.積雪地帯でも有望3.地域ブランドがあること4.利用者を選べるようになること5.計画のコンセプトを明確に6.地元住民の協力7.利用者活動の活性化8.メンテナンスをしっかりと9.利用者の更新方法を考える10.環境の時代にふさわしい施設』。なお、グリーンライフは、JAグループの機関誌で、都市農業の動きなど幅広い情報を届けている。

(グリーンライフ発行所 日本農業新聞/概要NICHE編集部)



長野県奈川村・ながわ楽農倶楽部

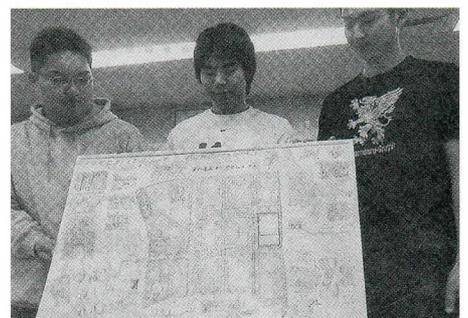


長野県四賀村・緑が丘ラインガルテン



東正則教授ゼミ生8名活躍 都心ビル街「農で潤せ」大学生が構想 ごみ堆肥で循環型も

東京・新宿の超高層ビル街に菜の花畑や水路を配置し、潤いのある空間に甦らせようという計画を、工学院大学の学生(加藤始、安藤公介、保清人さんら)がまとめた。都心の「ヒートアイランド現象」を緩和するだけでなく、ビル街で出る生ゴミを堆肥化して畑に還元するなど、循環型のまちづくりも可能となる。都心部で大規模な再開発が相次ぐ中、「都市再生にもっと農業的な視点を取り入れるべきだ」と提案した。 [掲載、2004年4月28日(水)日本農業新聞/概要NICHE編集部]



左から加藤始、安藤公介、保清人さんら
完成したイメージ図を前にして

近畿大学産業理工学部長に 小野正行教授が就任されました。

「新学部長就任にあたり」

私の勤務している近畿大学産業理工学部(1966年に私の出身地福岡県飯塚市に開設、2004年に学部・学科名称変更、大学院:4専攻学科、学科:5学科、専任教員:75名、学生数:約2000名)は近畿大学11学部の中の1学部です。今年、生き残りを、数年前まで教職員組合の執行委員長として近畿大学法人の経営分析を行ってまいりましたので、大学のあり方や経営について少しは考え、提案をしてまいりましたが、教育はサービス業ですから大学といえども民間企業と同じ経営感覚が必要だと思えます。また、教職員自身の意識改革なくして、今後、大学として生き残り、発展することは残念ながら望めないと考えております。

大学を取りまく環境が益々厳しくなる時期に、学部長を引き受けることは非常に厳しいものがありますが、今後とも地方の大学として生き残りをかけた改革を継続して取り組んでいきたいと思っております。母校の先生方や同窓生の皆様からアドバイスを頂ければ幸いです。母校の益々の充実と発展、および先生方と同窓生の皆様のご健勝をお祈りいたします。

2004年9月25日 小野正行

近畿大学 産業理工学部長就任

同学部 学部長就任予定(任期2004年10月.1~2年間)

研究室連絡先 :0948-22-5655(代表電話)

経歴

- 1964年3月 工学院大学建築学科卒業 (望月研(卒業生名簿上は十代田研))
- 1964年4月 武蔵工業大学・建築学科・望月先生の個人助手
- 1966年4月 工学院大学建築学科助手
- 1968年4月 近畿大学 九州工学部・建築学科・助手
- 2001年3月 工学院大学より論文博士(工学)を取得 「鉄筋コンクリート造有開口耐震壁の弾塑性性状に関する研究」
- 現在 近畿大学 産業理工学部(名称変更)・建築・デザイン学科・教授 鉄筋コンクリート耐震壁の研究で多くの論文を発表、特に九州地区では代表的な研究者。



昭和39年卒業

小野 正行

スペシャルオリンピックス 500万人トーチラン・出雲路ルート

平成17年2月に日本(長野県)で開催される知的発達障害者のスポーツ大会「スペシャルオリンピックス第8回冬季世界大会」とスペシャルオリンピックスの活動を沢山の方々に知っていただき、知的発達障害に対する関心を高めることを目的として、今秋全国各地で500万人の参加を目指した聖火リレー「500万人トーチラン」が開催されます。これを契機に、これまで健常者と一緒に行動することが少なかった知的発達障害のある人たちの社会参加が進むことが期待されています。

今、鳥根県で「全ての人々が平等で対等に、互いに助け合いながら暮らせる社会をつくる」ことを理念として、知的発達障害がある人の自立と社会参加を支援するスペシャルオリンピックスの活動に共鳴する有志と共に「500万人トーチラン・出雲路ルート」と銘打った聖火リレーを企画し準備を進めております。

トーチを持った障害のある人と随走する健常者20人が一団となって宍道湖畔の出雲市、平田市、松江市を繋ぐ計画で1000人以上の参加を目標としています。

この企画が知的障害に対する地域住民の関心を高め偏見や心のバリアの解消に寄与することを願っています。

連絡先/鳥根県平田市平田町1587-5 平野久雄 hirahisa@h8.dion.ne.jp

Tel&Fax/(0853)62-4806



5月28日、澄田鳥根県知事へ協力要請



後列左から2人目、細川佳代子理事長らへ5月27日花束贈呈



昭和41年卒業

平野 久雄

みなさん、山下研究室OBで一す!

いつもは、毎年年末第一土曜日に恒例となっていた山下研OB会なのですが、今回は先生にとって古希(70歳)という年でもあって、誕生月の4月に執り行うこととなりました。(実は幹事の準備不足もあってそうなったのだ!!)約70名の有志が集まり、大学のファカルティホールは先生を囲んで大いに盛り上がりました。目立った催し物は企画できませんでしたが、先生の特別講義がありました。

例の回転式スライド、そしてあの張りのある大きな声、「君たちは…」など。サーリネン、ケビンローチ、シーザー・ペリー…懐かしい名前が出てきて、みんな学生に戻った気分で聞き入っていました。

場を変えて懇親会会場では、OB・OGの近況報告も行われました。3期(1970年)卒業・設計事務所勤務の加藤喬さんから店舗のシステム(?)設計の話、そして、我らの昔のアイドル(?)で、現在は町田市議員の石井(旧姓:田代)恵子さんの活動報告がされ、卒業生の活躍が伝わってきました。髪の毛の薄くなった1期(1968年)卒業生から、まだ学生のような35期(2002年)卒業生まで、実に400人以上の卒業生を送り出してきた山下研究室の伝統を感じました。

山下先生あってのこの縁を、大事にしなければと感じたのは私一人ではないと思いました。

今後この会は、2期づつの幹事(次回は10、11期生)の呼びかけで、毎年気楽に集まれる会となるよう長く続けようと参加者全員で確認しました。また、山下先生の元気な姿の下、多くの卒業生が出会えることを願って。

出身校/新潟県立新潟工業高校

現在/株式会社空間設計研究所 代表

住所/東京都渋谷区千駄ヶ谷1-30-8 6F

電話/03-5785-2863

takahashi@smile.email.ne.jp



1975年3月卒業

高橋 考栄

NICHE Topics 21

なかじま やすし

工学院大学名誉教授 中嶋泰先生 ご逝去

工学院大学名誉教授の中嶋泰先生(都市計画)は、平成16年4月22日(木)急性心筋梗塞のためにご逝去されました。葬儀は4月25日(日)午前10時、府中市多磨町2-1-1多磨葬祭場にて、しめやかに執り行われました。自宅は武蔵野市桜堤2-3-6。喪主は妻晶子(あきこ)さん。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

中嶋泰先生のコメント(抜粋/教員プロフィール1997)

都市計画は、人間の日常生活をはじめ社会活動を支える都市基盤の構築・創造について、現実をふまえた将来のまちの姿を描く計画技術です。それにはハード面とソフト面との両立・融合が大切で、人間尊重の精神が大切なコンセプトとなります。都市は1日ではできません。時間的・条件とまちの秩序の確立が必要で、明日のまちづくりには都市生活形態の推移や動向を考究し、都市生活環境を魅力あるものにするための計画・設計・建築技術について学び、さらに自然と人工の融合・美しさ、都市の保全、維持、管理などの諸領域を包括した技術と知識の修得を目指すものです。

経歴

1931年
1954年9月
1971年2月

出生

日本大学工学部建築学科卒業

工学博士(東京大学)

「市街地における土地事情構成に関する研究」

1954年10月
1966年4月
1986年4月

東京大学工学部 勤務

工学院大学専任講師

工学院大学教授

1987年11月
1990年12月
1993年10月

武蔵野市市政功労者表賞

立川市市政功労賞表賞

武蔵野市アメニティコンテストまちづくりアイデア
賞審査員特別賞



工学院大学名誉教授

中嶋 泰

工学院大学建築系学科同窓会総会と 校友会総会が開催

■工学院大学建築系学科同窓会第39回総会開催

平成16年5月30日(日曜日)午前10時30分、工学院大学新宿校舎5階0511室にて総会開催。運営委員29名出席、委任状125票。田野邊幸裕議長の司会、同会長の説明で議事進行。第38期(2003年度)事業結果報告、815万円。第39期(2004年度)の事業計画(案)ならびに一般会計予算(案)803万円が、全員の拍手で承認されました。続いて議案3、会長及び副会長については、会長:田野邊幸裕 副会長:大場光博、北澤興一、関谷真一、高木雅行、谷口宗彦、初田亨の6名(任期2004年4月1日から2007年3月31日)が承認。議案5、その他については、工学院大学校友会の「運営問題」について、田野邊会長から報告と、過去の経緯の報告が谷口宗彦、北澤興一、笹原克の各氏から行なわれました。

(取材/NICHE編集部)



同窓会総会で説明する谷口副会長

■工学院大学校友会、第48回総会開催

同日12時30分、新宿キャンパス3階0312号教室にて、第59回評議員会、第48回総会が開催、収支決算報告ならびに財産目録承認の件。第3～4号議案:平成16年度事業計画(案)、ならびに収支予算(案)承認の件などが全員の拍手で承認されました。

長嶋秀世校友会新会長が会長挨拶で6つのポイントについて話しました。①地方支部の充実。地方でも就職可能なように、知名度も高くしたい。②新しいメンバーを加える。卒業生をドンドン校友会の活動に入れて行きたい。大学、校友会、後援会と連係してプラスになるように、友人知人関係を大切にしたい。③工学院の教職員。学園の為に内部のOBが結束したい。④クラブ活動出身者。社会に出て活力があります。学園支援のバックアップをお願いしたい。⑤学校法人の運営、学園を発展させる責任をもっと持って欲しい。⑥最後に理想的な校友会活動を進めるために、ご支援をお願いします。

引き続き来賓挨拶、学園近況挨拶、優秀学生・生徒表彰などが行われ、感謝状贈呈で福岡大会実行委員長 麻生好彦、大坂支部長 近藤竹司、大分県支部長 植崎政男氏の3名。功労賞が黄綬褒章 中島淳氏に贈呈・表彰されました。

■講演会開催

「青色発光ダイオード訴訟」200億円のゆくえ

太陽国際特許事務所長 弁理士 工学博士 中島淳氏

青色発光ダイオード(LED)の開発者として知られる中村修二米カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授が、所属していた日亜化学工業(徳島県阿南市)に青色LEDの製法特許の帰属をなどを求めていた判決が東京地裁であった。中村修二訴訟の争点、中村発明は誰のものか、職務発明の対価の額は?などと、大画面のスクリーンに映像を写しながら専門的な説明が行なわれました。事例として、たんぱく質の分析方法でノーベル科学賞をとられた田中耕一さんなどの話題にも触れられ、これからの企業内での発明についての問題点を整理されました。特許法第35条の職務発明規定など日頃接する機会の少ない法律の解釈などもあり、技術者としては割けられない問題だと思いました。

■工学院大学校友会・懇談会

午後5時、中層棟7階食堂にて、来賓及び校友の参加のもと、長嶋校友会会長の挨拶、来賓の挨拶、乾杯に引き続き懇談になりました。中央にビュッフェスタイルのメニューが並べられました。いつものようにあちこちで話の花が咲き賑やかに盛り上がりました。午後7時頃に時を惜しみつつ、翌年の再会を約束して、お開きとなりました。

(取材/NICHE編集部)



長嶋秀世校友会会長の会長挨拶



壇上で優秀学生・生徒への表彰式



講演者 中島淳先生

平成16年 工学院大学校友会 新年懇親会記念講演

父 (武藤 清)

誕生の秘話

日本の超高層ビル
(霞ヶ関ビル)

を語る!

平成16年1月25日(日曜日)新宿キャンパス3階312教室にて、武藤清先生の次女 森永光子さんによる講演会が開催され、引き続きフラダンスの演技も行なわれました。



昭和56年4月 天皇誕生日茶会にて
武藤清先生夫妻

関東大震災が 発端で、 耐震構造学に専念

「『日本は地震国だから欧米のような超高層ビルは建てられない』という日本人の頭の中にあつた諦めの思いをひっくり返したのが、建築学者の武藤清だ」と、平成元年3月文藝春秋蓋棺録に掲載されました。

「私は関東大震災後、耐震構造の勉強を始めました」。大正12年9月、武藤清は東京大学2年生の時、青森県朝虫温泉旅行中に大地震の知らせを聞いて急遽上野駅に着くと、向島から蒲田迄一望のもとに見渡せました。大きなショックを受けて耐震設計の必要性を痛感し、耐震構造学に専念する決心をしました。そして上野寛永寺の五重の塔が唯一ビクともしない建物でした。これがピン



昭和19年早春 水戸射爆実験
中央武藤先生

トとなり振動の研究を始めました。

「研究は常に一步先を考えて行なう事、その成果を蓄積しておき、財産として持っているとは必ず依頼がくる」、実験と現場を大切にする人で、必ず実験の裏づけをし、現場へはとにかく良く足を運びました。

【「柔剛論争」 関東大震災後、当時の海軍省建築局長、青島健三郎博士は、地震力を減少させるには柔らかい鉄骨架構が有利であると展開し、剛構造を主張する佐野利器東大教授(武藤清の岳父)との間で論争が行なわれた。昭和4年佐野教授が退官し、代わりに当時28才の武藤清助教授との間で継続された。地震波の実態が不明な時代は結論のだせないものであったが、柔構造の超高層ビルと、剛構造の原子力発電所が、武藤先生の指導の元に建設されるようになった。工学部ニュースNo231. 890601.青山博之(建築)記】

軍から耐爆実験 の依頼

昭和14年頃、軍の依頼で6階建てのビルを作り、爆撃機に乗り爆弾を落とす

等の対爆実験を行ないました。敗戦時の資料の焼却命令を無視した結果、戦後この成果が日の目をみました。

G.H.Qから耐震設計の専門家を紹介して欲しいという依頼があり沖縄の進駐軍の軍用施設の耐震構造設計を行ないました。耐震設計法のテキストを英文でつくる等の収穫がありました。

昭和27年には、地震計を東大の地震研究所に設置し、耐震関連の専用コンピューターの開発を着手しました。

【武藤清先生の研究の出発点は、ラーメンの振動論であるが、爆圧による壁体の振動で、この研究が発展して破壊実験から吸収エネルギーによる耐爆設計一般論の完成に至り終戦を迎える。この基本的考えが、戦後の単一波でない地震波入力による超高層設計にそのまま伝わっていく。先生の思想の根底には、いつも力学の基本原則が流れていて、その上に目的に応じて理論が組み立てられてゆく。一見直感的に見えていて、一つ一つの研究が、繋がって大きな流れになっていく様子は、実に壮麗であった。

建築雑誌Voi.104, No.1285 1989年5月号 梅村魁 東京大学名誉教授】



霞ヶ関ビル／写真提供・鹿島建設小堀研究所

東大退官後に、 夢が実現

東大退官の最終講義(昭和38年)で「過去を語るより、明日の発展を予見したい」「耐震構造の研究は今や新しいステップに入りました。日本のような地震国でも安全な超高層ビルが、極めて経済的に建設される見通しが現れてきました」と夢を語りました。

東京大学退官後、副社長として鹿島建設に招かれ、霞ヶ関ビルを皮切りに、浜松町の貿易センタービルをはじめ次々に設計を手掛けました。昭和40年代の高度経済成長期のピークであったから



新年会にて右から3人目 森永先生
同2人目 南雲校友会前会長

こそ実現する事ができ、「60才から70才は、僕の時代だね」と幸せそうに話していました。

鹿島建設入社後の武藤研究室では、これほと思う人材を大学や会社内で見い出し、どんどん仕事を任せました。レポートが提出されると翌朝にはチェックが完了。どんな小さな仕事でも全力投球でした。チェックは厳しく細かく、何度もだめ押しがでて、溜息をつきながらスタッフが部屋から出る事は日常茶飯事でした。しかし、スタッフの一生懸命な部分は評価して、良いところを見つけては誉めていました。

学問だけでなくお弟子さん達は、お酒のみ方も教わりました。今でも命日には、研究室の同窓会のように皆さんが集まり、盃をあげ父を偲んで下さっています。

大地のエネルギー

父の願いは「日本全体を視野に入れて、超高層ビルが健全に発展することで



浜松町の貿易センタービル

した」。昭和44年武藤構造力学研究所を設立し、公共建築はもとより、いろいろな企業が直接仕事を依頼する事ができるようになりました。「学者であって、学者らしくない父、何時も大地のエネルギーを感じさせるようなパワーを持ち、誰にでも心温かく、懐深く接していた父を、今また身近に感じております」。工学院大学、ならびに校友会の皆様の益々のご発展をお祈りして、私の話を終りに致します。

森永光子

(講演編集/NICHE編集部)

(参考文献:武藤清先生を偲ぶ 平成2年7月30日発行 発行人 武藤清先生追悼会 制作 鹿島出版会、建物写真提供:鹿島建設株式会社 小堀研究室金山弘雄)

profile

武藤清 年表

- 明治36年 1月29日生まれ。
- 大正11年 東京帝国大学
工学部建築学科卒業
- 昭和 6年 工学博士
- 10年 東京帝国大学工学部教授
- 30年 日本建築学会会長
- 35年 東京大学工学部長
- 38年 鹿島建設副社長
- 43年 科学技術庁長官賞、
紫綬褒章
- 45年 日本建築学会大賞
(耐震工学に関する研究)
- 51年 日本工業界会長、
日本学士院会員
- 52年 昭和天皇へ御進講
- 54年 文化功労賞
- 55年 恩賜発明賞
- 58年 文化勲章
- 平成 元年 3月12日 ご逝去

新刊書紹介 10冊

同窓会や建築系学科の教員など関係者が執筆しました新刊書をご紹介します。

1

「21世紀の環境創造を考える」

波多江健郎監修・奥田孝次著
鹿島出版
Tel 03-5561-2550
329ページ、2,800円＋税、
2004年7月15日 発行、A5版

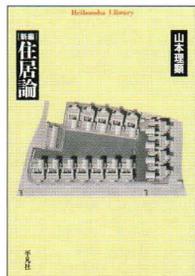


ベントマン・マッカイはマンフォード、エマソン、ソー等と親交があり、自然保護思想の解明派であった。本書はアメリカで活躍している異色の建築家が、アメリカの自然保護と地域計画の共生を実現したマッカイの巨人的手腕と業績に光をあてながら、20世紀の地域計画思想を紐解き21世紀の環境創造を探る啓蒙書である。(工学院大学名誉教授 波多江健郎)

2

平凡社ライブラリー492 「新編 住居論」

山本理顕
株式会社 平凡社
Tel 03-3818-0874
343ページ、1,500円＋税、
2004年3月10日発行、文庫版



〈家族〉という共同体の構造と関係から、その空間装置としての住居の役割を提示する。世界各地の集落のフィールドワークや思索と実践より形成された画期的な住居論。1993年に「住まいの図書出版局」より発刊された「住居論」の再刊ですが、それ以降の住居に関わる文章を加えました。ですからこの本は、学生時代から最近まで、住居に関わる思考を30年以上横断していることになります。

(工学院大学建築学科教授 山本理顕)

3

「日本建築史」

後藤治
共立出版株式会社
Tel 03-3947-2511
292ページ、3,800円＋税、
2003年7月10日初版、A5版



建築学の基礎シリーズ18巻の中の1冊。各時代別に解説した1～8章は、「建築と都市」「技法と構方」の点から紹介。歴史的建造物の保存を扱った9章からなる。本シリーズは、これから建築家・建築技術者を目指す学生を対象に。大学で学ぶべき標準的専門科目を取り上げ、「建築学の考え方と知識の基本と応用」をバランスよく修得できる大学教育テキストを意図した。

(工学院大学建築学科助教授 後藤治)

4

「建築生産」

遠藤和義分担執筆
市ヶ谷出版者
Tel 03-3265-3711
276ページ、3,200円＋税、
2004年3月30日 初版、A5版



事業企画から解体・リサイクルまで、21世紀の建築生産を学び、考えようとする建築系学生、若手建築実務者の必読書。大学教育・企業内の継続教育プログラム(CPD)に最適な決定版!松村秀一編著(帯封より)

(工学院大学建築学科教授 遠藤和義)

5

「アセット・マネジメント」

確率統計手法による資産管理運用
中村孝明著 鹿島出版会
監修:篠塚正宣
頁150ページ、2700円＋税、
2003年9月10日初版発行、A5版



証券化の普及と伴に、建築物は運用資産として認識されるようになった。これをうけ、リニューアル、建替え、補修や補強などのハード面と保険や証券化などのソフト面を融合した、より合理的な資産管理が求められている。本書はアセット・マネジメントによるリスク定量化技術ならびに具体的なマネジメントの方法を紹介している。不動産の証券化や運用実務に携わる方々はもとより、土木・建築の技術者、都市計画に携わる方々の必読書。
(工学院大学建築学科 1979(昭和54)年卒業、横田研究室)

6

「失敗に学ぶものづくり」

嵩英夫分担執
筆講談社
Tel 03-5395-3622
294ページ、1,800円＋税、
2003年10月10日 初版、B6版

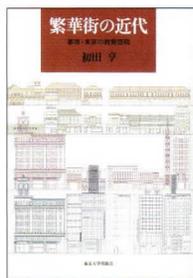


ものづくりに携わるすべての人必読!失敗は他の分野と過去から学べ!!失敗の法則。①ある分野でおこった失敗は、必ず別の分野でも起きている。②失敗は必ず時間とともに忘れ去られ、同じ失敗を繰り返す。だからこそ、失敗知識を共有しよう。そして自分たちの仕事に役立てよう、本書はそのための第一歩です。畑中洋太郎編者
(工学院大学建築学科教授 嵩(かさみ)英夫)

7

「繁華街の近代」

初田亨
東京大学出版会
Tel 03-3811-8814
278ページ、3,200円＋税、
2004年4月20日 初版、A5版

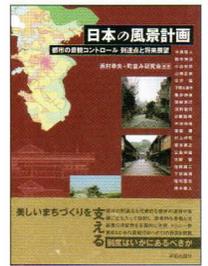


銀座煉瓦街、土蔵造りの商店街、勤工場、百貨店、カフェ、看板建築、アールデコの街並み、ショッピングという消費行動。江戸から東京へ。その変容を、建築・都市の視座から跡づけ、消費文化と空間の近代性を問い直す。建築史と文化史との間に架橋を果たしつつ、商業地の近代化を考察してきた著者の到達点を示す仕事。不揃いな町並みをつくりだす性格をこの国の都市は必然的に持っているとする本書の指摘は重要な示唆に富む【読売新聞書評】
(工学院大学建築学科教授 初田亨)

8

「日本の風景計画」

窪田亜矢分担執筆
学芸出版社
西村幸夫十町並み研究会著
200ページ、4000円＋税、
2003年6月30日発行、B5変版



我が国での風景計画は、試行錯誤を繰り返しながら、どのような制度の下で実践されてきたか。現在の到達点を、歴史的都市をはじめ一般市街地、郊外部での運用や実績に立ち入って検討し、政策的な意義と法制度の可能性を多面的に考察。「地域力」を惹きだす美しい風景の実現を目指す。これからの日本の景観行政への提言も掲載。窪田亜矢先生が町並み研究会の一メンバーとして分担執筆。
(工学院大学建築都市デザイン学科講師 窪田亜矢)

9

「都市農村計画の概念」

岩田俊二
農林統計協会
Tel 03-3492-2987
171ページ、2,500円＋税、
2004年8月20日 初版、A6版



都市及び農村に関わる計画資料を集めて都市農村計画の概念として整理したものである。今後、こうした計画論の実現の気運が醸成されるためにも行政担当者、研究者、他の多くの読者の目に本書が触れることを願望するものである。/序より抜粋(三重短期大学生生活科学科教授 岩田俊二 1993年工学院大学大学院建築学専攻修士過程修了後、1992年同大学で工学博士号取得)

10

「はちおうじ散歩絵図」

関谷真一他
NPO法人らいふ舎
Tel 0426-24-6322
300円(税込)
平成16年3月 B2版裏表

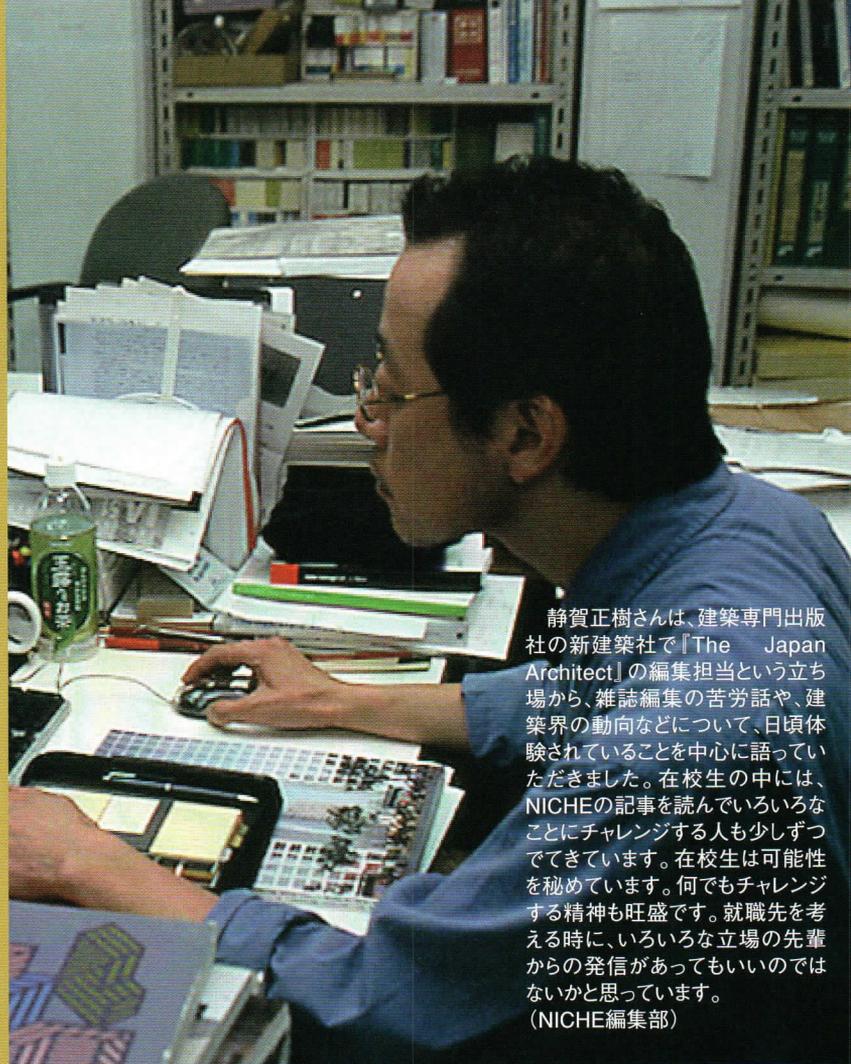


八王子のいいところ、ちょっと行ってみたいくなるようなところを紹介した絵図です。八王子には、河川の源流がたくさんあり、雑木林や、牧場、野菜畑、社寺林、湧水など身近な自然や農の風景がたくさん残っています。伝統的な建物・昔ながらのお祭りも、ニュータウン地区では近代的なまちなみが、わがまち八王子を歩いてみませんか。
(工学院大学建築学科 昭和56年卒)

ものづくりは 人との出会いと つながり

建築関係の雑誌編集に携わって

静賀正樹



静賀正樹さんは、建築専門出版社の新建築社で『The Japan Architect』の編集担当という立場から、雑誌編集の苦労話や、建築界の動向などについて、日頃体験されていることを中心に語っていただきました。在校生の中には、NICHEの記事を読んでいろいろなことにチャレンジする人も少しずつできています。在校生は可能性を秘めています。何でもチャレンジする精神も旺盛です。就職先を考える時に、いろいろな立場の先輩からの発信があってもいいのではないかと思います。(NICHE編集部)

日時／平成16年6月16日午後7～9時、場所／工学院大学28階、第4会議室 出席者／静賀正樹 新建築社 取材／谷口宗彦、加藤隆弘、大場光博(記録)

建築学科在学時代

父が建築の仕事をしていたせいもあって、子供の頃から建築を見たり実際に体験するのが好きでした。ところがいざ大学の設計の課題となると、自分の思い描く空間がなかなかたちにならない。編集の仕事もそうですが、自分の思い描く理想のものをかたちにするのは、本当に難しい。卒業設計でメダルを貰えたのは奇跡としか思えませんね(笑)。このインタビューの話があった時に、もっと適任の優等生がいらっしゃるのではといったんです。

在学時代から本をつくりたいという希望をもっていました。せっかく建築を勉強したのですから、本づくりと建築を結んだ建築専門出版社が最初からターゲットでした。ところが建築関係の出版社は定期採用をしているところがほとんどないんです。何社か面接を受けましたがどこも採用予定がなくて断られ、結局在学中には就職先が決まらず、毎日谷口研究室に顔を出していたところ、谷口先生から新建築社を紹介してもらい、面接を受けることができました。ちょうど新建築社が新しく住宅専門の雑誌『新

建築 住宅特集』を創刊するというところで、創刊スタッフとして拾ってもらうことができました。新建築に入社できたのは、谷口先生のおかげなのですが、私が取材・編集担当した谷口先生の「東川口の住宅一車椅子のための住まい(住宅特集9102)」で谷口先生が第8回吉岡賞を受賞されたので恩返しはもうすんだと思っています(笑)。

新建築社

新建築社の歴史は『新建築』の歴史と重なります。1925(大正14)年7月に大

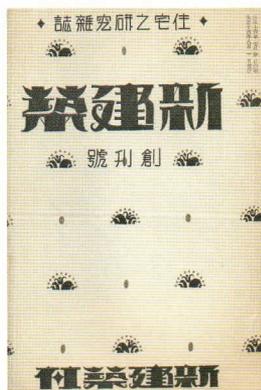
阪で創刊されました。創立者は吉岡保五郎です。

『新建築』の創刊号はサブタイトルが「住宅之研究雑誌」とあり、A5版の小さいサイズで、表紙デザインは元東大教授の吉武泰水先生の父上の吉武東里さんでした。当時の京都帝国大学教授の武田五一先生が国内初のビジュアル建築雑誌を目指していてバックアップして下さったと聞いています。創刊号ではフランク・ロイド・ライトの住宅も紹介されています。

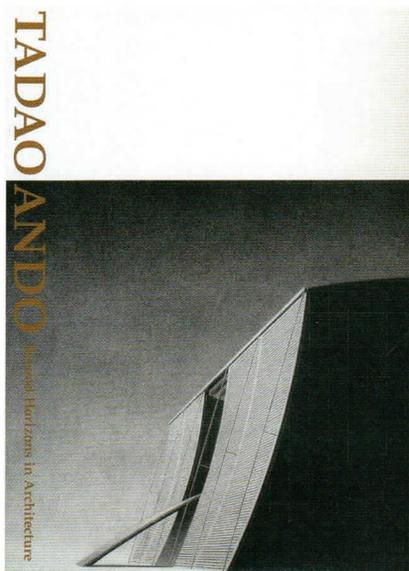
1930(昭和5)年に東京に進出。1946(昭和21)年に、戦争で1年間休刊しましたので、「新建築」の通刊番号は昭和の年号と同じです。

1956(昭和31)年、創立30周年を機に、英文版の新建築『The Japan Architect』を月刊で発行。海外向けに出版を始めました。シドニーのオペラハウスの設計で有名なヨーン・ウツソンさんの息子さんのキム・ウツソンさんに話を聞くと、お父さんの事務所にはズラッと『The Japan Architect』が並んでいたそうです。

1970(昭和55)年に、兄弟会社のエ



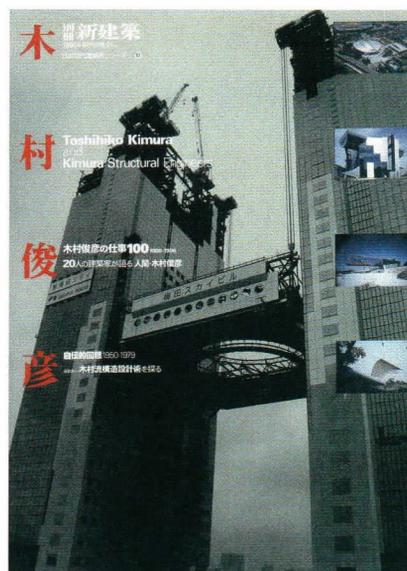
1925年 『新建築』創刊号



『安藤忠雄建築展——新たなる地平に向けて』



『建築20世紀』



『現代建築家シリーズ 木村俊彦』

一・アンド・ユー社から『A+U』が刊行され、海外の作品を日本国内に紹介し始めました。

1985年には住宅の専門雑誌として『新建築 住宅特集』が創刊されました。『新建築 住宅特集』は、5冊目までは季刊で、以降は月刊となりました。

1991年に『The Japan Architect』は和英併記の季刊誌となり、国内でも販売するようになりました。

株式会社 新建築社の業務の柱は雑誌の編集・製作・出版ですが、それ以外にも単行本や大手設計事務所・ゼネコン・各種団体のPR誌・作品集の編集・制作、コンペや講演会など多岐にわたっています。「新建築住宅設計競技」は、1965（昭和40）年から開始しており、アイデアコンペの走りといえるでしょう。1966（昭和41）年には初代社長の吉岡保五郎が財団法人吉岡文庫育英会を設立して、大学院博士・修士課程の学生に奨学金を出しています。これは初代社長が若手デザイナーを育てたいという意志をもって私財を投じてつくられたものです。

1960年代中盤以降はほとんどの写真を社内の写真部が撮影しており、そのアーカイブは質・量ともに世界に誇れるものとなっており、徐々にデジタルデータ化も並行して進められています。写真部には現在8名のカメラマンが在籍しています。

主な担当雑誌と連載

『安藤忠雄建築展——新たなる地平に向けて』

『The Japan Architect』

1985（昭和60）年、新建築社に入社して、『新建築 住宅特集』を最初に担

当しました。本をつくりたいと思っただけでも、編集に関してはまったくの素人です。いきなり「取材に行け」と出されて、帰ってきてどういう建築だったかを報告する。「ここがこうで、あそこがこうなって、きれいな建物でした」などという報告では駄目なんです。それまでは好きか嫌いかで建築を見ていましたが、それでは感想にしかならないんですね。良いか悪いか、掲載する意味があるかないか。それを判断しなくては取材にならない。とにかく住宅を年間100件近く取材し、時には年間200件以上も取材していました。今から振り返ると凄いな数をこなしていたものです。

『新建築 住宅特集』の担当は1991年までです。新建築社というのは、なかなか人使いの荒い会社で（笑）、月刊誌である『新建築 住宅特集』をやりながら、単行本や作品集も担当しました。1992（平成4）年に、池袋のセゾン美術館で、「安藤忠雄建築展——新たなる地平に向けて」が開催され、その図録を編集からレイアウトまですべてを担当しました。これはおかげさまでかなり売れまして、大変評価が高いものになりました。そのほかにも面白いものでは村野藤吾さんの生誕100周年を記念したスケッチ集などの制作にも携わることができました。何百枚と残されたスケッチには圧倒されましたね。

そのような仕事が認められたのか、『The Japan Architect』の編集長から「The Japan Architectをやってみないか」と誘われたんです。季刊誌は、月刊の『新建築』や『新建築 住宅特集』より早く情報を出せないという縛りがあったものの、1冊の雑誌に3カ月の時間

をかけられるのですから、企画や内容を練るための時間ができたことはよかったと思います。

1993（平成5）年に、『JA Library』という『The Japan Architect』の別冊をつくる企画がありました。これは正直いってあまり成功しませんで、わずか3冊で休刊状態になっています。ただ、よかったのはこの別冊をつくるにあたり、アメリカのグラフィックデザイナーのマッシュモヴィネリさんのところへ行ってレイアウトについてのレクチャーを受けられたことです。マッシュモは『A+U』の表紙デザインとレイアウトフォーマットをつくった人ですが、自分のつくった本と新しい別冊のプレゼンテーション資料をもってニューヨークの彼の事務所で4日間みっちりレイアウトデザインについて教わりました。本当はその別冊のレイアウトフォーマットを依頼したかったのですが、条件が折り合わず実現はしませんでした。しかしそのおかげでレクチャーを受けられたのは幸運でした。

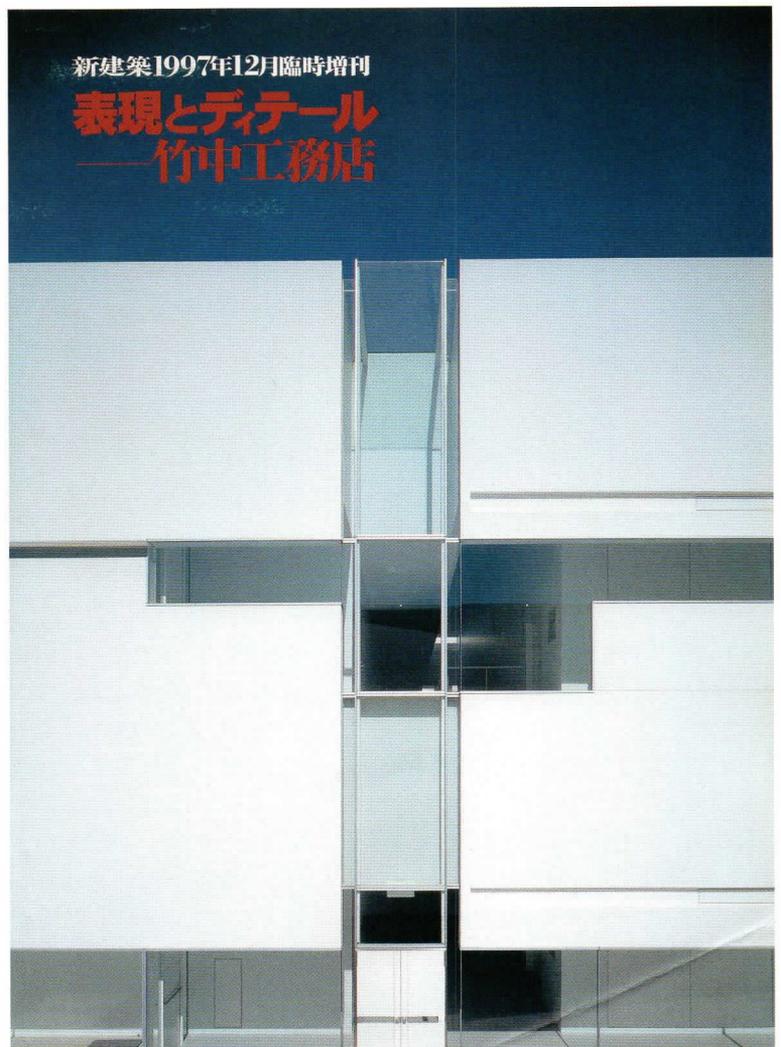
副編集長になったのが1998年でしたが、1996年あたりから、どのような特集内容にするのかをまかされるようになりました。年間4冊出版されるうち、1冊は個人のモノグラフ、1冊は年鑑となっていました。あとの2冊をどうしようかと思いましたが、「MODERN HOUSES」と「SPACE IN DETAIL」です。前者は現存しているモダン・ハウスを撮り下ろして集めるというものです。後者はサブタイトルに「空間表現とディテール」とつけたように、空間表現のためのディテールを集めたものです。このふたつの企画は大当たりしまして、いまだに版を重ねています。

『建築20世紀』

1989(昭和64年)年に、1991年に発刊する『建築20世紀』の企画がもちあがりました。2分冊して出版されることになるのですが総頁は700頁を超えるというボリュームのあるものです。これにスタッフとして参加できることになりました。カメラマンとふたりで海外へ撮影に出るのですが、私は北欧とパリ、イギリス全土が割り当てられました。イギリスでは1日に5~6件を撮影するというハードなものでした。出かける前にすべて撮影許可を得ていたのですが、短時間で撮影しなくてはならないのが大変でした。どこをどう撮るのか、事前調査を徹底的にやりました。撮影だけではなく編集作業も大変でしたが、勉強になった本です。

『現代建築家シリーズ木村俊彦』 「構造の系譜」

1996(平成8)年、『新建築』の臨時増刊号として出版されている「現代建築家シリーズ」の1冊として、構造家の木村俊彦さんを取りあげようという企画が通りました。海外ではアラップとかネルヴィら構造家の作品集が出版されていますが、国内でビジュアルな構造家の作品集は珍しかったですね。社内では危ぶむ声が多かったのですが、出してみたらけっこう売れたんです。私はまだ『The Japan Architect』の編集部にいたのですが、当時の『新建築』の編集長に「やらないか」と誘われ、「こんなに面白そうな仕事をほかのスタッフに渡してなるものか」と即答で引き受けました。建築家の作品集をつくった経験はあるのですが、もちろん構造家の作品集は初めてです。そこで、木村さんと話をし、新耐震法以降の作品の中から100件を選んで「木村俊彦の100の仕事」と題しました。また、磯崎新さんや谷口吉生さん、横文彦さんら、木村さんとよくコラボレートしている建築家20人に原稿を書いていただきました。この作品集以降、構造家が建築雑誌によく原稿を書くようになりましたし、この本をきっかけに始まった、木村先生の弟子にあたる渡辺邦夫さんとの『新建築』での連載「構造の系譜」も引き続き担当することになりました。この連載は、毎回、構造形式のひとつをテーマに原稿を書いていただくのですが、それに対する図版を集めるのに苦労しました。結局2年以上続く長期連載



『表現とディテール — 竹中工務店、素材で振り返る'90年代の空間と表現』

になりました。学生時代に構造計画の単位を落とした人間が、まさか構造をネタに本をつくるとは考えられませんか(笑)。

『表現とディテール — 竹中工務店』 「素材で振り返る'90年代の空間と表現」

『The Japan Architect』の編集をやりながら2足のわらじをはいて別の本をつくったり連載を担当するのはその後も続き、1997(平成9)年には『表現とディテール — 竹中工務店』をつくりました。『The Japan Architect』の「SPACE IN DETAIL」から発生した企画ですね。技術のバックアップのあるゼネコン設計部のディテールはどうなっているのかを紹介しようというものです。竹中工務店側に話をもちかけたところ、このようなスタイルの本ならばと、とんとん拍子で話がまとまった企画です。それまでよく見るディテールの本は、いってみれば「ディテールのためのディテール」を紹介するもので、それとは違うものにした

かったんです。まず、写真だけを見てもその建物がどんな建物か理解できるようにしました。掲載するディテールは、ディテールのためのディテール、危ないディテールは掲載しない。特殊解ではなく一般解として考えられるディテールを集めることにしました。これも評判がよかったものです。

一方、1999年からは『新建築』で、当時鹿島建設にいらっやした押野見邦英さんとの連載「素材で振り返る'90年代の空間と表現」を始めました。これはけっこうきつい連載でした。毎回、木とか鉄とかといった素材がテーマとして押野見さんから与えられ、それに適した建築を10件ほど探し出し、各事務所に図面資料を依頼します。次回打合せの時に、押野見さんから「この建築はその素材をどうやって使っているのか」「どんな納まりをしているのか」と質問があります。それにすべてその場で答えられるよう、図面を読み込んでおかななくてはなりません。短時間で図面を読み込むトレーニングになりましたね。

『The Japan Architect MODERN HOUSES』

『The Japan Architect ANTONIN RAYMOND』

『The Japan Architect』では、「SPACE IN DETAIL」と並んで評判のよいのが「MODERN HOUSES」という特集です。新規に撮り下ろしをしなくてはならないので、撮影のアポイントをとらなくてはなりません。ところが所有者が変わっていたりして苦労させられましたが、忘れられない号になりました。1996年と1998年にそれぞれ1冊ずつつくりました。その流れで、1999年にアントニン・レーモンドの特集号をつくることになりました。それまでレーモンドの作品は、実際見たことがあったのは群馬の音楽ホール、軽井沢の聖ポール教会、東京女子大学など数件で、どちらかというとなら興味の対象からは外れていました。ところが実際に編集・撮影作業を始めてみると、その空間の豊かさに驚かされました。なにより、建物の所有者がその建築とレーモンドさんを愛しているということが印象的でした。特に普通は見ることのできない住宅を見ることができたのは好運でした。

『あかりのいろ・は』

このレーモンド特集を最後にしばらく『The Japan Architect』を離れ、『新建築 住宅特集』の編集に携わるようになります。ここでは照明デザイナーの東海林弘靖さん(1983年工学院大学修士課程修了・伊藤ていじ研究室)さんと組んで『新建築 住宅特集』に2001年

から「あかりのいろ・は」という連載を始めました。東海林さんとは卒業以来ずっと会ってなくて、先にお話した「安藤忠雄建築展」のオープニングパーティでばったり会ったんです。私はこの展覧会の図録をつくったという、彼は会場の展示照明をやったというんです。そのうち何かいっしょにやりたいね、といていたのが、やっと実現できた企画です。同じ大学の出身者と組んでやる初めての仕事でした。連載開始後、『新建築』に移りますが、この連載だけは担当させてもらい、2年間続いた連載になりました。これまでとは違うジャンルのデザイナーとのやりとりは、よい刺激になりました。いづれ「照明」「あかり」で1冊まとめてみたいと思っています。

『環境とデザイン』

2003(平成15)年、『新建築』の年間テーマを「環境とデザイン」とし、1年を通して「環境」にまつわる記事をフューチャーしていこうと企画しました。これまで『新建築』はデザイン優先で「奇をてらった」ものが載る、といわれていたことが、このテーマを全面に押し出したことで、ずいぶんとお褒めの言葉をいただきました。それ以前でも、ちゃんと環境をテーマにした記事を発表してはいたんですが、やはりテーマを押し出したことで、印象が変わったようです。

ふたたび

『The Japan Architect』

2004(平成16)年3月、『The Japan Architect』にまた戻ることにになりまし

た。入社以来、一度も部署が変わっていない人間もいる一方で、私は比較的異動の多いほうですね。編集の部署では「A+U」以外はすべて経験していますから。復帰第1作となる『The Japan Architect』54号では、つくり方も手慣れており売れ行きも保証ができるということで「SPACE IN DETAIL IV」をまとめました。どうも、やっていくうちにエスカレートする癖があるようで、これまでのディテール特集の中でもっとも密度の高いものになりました。

あらためて自分の仕事を振り返ると、自分の好きなことばかりテーマにしていますね(笑)。

後輩の皆さんへのアドバイス

後輩のみなさんへアドバイスとのことですが、ダメ学生だった自分がアドバイスなんてできませんよ(笑)。口はばったいですが、一言いわせていただければ、人と人のネットワークが大事だということです。あれもこれも詳細に自分が知っている必要はないんです。浅く広い知識があればいい。「これについては誰に聞けばいいか」と教えてくれる人をいっぱい知っていた方が強い。ただ、ネットワークをつくるには、信頼される仕事をしなくてはならない。よいネットワークには自然と人が集まってきます。ものをつくるということは、人との出会い・つきあいがすべてだといっても過言ではないかもしれません。



静賀 正樹 (しずが まさき)

1961年静岡県生まれ、1985年3月工学院大学建築学科卒業(望月大介研究室)、1985年株式会社新建築社入社/『新建築 住宅特集』創刊スタッフとして編集部/企画編集部、『The Japan Architect』編集部を経て『新建築 住宅特集』副編集長、『新建築』副編集長/現在『The Japan Architect』編集担当、静岡県日本大学三島高等学校卒業

勤務先住所

113-8501 東京都文京区湯島2-31-2

株式会社 新建築社 [JA] 編集部

電話/03-3811-9375

FAX/03-3811-0243

URL <http://www.japan-architect.co.jp>

e-mail: shizuga@japan-architect.co.jp

座談会

社会人入学の同窓生が語る



工学院大学建築系学科同窓会主催
平成16年7月30日(金曜日)午後6時~8時30分/工学院大学新宿キャンパス 28階/
第一会議室 NICHE編集部事務局/田野邊幸裕、谷口宗彦、小野あゆみ、大場光博/記録

司会(NICHE 編集部)

「はじめに」大学卒業後一度社会に出てから、再び工学院大学の大学院に戻り学習する方が増えています。中には他大学から入学されたり、海外から来日し大学院で学ばれる方々もいらっしゃいます。海外と国内の他大学等からの出身者から男女2名の方々をお呼びし、大学院入学迄の苦労ばなしや、仕事をしながら日頃考えていることなどをお聞きました。

白蘭

1969(昭和44)年6月に、中国吉林省、長春の近く延吉で生まれました。高校は吉林省延辺第一高級中学出身です。それから中国東北部黒龍省のハルピン工業大学建築学科に1987(昭和62)年入学しました。病院建築が卒業テーマで、設計・論文をまとめました。ハルピン工業大学の先生が日本に何回も来ていて、日本の影響が強かったのと、参考に日本の雑

社会に 出てから、 再び学び続ける 大切さ

誌を見ていて何時か私も日本への留学を考えていました。1991(平成3)年、北京農業大学に就職しました。実際の設計の仕事とか建築学科の先生などを4年間しました。設計は集合住宅などでオフィスの設計もしました。

先ず1995(平成7)年に福岡大学建築学科に半年間研究生としてきました。そこで色々日本での事を本格的に考えました。それから工学院大学建築学科望月(大)研究室に半年間研究生を経験から、1996(平成8)年、工学院大学大学院修士課程に入学し2年間在学しました。中国にいた時に、住宅の仕事が多かったので、参考とし

て日本の雑誌を見ていて、望月大介先生の作品も見てました。修論のテーマは「異文化空間」、横浜中華街を分析しながら論文と設計でまとめました。中国と日本の文化を融合させた設計でした。

それから東京大学の研究生として1年間在学しました。ここでは建築の視点だけでなく、ITの視点からも考えてみて新しいものが生まれてくるだろうと思いはじめ、今はITの業務に携わり、ソフトの開発、システムの設計などのいろいろな仕事をしています。建築の視点とは違った視点から、新たなことができるのではないかと思いました。システムの設計も建築の設



白蘭さん

計と似ていて役に立ちます。

通信関係のIP電話とかをやっています。新しいものができてきます。自分で会社を立ち上げました。3年前に制御技術の特許を申請して、今年の1月に特許を取得しました。この技術も建築の住宅の耐震設計などに応用もできます。何とか建築との接点を考えて行きたいと思っています。

宮田奈津

女子美術大学芸術学部デザイン科を1997(平成9)年に卒業しました。卒業と同時に注文住宅の会社に就

て鍛えられる方がいいと女子美大の恩師にアドバイスを受けてきました。就職は建築学科卒業ではなかったため建築関連の就職先を探すのは困難でしたが、何とか熱意で最初の注文住宅の会社に就職しました。入社直後、同期に工学院大出身の仲間がいましたが、先輩から「立面図を仕上げといて」といわれても、建築学科卒の同期は何とか描けても、私はなかなか描けない。建築法規も同期は斜線計算ができるのに、私には何のこともかさっぱりわからない。みんながやってきた勉強はどんな



菊地勝広さん

職し、在職中の2000(平成12)年に社会人入学で大学院(谷口研究室)に入学しました。修士1年に在学中、前の会社が倒産し、その後に(株)住宅性能評価センターを立ち上げるというので立ち上げに参加し、1年間休学しました。その後修士2年に復学し、修了しました。修論のテーマは「駅型保育園の遊び空間に関する研究」、都内神奈川の3箇所の保育園を調査し、遊び空間の質について研究しました。

もともと、私は女子美大で空間デザインを専攻していたのですが、内容は建築ではなかったもので、途中でもっと建築学を学びたいと思った時はすでに3年生になっていました。しかし、進路を変えるのではなく、社会に出

ものだったのかとあせりを感じ、そのときから工学院大の大学院に入ることを考え、お金を貯めつつ、谷口研究室に顔を出すようになりました。

たしかに、大学時代はデザインを専攻したので、自分自身が学んできたカリキュラムに不足を感じました。しかし、すでに建築の実務経験も積みはじめていたことから、より専門的に建築学的な研究をしたいと考え、大学院から入学することにしました。

菊地勝広

1972(昭和47)年6月、宮城県生まれで20年間故郷で育ちました。

宮城県名取市にある国立宮城工業高等専門学校建築学科に5年生迄在学

し、高専在学中にゼネコンに研修にいたりして、現場に出る前にもっと勉強したいという気持ちが強くなり、また違う場所で学びたい気持ちになりました。

そして、高専卒業後の翌年に工学院大学2部建築学科の3年に編入しました。昼間は渋谷区初台にあります土木コンサルタント会社で設計補助の仕事を2年間続けました。1996(平成8)年、大学卒業後直ぐに大学院修士課程に入学し、2年間研究テーマは「煉瓦造と鉄筋コンクリート造の技術の歴史」。具体的には建築の構造形式の変遷を調べて、煉瓦造の実測調査などをやりました。

1923(大正12)年の関東大震災前は、RCは普及することが少なかったのに、軍事施設ではかなり早い時期から導入が進んでいました。軍事施設の研究が重要だとわかっていても相対的に研究が進んでいなく、ここに着眼点を見つけて少しずつ技術的な面から調べていきました。修論で研究の区切りはつけましたが、重要なテーマが見つかったと思いました。そして、このテーマを博士課程でも続けようと思い、研究生として進学の準備をしていましたが、その年の夏に横須賀市自然・人文博物館で近代建築史担当者の募集があり、

1998(平成10)年に就職しました。そして、学芸員資格を取得してから、2001(平成13)年に大学院の博士課程へ進学しました。

横須賀は旧海軍の基地、横須賀製鉄所のお膝元で、近代化の起点、時代の先端をいっていました。これらの地の一部は在日米海軍横須賀基地として使用され、基地の中には大量に近代建築が残っています。今は基地の中の歴史遺産を調査しています。近代建築を知っているものが職員の中で私一人しかいないので、産業遺産類全般の相談が舞い込んでいます。保存の危機が訪れると懸案事項がめじろ押しになります。

社会人で学ぶとなると目標を確り定めて計画的に研究を進める必要があるのですが、昨年から早期での学位取得を目標にして勉強を進めています。また、日々の多忙さに埋没しないように「一日に一回以上は勉強する」という緩やかな課題を自分に課して研究を進めています。もうひとつは本を書く目標があってもいいのかなとも思っています。これは、自分の為にも仕事の上でもプラスになる目標だと考えています。また、日常の業務の中にいろいろな貴重な体験が埋まっていますので、それもコツコツ文章にまとめて行きたいと思っています。



左からチョウ・ヨン・ファンさん、宮田奈津さん

チョウ・ヨン・ファン

1971(昭和46)年12月、韓国釜山生まれ。釜山は人口約400万人で、対馬の直ぐ北に位置しています。韓国第二の港のまちです。釜山の海東高校から1990(平成2)年に国立釜山大学に入学。大学1年在学後に1年半半軍隊へ入り、1994(平成6)年に釜山大学建築工学科に復学し、卒業設計をしました。1997(平成9)年に卒業して、釜山大学の大学院に入り、1999年に修士の学位を取りました。修論のテーマは「大韓帝國期における建築教育機関の成立過程に関する研究」です。韓国内にない資料を求めて、いつか日本に来たいと思っていました。



チョウ・ヨン・ファンさん

1999(平成11)年から釜山大学の助手を1年間している時に、HIF国際交流基金の招聘研究員のプログラムに応募して、2000(平成12)年9月に法政大学へ来ました。陣内秀信先生のもとで1年間学びましたが、ここで韓国に帰るより日本で博士を目指して都市に関する研究をしたいと相談したら、工学院大学の初田亨先生を紹介されました。

初田先生、陣内先生とも都市の近代化に関する専門家ですので、私も日本で学んだ手法で都市の門題を研究したいと思いました。現在は工学院大学大学院博士課

程後期在学中です。研究テーマは「韓国釜山の都市の変遷に関する研究」です。釜山のことにに関して商店街と商業地域、工業地域などの地域の特性を歴史的な関連性を持ってアプローチしていきたい。こういう視点は韓国内の研究者の今までの視点とは違うのではないかと考えたからです。

釜山は1407年から倭館があり、日本人によってマチの原形がつくられた都市です。今は市役所が北の方に移転しましたが、旧市役所の所がまちの中心でした。このところを研究のテーマとして分析しています。この地域は、明治期から日本人により埋め立てられ、日本人の居留地を広

げて今のまちになりました。釜山には昔から日本人が住んでいて、ここから朝鮮半島の各地に人々と資本が広がっていきました。洪沢栄一や大倉喜八郎なども釜山で商売をして利益をあげ、仁川やソウルにも伸びていきました。

これらのことを考えて建築と都市に関する勉強を日本でもっとやりたいなと思って日本に来ましたが、実は、日本語がまだ話せなくて、法政大学にいたときは英語で話していました。下手な日本語で苦勞していましたが、府中市が行なっているボランティアの日本語教室があることを知って、そこでお邪魔し、日

本語を学びました。

司会

在学中の事とか思い出して、どんな感想を持っていますか？

宮田奈津

ある程度準備してから大学院に入ればいいのかもわからないのですが、働きながら勉強するのも私はいいと思います。リアルな現場感覚を持ちつつ勉強することで、一瞬一瞬を大切に、時間の使い方を大切にされると思います。私の場合はちょうど現場検査を担当しておりましたので、建築現場から現場への移動の合間は、自分の論文をチェックしたり、必要な文献を目を通したり、細切れの時間を利用して論文を仕上げていきました。あとは会社のみなさんの協力で何日間か有給を取って調査したり、普段の土日を活用したり、時間の使い方をうまく調整すれば、仕事と研究との両立も可能になります。やはり職場の理解を得ていくことは必要ですね。

チョウ・ヨン・ファン

日本に来ていつも考えていることは『焦るな、早く何とかつくろうという事を感じるな』ということです。急ぐなということですね。韓国の人は軍

隊に入隊の経験もあるし、一般的に何となく早く早くという気持が強いんです。だから若い内に博士を取ったり、いい仕事を取ったりしなければいけないという先入観をもって焦りながら悩んでいる人が多いんです。その中で、このままではいかんと思ひまして、法政大学での研究員として過ごした1年間で日本から離れて韓国に帰ることより、日本に残って何とか頑張ってみようかな、足りない部分をもっと勉強したいなという気がしました。4年前に日本にくるといふ決意とともにここに残って自分をもっと磨こうとしたそのときの判断が、今はいい決断だったと感じています。

今年、うまく論文がまとめられて、韓国に帰ることになるかもしれないのですが、もし他の国へ行く機会が与えられるなら日本に来た時と同じように、更に外国へ向かっていくことも考えたいと思っています。韓国へ帰って、就職しなければという焦りもありますが、日本に来て足りない部分を感じているので、その部分を埋めて帰りたいなとも思っています。

白蘭

私は比較的新しいものを求めたいという気持があるんです。工学院大学で勉強し



北京農業大学建築設計事務所時代、設計中の白蘭さん

て、また東京大学でも勉強しようとして進学しましたが、それだけでは足りないなと思っていました。東大に入ってから建築の研究をズート続けようか、先端技術のITのことをどうしようかいろいろ悩みました。伸びていくには更に新しいことも吸収しないとダメなと思って決断し、ITの協会へ入ったりとか、最終的には新しい視点で何か新しいものを考えようかなと思っています。

司会

いつも早いスピードで動いているから風景が変わって見えるのではないですか、苦勞があっても、苦勞が後からついてくるようなとても早いスピードを体験されているような感じがしますね。

菊地勝広

大学時代は夜学だったので、昼間は仕事で実践しながら、夜は勉強という感じでした。もっと勉強したいという気持ちがありました。大学院では奨学金がとれ、初田先生や学生課の方の親身な対応のおかげで思いっきり勉強に専念できる環境が整いました。そして、博士課程に進もうと準備をしていた最中に、今の職場に出会いました。博士課程の進学前に約2年のブランクがありましたが、その2年間を自分の研究テーマの勉強時間に殆ど使えず、研究の上でもブランクを空けてしまいました。『一日に一回以上は勉強する』という考え方に気付いていればこのようなことは起きなかったと反省しています。

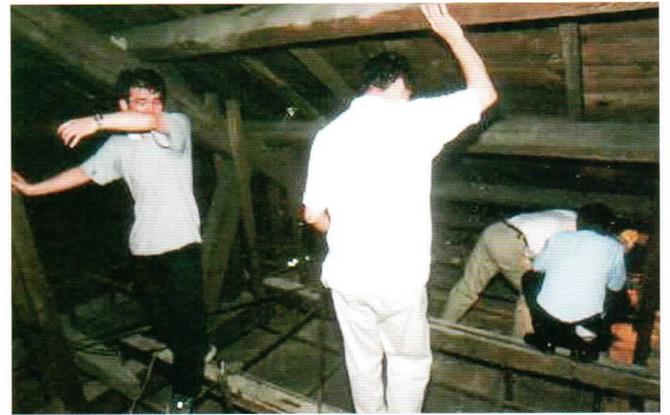
今の職場ではまちづくりの面とか、いろいろな方からも声が係りますので、行動力をつけてこれからもっと幅広く研究と仕事をやっていきたいと思っています。

司会

最後に大学の在校生に一言ずつ助言をお願いします。

宮田奈津

まず、工学院大学で学んで一番大きかったことは、多くの先輩方です。この業界で仕事をしていてお話してみると、実は工学院OBだった、ということがよくあります。私も工学院の卒業生だということ、大学、大学院、専門学校の人も、皆さん親しみを覚え



気温30度を超える中で、恩師の初田亨先生(中央後姿)等と共に旧横須賀製鉄所副首長官舎の小屋組みの学術調査中の菊地勝広さん(左)



左から菊地勝広、白蘭、チョウ・ヨン・ファン、宮田奈津、各みなさん

てくれます。やはり建築業界内の人脈的なメリットが大きいと実感しています。とても大切なことですね。

また、アルバイトをするなら、設計事務所だけでなく、例えばウェイトレスのアルバイトでも、学生の時にしか経験できない異業界を体験するいい機会です。そこで建築の諸条件、厨房の動きとか、関係のないようなことからでも建築のエッセンスを学べるように、人間的な経験として、色々な業界をのぞいてみる

のもいいんじゃないかな、と思います。

あとは建築学会に出ていくと、計画系が一寸論文数が少なく感じます。論文の数で大学の知名度があがる面もあります。在校生の皆さんも、もっと積極的にチャレンジしてみたいかがでしょうか。

チョウ・ヨン・ファン

いつも考えていることは、『違いを感じる、違いを探す』です。周りの人と同じようになってしまったら、普段のよう

になってしまいますので、気をつけて、他の人との違い、昨日の状況との違い、それを自分なりに感じて、探して、それを生かすことが重要だと思います。

私は今、外国での旅、勉強の最中なので、その違いを感じてどう生かすかが、論文以外に主要なテーマになっています。自分の人生の中で何を、どう生かしていこうとするのか、みなさんも自分なりに感じてそれを生かしていくことができればいい

などと思います。

韓国の軍隊での経験は、まず体力的にも精神的にも打たれ強くなりますね。悪い点は自分の個性がなくなり、上からの命令中心の生活で、考え方が全部同じようになってしまうことです。入隊して1年半から3年近く「考えるな」の状態だと、頭も悪くなって、英語の単語も直ぐ忘れてしまいます。しかし、外国での生活で、男としての何となく耐えていけるのは、軍隊の時の経験も大きく役

白蘭

びやくらん



1987年7月 中国・吉林省延辺第一高級中学 卒業

1991年7月 ハルビン工業大学建築学科 卒業

1991年8月～1995年4月 北京農業大学建築設計事務所 就職
(集合住宅及びオフィスの設計を担当)

1995年5月～9月 福岡大学 研究生

1995年10月～1996年3月 工学院大学大学院 研究生

1996年4月～1998年3月 工学院大学大学院工学研究科建築学専攻
修士課程修了(望月大介研究室)

1998年4月～1999年3月 東京大学 研究生

1999年4月～2001年5月 ユーブランニングオフィス(株)就職
(住宅金融公庫、フジテレビでシステム開発を担当)

2001年5月～現在 ADRC株式会社設立兼経営
(通信システム開発、ITソリューションプランの提示及び構築、
制御技術製品の開発及び販売)

エーディアルシー株式会社

115-0045東京都北区赤羽2-38-6 メゾンサカイ1F

電話03-3598-9886 Fax03-3598-9866

E-mail l_haku@yahoo.co.jp

宮田 奈津

みやた なつ



1997年3月 女子美術大学 芸術学部 デザイン科 卒業

1997年～2000年6月 株式会社 藤和 設計部

2000年～ 株式会社 住宅性能評価センター(現在に至る)

2000年4月 工学院大学大学院 工学研究科 建築学専攻
修士課程入学

2003年3月 工学院大学大学院 工学研究科 建築学専攻
修士課程修了(谷口研究室)

勤務先/(株)住宅性能評価センター 技術推進室

東京都新宿区新宿2-3-11 東京建物御苑前ビル5階

TEL/03-5367-8730

FAX/03-5367-8825

E-mail miyata@seinouhyouka.co.jp



P R O F I L E

にたっていると思います。

白蘭

私は先ず先に自分の専攻を確り身につけて、建築を確り勉強して、それプラス新しい刺激を受けながら、常に新しいものを取り入れる。そうすると新しい建築も生まれるのではないかと思います。新しい分野に骨子を持ってチャレンジする気持ちと、実行する力が大切です。ITの世界には、もう国境がないですよ。

菊地勝広

工学院大学に学芸員資格取得の制度がなかったので、今の職場に勤めてから1年以内に資格を取るよういわれましたので、玉川大学に編入して資格をとりました。今は工学院にも学芸員の取得制度があります。就職するのが難しい鎌倉の芸術文化振興財団に、学芸員の資格を持っていたので採用試験に応募が出来て入れた人が初田研究室の1年後輩にいます。学芸員の知

識は、博物館や美術館などの設計にも活かすこともできます。資格を取っておくことも大切かも知れませんが、時代の変り目のパスパートになりますし、何時何処で必要になるかわからないです。

目的意識をもって勉強する。ある程度自分で目指した勉強をやる。そうすると、自分でこういうことをやってきましたと人前で話すことができます。勉強への身の入り方も違います。工学院大学には、勉強をしたい人にはドンドン

勉強させてくれる校風があります。ある面、真面目すぎる面があるかもしれませんが、努力していきましょう。

司会

建築系学科同窓会では、みなさんの活躍を知っていただと共に、沢山の先輩が続いていけるように、応援していきたいと思います。ご出席のみなさん、貴重な時間をご協力戴きまして、ありがとうございました。

(NICHE編集部)

菊地 勝広

きくち かつひろ



1972年6月 宮城県に生まれる

1993年3月 国立宮城工業高等専門学校建築学科卒業

1998年3月 工学院大学大学院修士課程修了(初田研究室)
明治大正期における煉瓦造と鉄筋コンクリート造に関する技術史的研究

(第二回建築史交流会奨励賞)

1998年4月 工学院大学初田研究室研究生

●近代建築史の研究と博士課程への入学準備を進める

1998年9月22日 横須賀市自然・人文博物館に近代建築史担当として採用

1998年10月1日 玉川大学文学部教育学科(通信教育課程)3年次編入学

2000年1月 同大学同学部同学科 学芸員資格取得により退学

2000年4月 横須賀市自然・人文博物館学芸員補

2001年4月 横須賀市自然・人文博物館学芸員/
工学院大学大学院博士課程入学(初田研究室)

2004年3月 工学院大学大学院博士課程満期退学
(現在業務の傍ら博士論文を作成中)

勤務先/横須賀市自然・人文博物館 近代建築史担当

238-0016横須賀市深田台95

電話/046-824-3688

E-mail katsuhiko-kikuchi@city.yokosuka.kanagawa.jp

チヨウ・ヨン・ファン



1971年12月 韓国釜山生まれ

1990年2月 釜山海東高等学校卒業

1990年3月 国立釜山大学建築工学科入学

1990年10月~1993年4月 兵隊勤務

1997年2月 国立釜山大学建築工学科卒業

1997年3月 国立釜山大学大学院入学

1999年3月 国立釜山大学大学院卒業、修士課程修了

1999年3月~12月 釜山東義工業大学非常勤講師、
近代西洋建築史を講義

1999年10月~2000年8月 国立釜山大学建築工学科助手、
講義の補助と研究活動

2000年9月~2001年9月 日本国法政大学工学部招聘研究員
(Hosei International Fellowship)、

日韓間の近代建築史・都市史を研究(陣内秀信研究室)

2002年4月~現在 工学院大学大学院工学研究科
建築学専攻博士後期課程在学中(初田研究室)

連絡先/東京都新宿区西新宿1-24-2

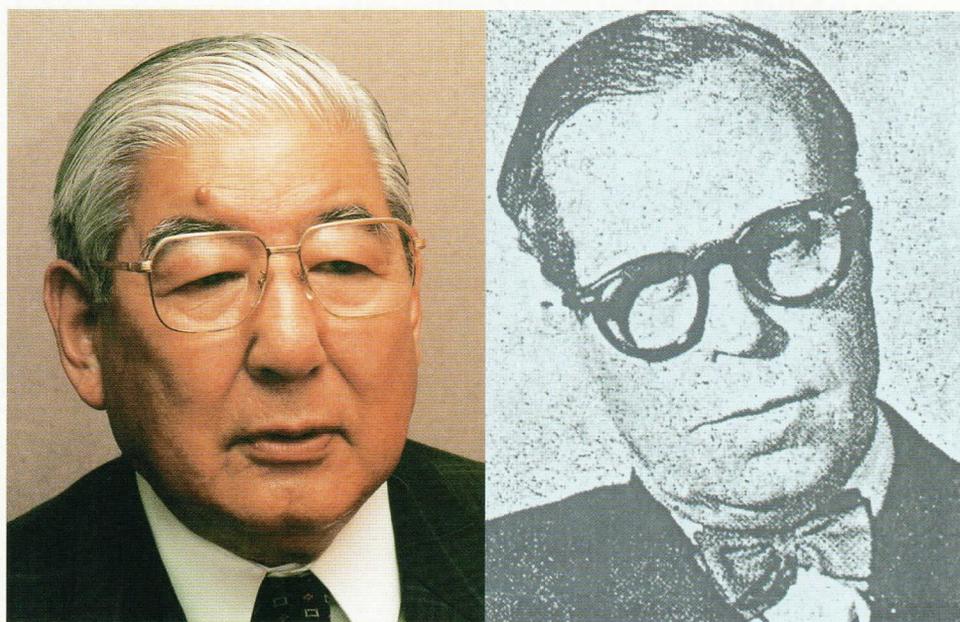
工学院大学大学院建築学専攻 初田研究室

電話・FAX 042-375-5582

E-mail julu111@yahoo.co.jp

J. L U I S S E R T

ホセ・ルイ・セルト



波多江健郎

ホセ・ルイ・セルト

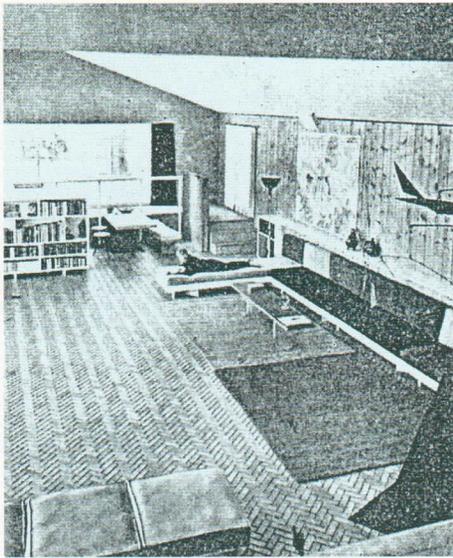
波多江健郎

(工学院大学名誉教授)

かつて、私はアムステルダムからバスでライン河に沿って南下し、アルプスを越えて地中海沿岸に下っていったことがあるが、アルプスを境にして北と南（地中海沿岸地方）が気候風土の違いばかりでなく、街のたたずまい、人々の生活の中に全く異質の世界があることを感じたわけである。建築的な表現をかりれば、北のそれは機能的であり、合理的な世界といえないこともない。それに反して南は機能より形を問題にする情感の世界であり、情緒の世界ともいうべきであろうか。（注1）

建築家ホセ・ルイ・セルトの生地バルセロナもご多聞にもれず情感豊かな地中海に面するスペイン最大の港町で、街の端々に地中海を通じて、いろいろの文化が流れ込んできたことが想像できる。

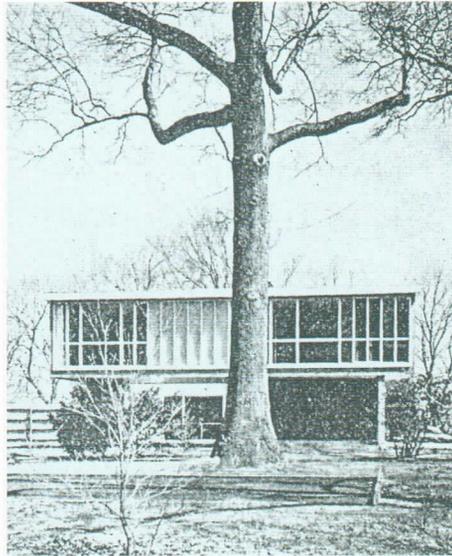
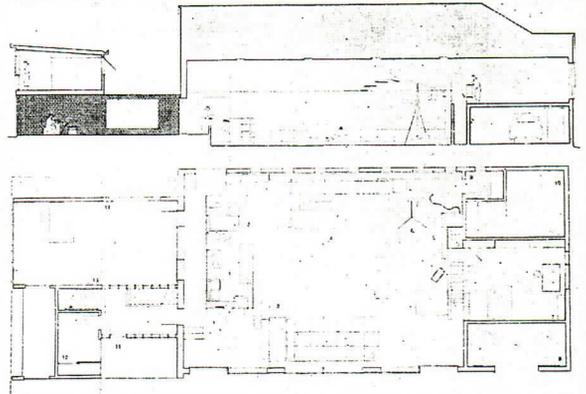
今私がセルトについて筆を取る時、バルセロナにあるガウディの作品バルケ・グエル（グエル児童公園）の子供の広場を取り巻く手摺の鮮やかな原色のタイルの色を思い浮かべるのはどうしたことだろうか。ガウディは感情的であり奔放的といわれているが、セルトは知的であり、合理的であるといわれている。バルセロナの生んだあまりにも対照的な建築家ということが私をして思い出されたのであろうか。しかし2人の建築家は地中海という太陽の強烈な光と美しい海の色に恵まれた環境の中に生まれ育ってきたわけで決して何等かかわりのない別人ではないようだ。ガウディはバルセロナにとどまり、執念ともいうべきサグラダファミリアにその一生を捧げてこの世を去ったが、地中海の豊かな表情に魅せられなが



室内

彼は現代建築に於ける地中海精神の支持者である。

ローカストヴァレーの家
平面図・断面図



外観

ローカストヴァレーの家

1. 厨房
2. ダイニング
3. ダイニング・テーブル
4. 談話コーナー
5. ファイアプレース
6. カルダールのモビール
7. 寝室
8. 浴室
9. ガレージ
10. 機関室
11. 入口
12. 更衣室
13. カバーされたポーチ
14. パティオ

ら幻想的であり、また童話的な夢に満ちた建築を残した。一方セルトはガウディとは異なり、バルセロナを離れて、自己の天分を延ばすことを考えていたようである。ギーティオンにいわせれば、天分の明らかな人は滋養物がたとえいかに離れていても動物が本能的にその源をたどるように彼は生まれ故郷からパリにあるコルビジュのアトリエに入ってしまった。

彼のプランナー及び建築家としての素地はコルビジュの下で育っていったようである。当時コルビジュは都市計画、住居、新しい建築の三位一体を考えていたが、セルトはそれに魅了されたように都市計画家としてカンディリスと共にスタートを切った。ニーマイヤー、前川、坂倉はその時代の貴重な友人であった。

コルビジュが現代建築に対する1つの貢献として壁を生氣のあるものにするのであったが、セルトは平坦な壁面に生氣を与えるために、スペイン、ムーア風の軽いフィルター状の木製スクリーンを日除けとして創始したが、セルトに対するコルビジュの影響はただ、単なる伝承という形ではなく、セルト自身の地中海精神を強めることに表れて

いる。スペインを離れて、パリ、ニューヨーク、ケンブリッジ等に住むことによって、彼の地中海に対する関心は益々強くなっていった。例えば彼は地中海の周辺にあるモスレムの家の中に生き続けてきたパティオを休息のセンターとして家の持つ本来の姿へかえることを主張している。これは後述の彼のケンブリッジの住宅の中に見事に具現化されている。彼は現代建築に於ける地中海精神の支持者である。

パリに於けるセルトに別の大きな影響を与えたのは彼を取りまく芸術家の群れであった。もともと彼の叔父はロックフェラー・センター入り口にある壁画を描いた有名な画家であったが、ピカソ、ミロ、カルダールなどは1936年、彼の万博スペイン・パビリオンの中で協働した仲間であった。ピカソの有名なゲルニカはこの協働の中に生まれた彼の芸術的な感性は、彼の本質的な地中海感性の上に、更に充実していったようである。

彼の建築作品として後述のハーバード大学既婚者学生寮、およびホリオークセンター等の格調高いマスのあつかいは、この時代に培われたもので

あろう。

更にもう一つ忘れてならないのはセルトとC・I・A・Mとの関係であろう。この会議の主題は都市問題に集中し、特に都市に於ける低所得層の住宅について絶えず議論されていたようである。この会議に於ける研究活動が彼をして南米、キューバ等の都市計画を創らしめた。

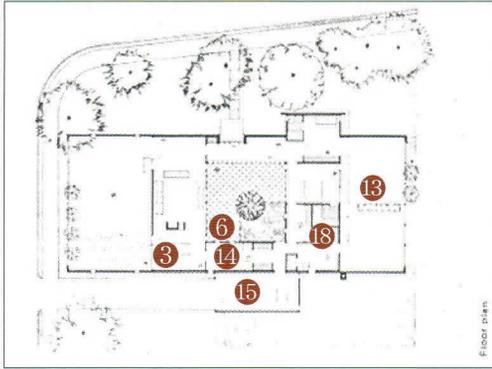
前述のハーバード大学既婚者学生寮、ホリオークセンターの中に脈打つヒューマニティは彼の都市のオルガニズムに対する深い認識と彼の豊かな感性の統合の結果と思われる。

ローカストヴァレーの家

1949

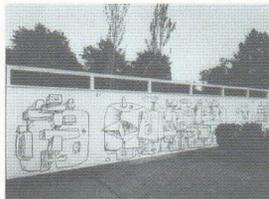
セルトはよく“1つの住宅の中に四季折々すべてを満足させることは不可能で、四季折々、環境の違った所に家を持つべきだ”とよくいっていたが、ここに紹介する家は彼の持家の中の代表的なものである。

大学院入学後、私達はこの家に招待された。この家のある周辺には森が多く、秋の気配を敏感に感ぜられたこ

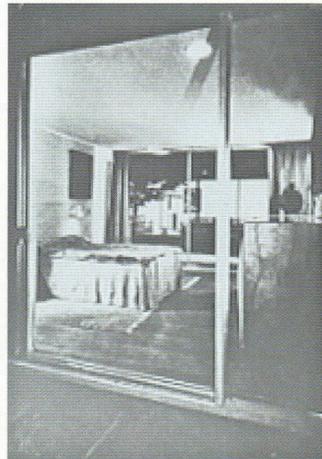


ケンブリッジの自邸

- 1. 入口
- 2. リビングルーム
- 3. ダイニングルーム
- 4. 屋外食事スペース
- 5. パティオ
- 6. 中央パティオ
- 7. 書斎
- 8. 客室
- 9. 主寝室
- 10. 更衣室
- 11. 寝室
- 12. 浴室
- 13. パティオ
- 14. 厨房
- 15. ガレージ



ケンブリッジの自邸



ケンブリッジの自邸寝室



ケンブリッジの自邸 パティオ

とを思い出す。

広々とした居間の中で教師、大学院学生総勢70~80人位いただろうか、とりとめのない話をしながら時間のたつのを忘れてしまったことがあった。

ニューヨーク近くにあるこの家はもともと馬小屋であったものを構造をそのままにして改造したものである。この納屋のような家はすべての目的に適應できる居間に改造され、高く感じられるプロポーションは馬小屋という機能によって決定されたものである。広さ36フィート×52フィート、高さ16フィートで居間、食堂、厨房が含まれ、寝室は違うレベルにあって、家具が間仕切りになっている。古いレンガ床はそのままに残され、厨房は部屋の一方にある。食事のためのスペースは厨房の延長上にある。この大きな空間の一方はファイアブレースであり、低い部分を見下ろす中2階にはベッドルームへ導く階段がある。アレキサンダー・カルダーはこの居間の隅に12の記念的なモビールをデザインした。

入口と寝室棟は今迄あった建物に

加えられ、古い建物と新しい建物の間にある大きさの違いのために難しい問題を提起したが、支柱の上に新しい棟を置くことによって、古いものに対して新しい部分がより大きく巧みにバランスがとれているように思われる。ベッドルームからは良い眺めと通風があり、プライバシーが保たれている。下のカバーされた空間は主な庭に開いている。この新しい棟にはガラスが間柱の間の詰め物として使われているが、これは構造を強調する経済的な解決方法であろう。

ケンブリッジの自邸
1958

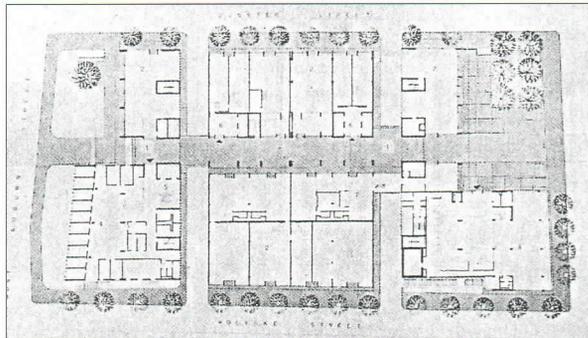
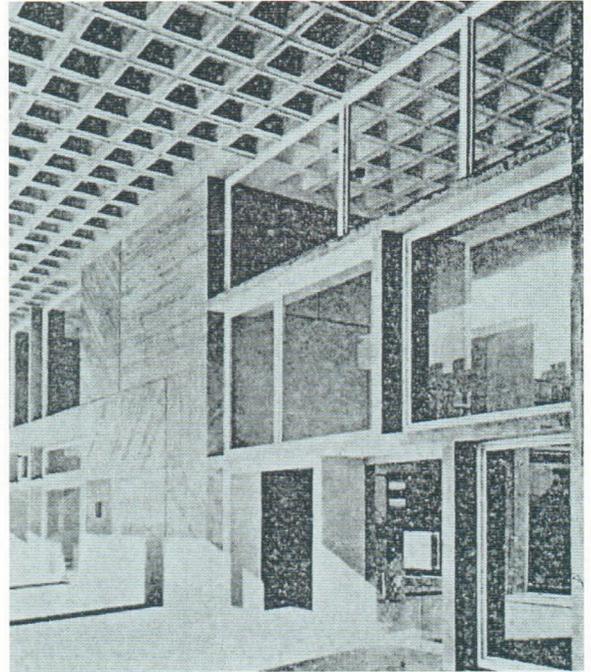
セルトはかつて南米の労働者のための住宅の中で所謂パティオ形式を採用したが、この自邸ではパティオを中心にして四方を囲んだ典型的なパティオハウスである。入口の広い廊下の右はパブリッククォーター(リビング及びダイニングルーム)左側はプライベ

ートクォーター(寝室)であり、その間に厨房、サービスクォーターをとり、それぞれのクォーターに対するパティオを配置してある。もともとパティオハウスは紀元前2,000年メソポタミアに於いて発展した単純なギリシャの家から二重のパティオを持つ全く異なったローマの別荘、あるいはギリシャ列柱に囲まれた中庭と古代ローマの中庭から壮大なローマ帝国の宮殿等の古典を通して発展し続けてきた。このようなパティオは地中海周辺にあるモスレムの家の中に生き続けてきたと思われる。

彼はこのパティオハウスの考えを都市居住の中に導入し、特にプライバシーの上で密度の高い地域に於ける土地の高度利用のために実現したわけである。特に道路に安全性のない所とか、また周辺の環境の好ましくない所では、一旦、中に入ればおそらく別の世界を感じさせることであろう。かってこのようなパティオハウス群をペルーの計画に採用し、都市の各住宅計画に広げた。これが更に発展すれば公共



ホリオークセンターのアーケード



ハーバード大学ホリオークセンター配置図

ハーバード大学
ホリオークセンター

1. アーケード
2. ショップ
3. 銀行
4. 診療所



的パティオ空間とか、ハーバードスクエアはお互いに直線的な公園システムによって繋げられ、広場から広場へとペDESTリアンの動きを容易にすると共に、人々を心から魅了するような空間となるであろう。

ハーバード大学 ホリオークセンター

Holyoke Center 1958-1965

ハーバードヤードは17世紀以来、塀の中に閉ざされてきたが、いまだにケンブリッジ市の中枢センターである。大学は校庭の広さの限界を越えて増築されて、長い間たってきたわけであるが、大学と社会の結びつきの中で、大学の研究機関と寄宿舎は都市の機構の中に溶け込むよう形でまとめられることが考えられる。セルトはこのホリオークセンターの中でこのことを考え実現した。この建物は病院を始め、学生、教師の相談室、管理室、集会室、商店、銀行等を含めた複合建築であ

る。その中でも特に広くて新しいショッピングアーケードは、ハーバードヤードとマウントアーバン通りに至る間を密接に結びつけ、外部壁面の強いアクセントと同様に建物に生氣と活気を与えている。

ハーバード大学 既婚者学生寮

1962~1964

教師、学生を主体とし教育コミュニティにとつてむしろマイナスの多い長い通勤とか、お互いに分散することをさげ、研究の中心近くに住み、両者が研究を通じてコミュニケーションを良くし、課外活動にも参画出来ることを考えて、この寮はハーバードキャンパスに近くチャールズ河に面して設計された。

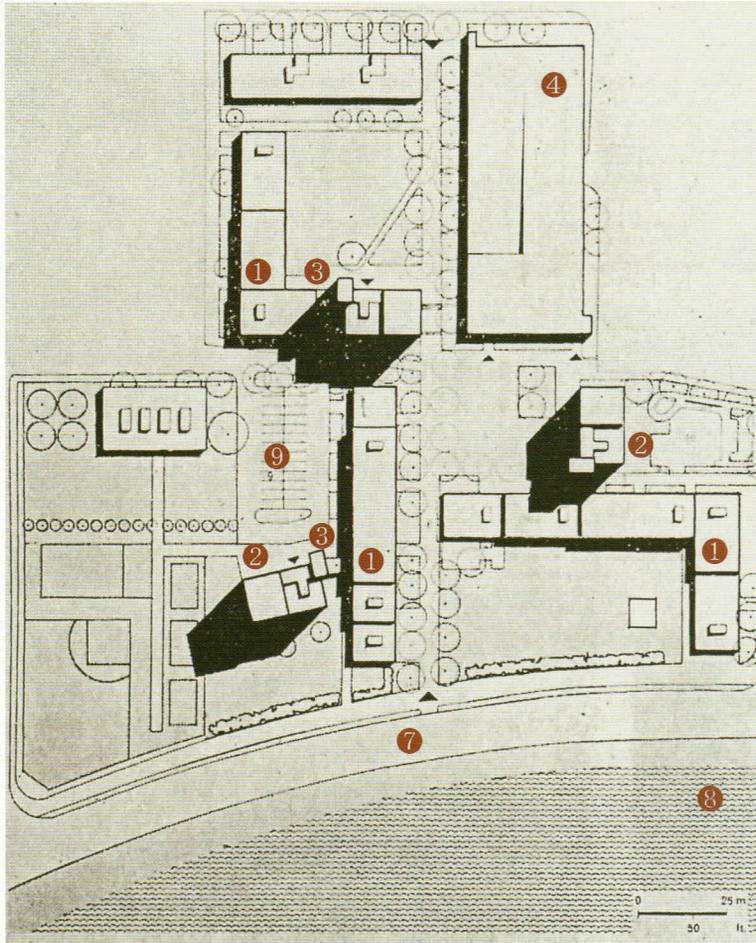
お互いに良く知ることが教育の始めであるとするならば、そのための施設を与えなければならない。お互いに人々が集まったり、グループミーティングしたり、セミナーを開いたり、あるいはは

日用品のショッピングから家事、日光浴に至る生活活動に対応する施設がそなわっている。したがって一階にはパブリックスペースとして、中央広場、集会室、セミナー室、ドラッグストア、その他の商店、洗濯室、乾燥室等がある。

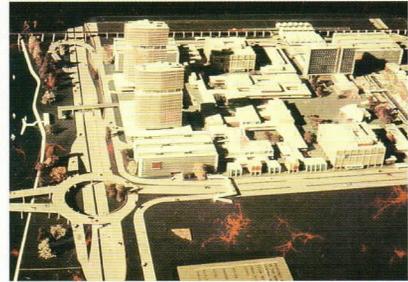
サーキュレーションとしてはアパートへの繋がり、駐車場との結びつき、あるいは歩行者を川岸へ導く散歩道などはこのパターンを決定するための基本的要素であつた。このサーキュレーションパターンは視覚的にコリダー階の窓割りによって強調され、橋は高い建物と低い建物とを結んでいる。ガレージ(350台)の出入り口は中央広場に開き、歩行者の散歩道は寮の中心部と川岸公園とを結び付けている。

学生は世界の各地から集まり、教師と話し合えるためのすべての施設をここに発見できるわけで、この寮は教育課程の延長であり、人間理解の延長でもある。

この中の低い建物は古い建物の高さ、ボリュームを思い出させ、3つの塔



ハーバード大学既婚者学生寮配置図



スプリングフィールド市 中心地計画模型

ハーバード大学既婚者学生寮

- 1. アパートブロック
- 2. タタイプアパート
- 3. ブリッジ
- (低層と高層アパートをつなぐ)
- 4. 駐車場
- 5. 中央広場
- 6. ペデストリアン・プロムナード
- 7. メモリアル・ドライブ
- 8. チャールズ河
- 9. 専用駐車スペース

Jose Luis Sert. 略年表

- 1902年 バルセロナに生まれる。
- 1929年 バルセロナにある建築学校を卒業。
- 1929～30年 パリのコルビジェ、ピエール・ジャンヌレと協同
- 1929～37年 バルセロナに事務所を開設。
- 1937～39年 パリ万博スペインパビリオンを設計、協同者にピカソ、ミロ、アルベイト、カウダー、ゴンザレス。
- 1939年 渡米。
- 1941～58年 ニューヨークで、ポールレスターウィナー、ポールシュルツと共に都市計画事務所を開設、南米諸都市の都市計画、アーバン・デザインを行なう。
- 1947～1955年 CIAM議長。
- 1954年 ハーバード大学デザイン学部ディーン建築学部教授。
- 1955年 ケンブリッジに事務所を開設。
- 1958～63年 事務所でジャクソン、グーリーザレスキー等と協同。
- 1963年～ セルト、ジャクソンの協同

事務所として至る。
 1983年 ホセ・ルイ・セルト死去
 注:1「アーバンデザイン」拙訳書
 吉坂隆正氏の推薦文を参照のこと。

●参考文献

- 1. José Luis Sert. Architecture City Planning Urban design by Kund Bastand. 特に作品、写真、作品紹介に当たって全面的に参考とした。
- 2. “ガウディ” 二川幸夫、東野芳明共著
- 3. 現代建築を創る人々 神代雄一郎編 “ホセ・ルイ・セルト” 榎文彦執筆
- 4. Can our city Survive. by Jose Luis Sert
- 5. 建築家協会1969年夏号「J. LUIS SERT 波多江健郎」

波多江健郎(はたえ たけお)

- 1922年 東京に生まれる。
- 1949年 早稲田大学理工学部建築学科卒業、NHK建築部勤務

- 1952年 アメリカに留学
- 1954年 ワシントン州立大学建築学部卒業
- 1955年 ハーバード大学建築学部大学院修了
- 1963年 工学院大学教授、早稲田大学講師 東京理科大学講師。米国テキサス州立大学フルブライト交換教授歴任
 現在工学院大学名誉教授

設計活動として波多江健郎建築研究室を設立・現在にいたる。主な作品に「矢吹中学校」「白河第一小学校」「上野毛幼稚園」「工学院大学富士吉田セミナー校舎(第二回ビエンナーレ国際建築コンクール特別賞、1983年)」「三鷹市公民館」「本覚寺本堂」「玉川診療センター」「フジサンロククリニック(沼津市建築賞、1981年)」、住宅など

著書に「アーバン、デザイン」(青銅社)、「ジオテクニクス」(訳、彰国社)、「タピオラ・フィンランドの田園都市」(鹿島出版会)など。

北澤興一

(1960年 卒業)

アントニン・レーモンドと私



昭和45年、アントニン・レーモンド展前夜のレセプション会場にて

はじめに

同窓会誌の編集者から原稿依頼があり、後輩のためにぜひ原稿を書いてくださいと頼まれ、ついに老人扱いされてしまいました。私が建築家として歩んだ経緯を書くことで、建築家を志す若い人達の参考になればと考えて筆をとることにしました。

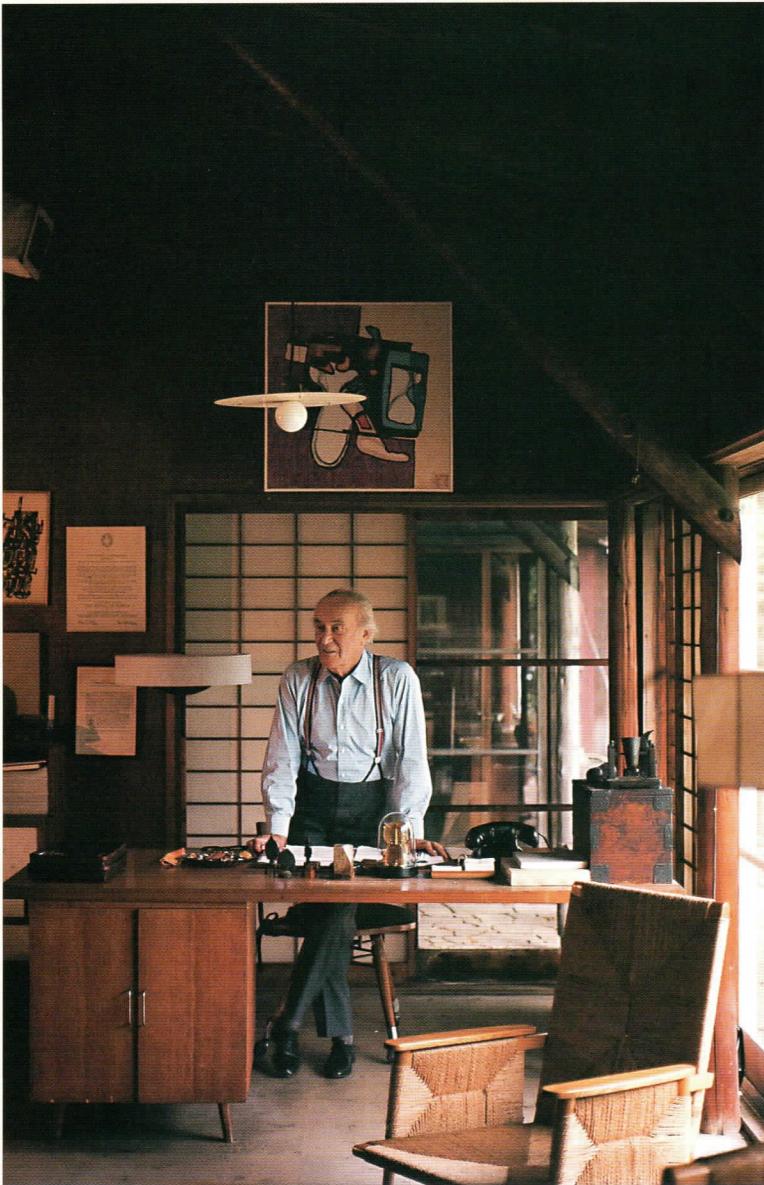
私は建築家としての生涯を50年とみて、大学を卒業して初めの10年間は修行の時代…尊敬できる建築家のもと

で、その人の理論、哲学を吸収し、その作法を全て学びとることが必要です。

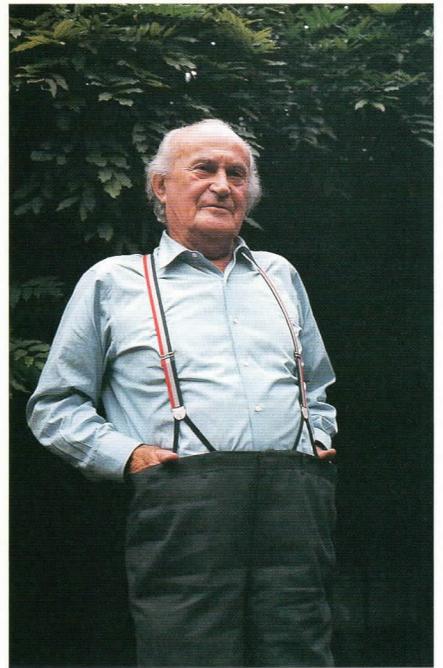
次の30年間は独立して、自分の作品をがむしゃらに数多く作ることである。眠る時間を惜しんで設計する。次の10年間はゆっくりとして、数少ない作品に時間を充分に使って、質の高さを追求したいものです。私はすでにこの領域に入っていることになりましたが、まだ満足された代表作はこれから設計できるものと信じております。

アントニン・レーモンドがよく言われていたことに「建築家は70歳にしてやっと

実現できなかった
設計でないと
作品と言えない



麻布自宅アトリエ、自分の机の前



麻布自宅前の庭で

認められ、それから代表作品が設計できるものです。」…確かに、世界的巨匠といわれる、ライト、コルビュジエ、ミース等の代表作は70歳を過ぎてからの作品であることです。そうすると私もこれから良い作品が造れそうでうれしくもなります。

レーモンドのもとに

私が工学院大学に入学したころは、すばらしい先生に恵まれていました。その中の一人に、フランク・ロイド・ライトのもとで働き、沢山の資料を持って帰られた天野太郎先生がいました。ライトの作品をスライドで紹介しながら、ライトについて語る先生の熱意に感激してしまい、私もライトの信奉者になってしまったことを覚えております。

それからはライトの作品をコピーしたり、先生の撮られたライト作品のネガから自分で四ツ切に拡大して、建築のすばらしさを実感したものです。

天野先生のもとで専攻科に残って遠藤新の研究をし、論文を完成させて就職を考えた時に、ライトのもとで設計したもう一人の建築家、アントニン・レーモンドさんのもとで修行したいと考えました。

ある知人に頼んでレーモンドさんに会えることとなった。卒業設計図面等を持参してお会いすると、学生の作品を見ても意味がない、建築は生きた芸術であり、実現できた設計でないと作品と言えない。実現した作品を持って来てください…紹介者が北澤、何かありますか…1週間いただければ設計図面と写真アルバムにして提出でき

ます…と答えてしまいました。学生ですから本来は完成した作品などあるはずがないのですが、私は幸いにも父親の関係から学生時代に五作品位はありました。その中から住宅で木造とRC造の二作品を整理して持参することができました。レーモンドの初対面の印象は長身で厳しい顔をした怖い人に見えました。おそろおそろ作品を説明したところ、RC造は良くないが木造は及第点をあげようと言われて、安堵したものでした。

しかし、1961年はレーモンド設計事務所に入社希望が40名もいたことから入社試験となり、心配しましたが何とか入社ができて、レーモンドのもとで建築家修行が始められたことは、私のその後の人生に大きな影響を与えることになりました。



軽井沢新スタジオ、南側の外観

軽井沢の生活

私がレーモンドに入所した時に、軽井沢新スタジオが完成しました(1962年)。そのスタジオはレーモンドの夏の創作活動のためで、毎年10名位のスタッフを連れて、2ヶ月間は麻布から移り住んで仕事をしました。私も毎年のように連れて行かれた事は貴重な体験でした。

その年の代表的な作品の基本設計をするのが仕事で、厳しいレーモンドのもとで毎日緊張してアトリエで仕事をしました。

麻布の事務所とは違い家庭的で親しみのある楽しい事も多くありました。週末にはレーモンドが顧客や友人を招いて庭でバーベキューを楽しんだり、皆で野山を散策したり、ある時はいきなり

ゴルフに連れて行かれて新軽ゴルフと一緒にプレイできたことは貴重な思い出となっています。軽井沢に於けるレーモンドの日課は、朝4時に起床して夫妻で犬を連れて近くを1時間散歩してから絵や彫刻を作って8時から朝食、9時から私達と設計の仕事をして12時から15時迄は昼食と自分達の事をして、夕方は私達の図面をチェックされる。夜は8時に就寝するという規則正しい生活がありました。

軽井沢新スタジオは1973年レーモンドが85歳になり、体調をくずして家族のいるアメリカのニューホープに帰国するまで使用されていました。その折に私が譲り受けて、レーモンドが使用していた状態とまったく変わり無く保存しています。家具、壁の絵画、棚上の陶器までもそのままの位置で、早くも31年間

が経過してしまいました。

木造建築で築後42年、屋根の茅葺きを1回葺き替えた以外はこれといった改修は必要がありませんでした。この事実は仕上材料の選択が完全であったことであり、細部に至る完成度の高さを実証するものです。アトリエは構造体をそのまま表して、杉丸太の組合せが美しくデザインされ、垂木、野地板が仕上げ材となっている。床はブナフローリング貼、壁はラワンロータリーベニヤ4mm目スカシ貼・真鍮釘打は塗装もなく、適度な汚れ色となっているもののまだ綺麗な状態です。建物は図面や写真で見ることより、その部屋で座ったり立ったりして生活することで、その空間の美しさを実感することが出来ます。平面の大きさ、天井の高さ等の比例が良く、障子の和紙を通して射る光は柔

その部屋で
座ったり立ったり
して生活する
ことで、
その空間の
美しさを
実感する
ことが
出来ます。



軽井沢新スタジオ、室内、アトリエ南側を観る

らしく、洋間でありながらどこか和風の暖かいインテリアとなっています。

レーモンドの設計理念が集約されているのがこの建物であります。自分自身の為に造られた建物で、保存されているものは軽井沢新スタジオだけであり、今後も大切に保存し偉大な建築家の業績を讃えて行くべきであります。

レーモンドの業績

レーモンド夫妻は1919年旧帝国ホテル建設のため、フランク・ロイド・ライトと共に来日しました。1973年85歳で日本を去るまで、主として日本で過ごしながらか数多くの近代建築を設計してきた日本近代建築の生みの親であり、常に指導的立場で活躍された建築家といえます。

アメリカの建築技術や新しい材料を日本に持ち込み、国産化しては創造的で意欲あふれる作品を次々と設計してきた人です。その作品は日本人建築家の模範となり、日本近代建築の発展に多大の影響を与えてきたこととなります。レーモンドは仕事に対して極めて厳格で一分の妥協もなく、つねに自分の信念を貫いた建築家でありました。その厳しい人格はそこで働く建築家に強い影響を与え、多くの建築家が巣立っていったのであります。

吉村順三先生も芸大を卒業されて1931年にレーモンド事務所に入所され、11年間をレーモンドさんのもとで働いておりました師弟の関係にあるわけです。同じように前川国男、杉山雅則、増沢洵さん等々、日本建築界の大家といわれる人たちがおり、その先生

方のもとに次の世代が育ち、その人脈系図を書いていくと、レーモンドの存在は計り知れないものになります。

麻布のアトリエでの生活は、所員数は80名と当時としては一番大きな設計事務所であり、そのうち8名がレーモンドの直接の仕事をする小部屋のスタッフでした。小部屋の空気は静かで緊張の連続で一日中横の所員と話もできない状態もあり、レーモンドが図面チェックに廻って来る午前と午後の4回くらいの時間が恐怖でもありました。図面を見て気に入らないところがあると大きな声で怒鳴ることから「雷が落ちる」と所員は表現していました。



麻布自宅南側外観

レーモンドの代表作品で 私の好きな作品は

- 1923年 霊南坂の自邸
- 1928年 アメリカ大使館 聖路加病院
- 1933年 軽井沢夏の家 聖ポール教会
- 1949年 リーダーズ・ダイジェスト社屋
- 1950年 麻布アトリエ及び自邸
- 1954年 聖アンセルモ教会
- 1958年 群馬音楽センター ICU総合計画
- 1962年 南山大学 立教高校 軽井沢新スタジオ
- 1965年 新発田カトリック教会
- 1968年 上智大学高層棟

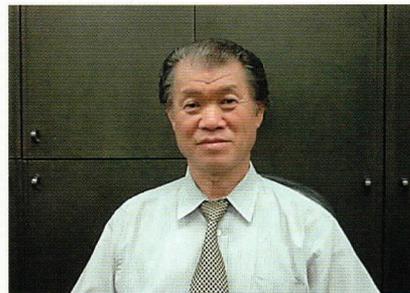
レーモンドの五原則 設計に於ける五つの原理、原則 (Principle)

- 簡素／単純：Simplest
- 自然／天然：Natural
- 経済的／節約：Economical
- 直截／機能的：Direct
- 正直／誠実：Honest

「最も簡素にして直截、機能的にして経済的、かつ自然なる物が真に完

き美を有する」

レーモンドの五原則は全ての設計に忠実に守られています。私も常に五原則は守ることを実行していきたいと願っております。



北澤興一

●略歴

- 1937年 長野県生
- 1960年 工学院大学建築学科卒
- 1961年 工学院大学建築計画専攻科卒
- 1961-71年 レーモンド建築設計事務所勤務
- 1972-77年 工学院大学建築学科講

師

1971年-現在 (株)北澤建築設計事務所主宰

●主な作品

- クリスチャンアカデミー(東京)
- 立花証券本社ビル(東京)
- 高輪カネオビル(東京)
- 河北町庁舎(宮城)
- 河北町立河北中学校(宮城)
- 長崎女子短期大学(長崎)
- 七条紙商事本社ビル(東京)
- 雄電社千葉支店(千葉)
- 東品川ビル(東京)
- KIハウス(東京)
- 青山オーバルビル(東京)

●卒業年度

1961年3月(天野研究室)

株式会社 北澤建築設計事務所
150-0045東京都渋谷区神泉町18-8
電話 03-5456-4151

自宅 東京都渋谷区松濤2-16-16
電話 03-3485-6690

NICHE on WWW

リンク仲間 大募集!

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1025/>

リンク記事募集のお知らせ!

NICHE WEB LINK!では、HPのリンク掲載希望者を随時募集しています。

ここでは人と人とのつながりを大切にしています。

同窓生が責任者であれば、関連企業・研究機関・ただのお友達など仲間のジャンルは問いません。

2人以上1組で1ページ掲載する予定です。

下記の必要事項を記載・添付の上、NICHE-WEB 編集局までメールにてお問い合わせください。

1. LINK 仲間の名称 例) 居酒屋仲間、つり仲間、餅つき仲間、ゴルフ仲間などなど
2. LINK 仲間の紹介 200 字程度
3. 各人の名前、在籍時の研究室、卒業年
4. 各人の HP アドレス (画像アイコンは NICHE-WEB サイトで作成)
5. 各人の顔写真 (WEB 上に掲載可能なもの)

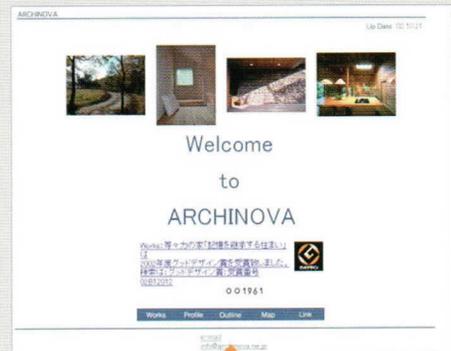
応募先: NICHE-WEB 編集局 臨時アドレス niche1025@yahoo.co.jp

記事編集: NICHE-WEB 編集局 担当 鯉坂



工学院大学建築系学科同窓会オフィシャルホームページ

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1025/>



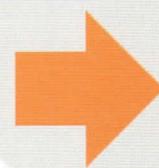
Step3
あなたのページ



Step2
同窓会へのコメント



Click!



Step1
同窓会リンク

応募先: NICHE-WEB 編集局 臨時アドレス niche1025@yahoo.co.jp
記事編集: NICHE-WEB 担当 鯉坂
NICHE WEB LINK の感想はこちらまで!

明治神宮外苑のシンボル「絵画館」を設計した

小林正紹

[こばやし・まさつぐ]



聖徳記念絵画館は、明治天皇一代のでき事を当代一流の画家が描いた日本画、洋画80点が展示してある。建物は、鉄筋コンクリート造り花崗岩表装の堂々としたもので、国民の献金をもとに大正15年10月完成した。東西112m、塔の高さ32m、建築面積2,500㎡である。展示されている絵画は、すべてが縦3m、横2.5mで、日本画、洋画の別も各40点ずつである。明治天皇の御誕生から御大葬までの明治史が絵でわかるようになっている。9時～16時30分まで。有料。
(『はとバスファンの東京ガイド・東京名所図絵』／共著)

密田あきら・さかきまこと・久保靖夫／鷹書房／1979年

と、はとバスで案内される「聖徳記念絵画館」の設計者は、何と我が工学院大学建築系学科の先輩であった。——小林正紹。しかし、正紹は、「絵画館」も相当な作品だけれども、もっと凄い建築を設計していたのだ。

在学中に大熊喜邦にスカウトされて大蔵省に

小林正紹は1890年(明治23年)11月28日、東京・麹町区紀尾井町に生まれた。1909年(明治42年)2月に工手学校建築科を卒業する。第39回生にあたり、夜間である。夜間ということは、昼間は働いていたわけで、この勤務先が半端ではない。大蔵省臨時建築部である。当時の官庁建築を全て仕切っていたのが、この大蔵省臨時建築部だった。逆算すれば卒業の3年前の1906年(明治39年)に正紹は工手学校に入学するのだが、このときの教授に大熊喜邦がいた。

大熊喜邦は、大蔵省臨時建築部、内務省、文部省と生涯の大半を官庁営繕に捧げた建築家であるが、一方で江戸時代の建築研究にも貴重な足跡を残した明治建築界の重鎮の一人である。ちなみに、民家風現代住宅を開拓した大熊喜英は息子、大成建設設計部に在籍した大熊喜威は孫である。

この大熊喜邦に認められて、正紹は大蔵省臨時建築部に勤務することになるのである。当時の月俸、つまり月給は8円であった。公務員の初任給が50円、巡査の初任給が12円、大工の手間賃が一日1円であるから、ブランド先の割には安月給である。

ついでに当時の大蔵省臨時建築部の主な陣容に触れておく。部長に妻木頼黄^{うらお}、技師に矢橋賢吉、大熊喜邦、武田五一がいた。妻木は、辰野金吾^{ていりつ}と鼎立する明治建築界の巨匠の一人で、“学術の辰野、宮廷の片山、官僚の妻木”と巷間で呼ばれていた。妻木の辰野に対するライバル心は激烈で、その紅蓮の炎と燃える想いの銚先は、一気に自分の職場である大蔵省臨時建築部に注がれた。矢橋賢吉は大蔵省営繕に一生を貫き、武田五一は京都大学に建築学科を創設した人である。

そんな今でも日本各地に作品を数多く残している錚々たる建築家たちを上司に仰ぎ、正紹は57年間を“国会職員”として勤め上げる。57年の歳月を想えば、人生を全うした、あるいは生涯をかけたと言ってもいいであろう。まさに正紹にとって、大熊喜邦は恩人となった。「今日、自分があるのは大熊部長のおかげです」——正紹は、後年、よくこう述懐していたという。“先生”ではなく“部長”と呼んでいたところに、恩師というよりは指導者としての喜邦に尊敬と感謝を抱いていたのであろう。



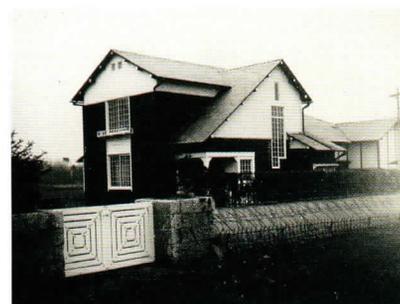
自宅の玄関にて(1920年頃)

年譜しるに記される正紹の最初の仕事は、勸業展覧会ぼひりおんの施設群である。この勸業展覧会なるものが、サッパリ判らない。主催、趣旨、規模、内容……どんな辞書・事典にも歴史年表にも記載がない。ただ、インターネットの検索が1件だけアクセスしてくれ、それは藤田嗣治の略歴で「1911年（明治44年）、東京勸業展覧会に出品」とあった。正紹は、第2回（1912年）の「セセッション式端艇倶楽部」を、また第3回（1913年）の「記念噴水」を担当した。二つがどんな恰好よすがをしていたのか、これも調べる縁がない。が、自らの作品に“セセッション式”とするところに近代化に向けて揺籃する時代の一途さが伺えはしないか。

そして1914年（大正3年）、東京・上野公園を会場にして開催された大正博覧会にも、正紹はパビリオンを担当している。「大資材木商陳列場」である。これは外観の写真が一枚、残っている。平面は多角形（五角形？）で、銅板葺きの寄棟の屋根が庇の部分で文様を描くという、なかなか洒落た四阿風の建築である。

コンペ1等賞金で自邸を建てる

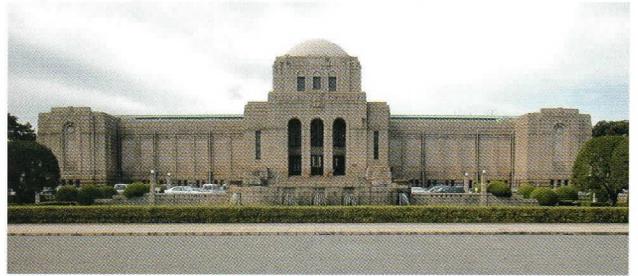
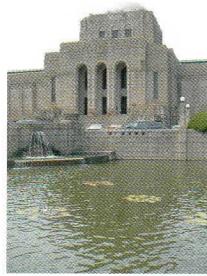
さあ、「絵画館」である。設計競技であった。——「聖徳記念絵画館及葬場殿址記念建造物設計競技」。設計者：小林正紹の名で今も建っているのだから、コンペの1等も、もちろん正紹である。明治神宮外苑のシンボルとなる「絵画館」がコンペによりどんな建築になるのか、社会は熱い注目を寄せていた。それは、発表を伝える新聞の扱いからも判る。「東京朝日新聞」「時事新報」「読売新聞」などが大々的に報じている。見出しも、凄い。「1等當選は全然獨創の名案」「審査員が舌を捲いた獨創の大傑作」が並ぶなかで、「工手學校を出た丈」なんていうフレーズもある。ひたむきな時代の匂いが濃厚に漂ってきそうだ。



自邸



「聖徳記念絵画館及葬場殿址記念建造物設計図」一等：小林正紹案



2004年「絵画館」

出典は明らかではないが、後年(とはいっても顔写真と文字使いから察するに、発表時からそれほど経ってはいないと思う)、「絵画館」の設計者を紹介した雑誌で、正紹はこう語っている。

あれは大正七年の夏、私の廿八才の時でした。毎日毎晩、私は設計募集に應じる為懸命に仕事をしていました。或晩のこと、蚊に食われ乍ら二階でコツコツやっていると、前の家の2階にも矢張り建築の本を抜げて頻りに勉強している人がある。どうもをかしい。

さては此人も私と同じく設計の応募をする人かも知れない。さう思ふと妙に競争心が湧いて来ましてね、どうもちとして居られない。「よし、負けるものか、かうなれば競争だ」。私も張合ひが出て来て、夜なども仲々眠れなかったものです。

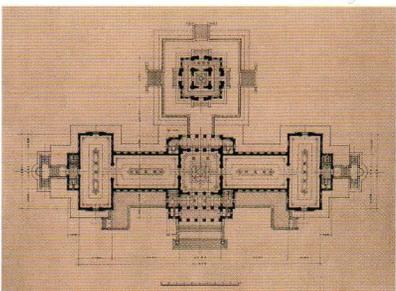
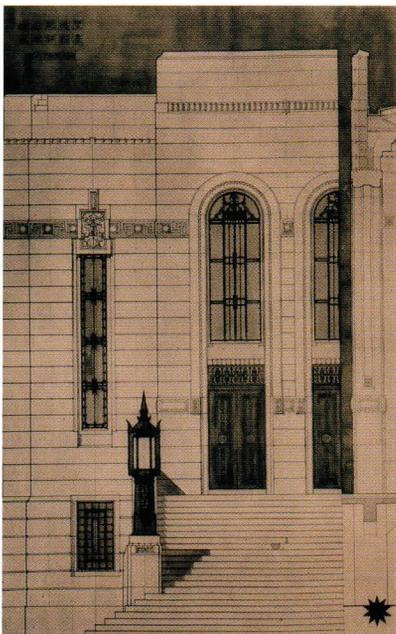
私の設計が出来上った頃のある晩でした。ひょっと見ると、向ひ側の二階には何時の間に来たのか、大きな設計図が壁に張ってあります。

「はい、あ」かうなると私も唯ちと眺めているわけにはいきません。妙に探偵気分が手伝って、早速古びた望遠鏡を手にとって注意深い眼を向けると、向ふの構図が手にとる様にハッキリ見えるぢありませんか。私のとは丸で違った設計でしたが、何だか私のよりは出来が良い様に思へてならないのです。発表の日迄は随分氣に病んだものでしたが、いざ発表になって一等当選で五千圓の金が舞ひ込んだ時は全く夢としか思へませんでしたよ。

一般社会がこれほど注目したのだから、建築界だって燃えないはずがない。150通の応募のなかには、“老大家”も数多くいた。なんとって、正紹に続く当選者の名前が凄い。2等1席:渡辺仁、2等2席:長谷部鋭吉、3等:竹腰健造、下元連、吉武東里。渡辺仁は「服部時計店(現・和光)」「第一生命館」「東京帝室博物館(現・東京国立博物館本館)」の設計者として、長谷部鋭吉と竹腰健造は、設計事務所の最大手たる隆盛を今日も誇るかの日建設の創設者として、下元連は「旧・首相官邸」の設計者と同時に、わが工学院大学建築学科の中興の祖たる教育者として、いずれも日本の近代建築史に重要な足跡を残す。もともとこの時は「當選者は皆、新進の人」で、正紹より2歳～5歳、年長であった。もう一人の説明がないぞ、はい……吉武東里ですね。吉武は、後に正紹と製図板を並べ“ある施設”の図面を一緒に引くことになる。

本人も語っているように、正紹は「絵画館」のコンペ1等当選により、5,000円の賞金を得た。現在の2,000万円である。この賞金で、正紹は東京・高円寺に家を建てた。正確に言えば、すでに計画していた自邸を、いわゆる“おかぐら”で2階建てにした。窓回りなどに“図案”を得意とした正紹のこだわりが横溢している。本人は、低い門扉のデザインがことのほか気に入っていたそうだ。残念ながら、今はもうない。

——「絵画館」は、コンペから8年後の1926年(大正15年)に竣工する。その間に正紹は、これも彼の代表作とされる「枢密院(現・皇宮警察本部)」を1922年(大正11年)に、「北海道拓殖銀行小樽支店(現・小樽ホテル)」を1923年(大正12年)に、矢橋賢吉とともに手掛けている。



「絵画館」コンペ応募図面

小林 正紹

同窓の皆様は「堀商店」をご存知だろうか。建築に携わっておられて知らなければ、モグリである。建築金物、特に鍵を、建築の重要な表現要素の一つとして市民権を獲得させた老舗である。今も新橋2丁目の角に残るこの「堀商店」の社屋の設計者が、小林正紹である。竣工は1932年（昭和7年）。

オーナーと正紹の関係は定かではないが、多くの大物・一流建築家と付き合いがあったであろう堀商店が、本社屋の設計を正紹に頼むとは、嬉しいじゃありませんか。

……さらに西端部に階段室が設けられ、ここだけは垂直を強調する意匠とし、サラセン風の3階分通しの縦窓がテラコッタで縁取りされており注目される。……とりわけ主要取扱品である鍵に因んだモチーフをレリーフにした窓部のスパンドレルは興味深い。さまざまな物語が読みとれよう。

（『総覧日本の建築第3巻／東京』／新建築社／1987年）

という藤原恵洋の解説から逆読みしていくと、鍵や建築金物にも求められる装飾性を、正紹の「枢密院」や「北海道拓殖銀行小樽支店」「絵画館」の建築が最も理想の形で発揮していたからではないか。

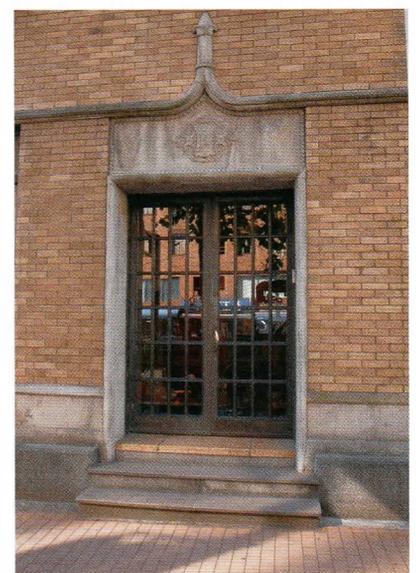
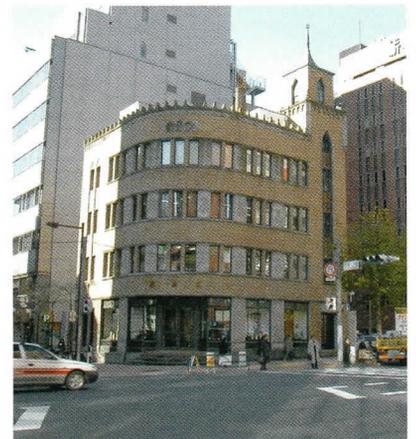
一体「国会議事堂」の設計者は誰なんだろう

さて、小林正紹の畢生の^{ひっせい}大仕事である。これが、凄い。「国会議事堂」である。かねがね筆者は、古今東西で最も摩訶不思議な建築が、日本の「国会議事堂」だと信じて疑わない。もとより和風ではない。しかし洋風……ゴシックでもロマネスクでもない。もちろん、どこの国にもないオリジナルなスタイルを求めたのは判るが、結局、無国籍建築になってしまっているのだ。こんな得体の知れない建築が、わが国の“ホワイトハウス”でいいのか。

詩人の高村光太郎は『事変はもう四年を越す』のなかで「遠く悲しくさむぎむと／墓のやうな議事堂の瘦せたドーム」と詠んだ。さすがにこれほど感性豊かに表現できないけれども、この“墓のやうな瘦せたドーム”の設計者が小林正紹だなんて、どうしたらいいのでしょうか。

もっとも、「国会議事堂」の設計者については諸説紛々ある。だいたい建設までに紆余曲折があった。プロジェクト自体は、1886年（明治19年）の臨時建築局設置まで遡る。竣工が1936年（昭和11年）だから、なんと50年……半世紀を費やしたことになる。まあ、わが国を代表する最高峰の建築だから、いろいろな人たちのいろいろな思惑が絡んで、それを解くのに50年を数えてしまったのだろうが、ここで忘れてはならないのは、正紹の大蔵省臨時建築部時代、彼の背後では、ずっと「国会議事堂」建設の河が流れていたことだ。そもそも大蔵省臨時建築部の“臨時”が求めた最大の官庁建築が「国会議事堂」に他ならなかった。

「国会議事堂」意匠設計懸賞募集が1918年（大正7年）に官報広告された。「絵画館」のコンペの当選発表された年である。この「国会議事堂」のコンペにも、正紹は参加していた。が、さすがに自分の勤める役所の募集に躊躇いがあったのか、実弟の公保敏雄の名前で応募していた。118件が集まり、正紹は当選の20件のなかに残った。



「堀ビル」

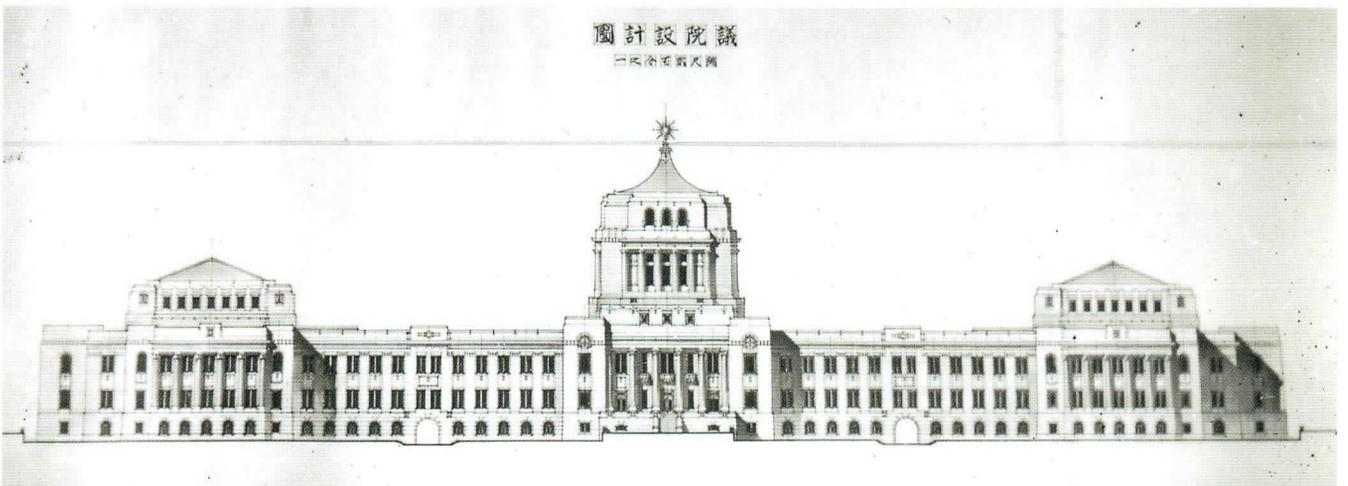
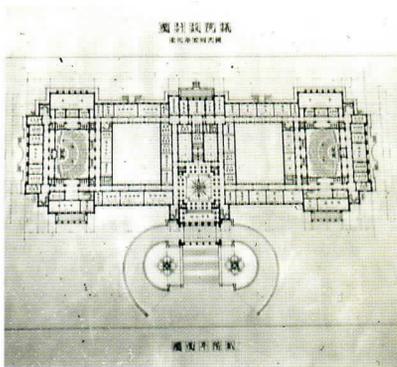
その20件による第2次の応募案が集まったところで、事件が起きた。“建築は人なり”である。「公保敏雄案」の作者は小林正紹であることがバレてしまう。ここで、正紹は迫られた。大蔵省を捨てるか、自作を捨てるか——。正紹は、自作を捨てた。これからまだまだ重要な施設を担当してもらわなければならない正紹を失わないですみ、大蔵省の面々は深い安堵の吐息を洩らした。

正紹が降りて、無事にコンペは終了した。1等は、渡辺福三を代表する宮内省技手グループであった。このなかにいた一人が、吉武東里である。1等が決定したものの、この案は実施に移されなかった。工費、構造などの面から、このままでは建たない、と非難したのは矢橋賢吉である。矢橋は、「国会議事堂」は大蔵省臨時建築部で設計したかったのだ。それが、世話になった妻木頼黄の悲願だった。宮内省から吉武東里の引抜きも成功し、結局、「国会議事堂」の設計は妻木・矢橋のシナリオ通りになった。じゃあ、大蔵省臨時建築部の誰の手の痕跡がいちばん濃厚に残っているのか。矢橋賢吉か、大熊喜邦か、吉武東里か……。設計者の諸説紛々する故だが、ここに強力な「正紹説」を紹介しておく。論を展開するのは、文学的建築評論の大御所・長谷川堯である。

現在の国会議事堂の外観の決定に、小林正紹というひとりの建築家のデザインが深いかわりを持っていたかもしれない、という推理も成り立ってくる。たしかに小林正紹の聖徳絵画館コンペの当選案と枢密院、国会議事堂の間の外観デザインには共通するものが私には感じられる。

(傍点ママ)
 『日本の建築(明治・大正・昭和)』/4.議事堂への系譜』/
 長谷川堯/三省堂/1981年

そして、もう一つ貴重な言葉を紹介しておく。語るのは下元連である。下元は、1914年(大正3年)に大蔵省臨時建築部に入省する。「国会議事堂」コンペの発表される5年前である。だから、下元は「国会議事堂」が図面で生まれてくる現場を目撃していたのだ。まさに、生きた証言ではないか。



国会議事堂の図と模型

小林 正紹

……ほとんど矢橋さんの作と言っていいと思います。矢橋さんのアイデアを受けて吉武東里君と小林正紹君が図面を起こしたんです。で、小林君は臨時建築課の時から、私らの先に入ってやってまして、工手学校を出た人で、なかなかデザインのうまい人で、妻木さんにも気に入られたデザイナーでございます。吉武君は懸賞の時、宮内省にいたのを大蔵省に転出してもらって両君で議院建築の図面を引きました。殊に真中の塔はいろんな批判がございますが、これは矢橋さんの案でしてね。あの建築初めはもう一階高いのが欲しかったんですが、どうしても予算がない、坪数がオーバーするのでそうなったんです。大熊さんは矢橋さんが亡くなられてから後を次いで完成されたんです。完成された時には大熊さんでしたけれども設計を主催し、上棟式まで矢橋さんがおやりになりましたからね。(『建築家下元連 — 96年の軌跡』/ 営繕協会 / 1985年)



2004「国会議事堂」

「国会議事堂」は1936年(昭和11年)、17年間の工期を経て竣工する。このとき正紹、45歳であった。

1980年代の中頃……正紹が亡くなってからだ。高円寺の小林邸の天井裏から膨大な図面の束が見つかった。公保敏雄の名で応募した正紹の「国会議事堂」の図面であった。焼却もせず、家族にも知らせず、秘かに我が家の天井裏に図面を仕舞っておいたところに、「国会議事堂」コンペへの正紹の自信と無念が積層しているように思える。

—1980年(昭和55年)、正紹は逝去する。享年90歳であった。



「堀商店」をはじめに、正紹は民間の建築も数多く手掛けている。住宅、病院、商業ビル、教育施設など……。公務員がこんなにアルバイトをしてもいいのかと心配になるが(そのせいかどうか、「堀商店」は公的には「設計:公保敏雄」になっている)、これほどたくさんの大物のクライアントをどこから見つけてきたのだろう。

若槻礼次郎(総理大臣)や植村甲子郎(日経連会長)は大蔵省つながりにしても、円地文子(作家)、小室翠雲(日本画家)、山内得立(京都大学名誉教授)など、政界、財界、法曹界、医学界、芸術界のあらゆるジャンルに及ぶ。人柄が悪い奴なんぞに、自分の家や施設の設計など頼むはずはない。

一方で、正紹は、日本速記協会の広報誌に「議院建築とともに50年」を座談したり(1971年)、光塩女子学院の初等科6年生に「国会議事堂建設をめぐる」の講演をしたり(1978年)、一般の人たちに建築の大切さ・面白さを積極的に伝えようとしている。また、「戦災復興に関する私見」を復興院建築局長宛に提出したり(1946年)、斜柱式組立住宅を考案したり(1946年)、硬派の面も忘れていない。とにかく建築に対する想いは熱く、その真摯さに多くの人たちが信頼を寄せていたのであろう。

その魅力は、今も衰えていない。正紹が建築に注いだ情熱を、いちばん感じなければいけないのは、まず工学院大学建築系学科の後輩たちだ。この不景気で、特に建築業界の壊滅的な不景気で気の毒だが(かく言う私も『NICHE』の制作を降りた途端に仕事がなくなった)、正紹のような輝かしき先輩がいたことに誇りを持って、頑張っていっていただきたい。(レポート:類洲 環)

※正紹の遺族で、建築に進んだ人が二人いる。最初が小林延秀さん。正紹の孫である。2004年現在、神奈川県川崎市まちづくり局計画部都市計画課に勤務する。この原稿は、延秀さんが編纂された『小林正紹/1890・1980』(1986年)に多くを頼っている。そして、カットの全てを延秀さんから提供いただいた。誌面を借りて、改めてお礼を申し上げます。

また、この原稿を書いている折も折、「絵画館」が「東京都選定歴史建造物」に選定されたというニュースが飛び込んできた。

◆参考文献

- ①『日本の建築家』(「新建築」1981年12月臨時増刊)
- ②『値段史年表/明治・大正・昭和』(朝日新聞社/1988年)

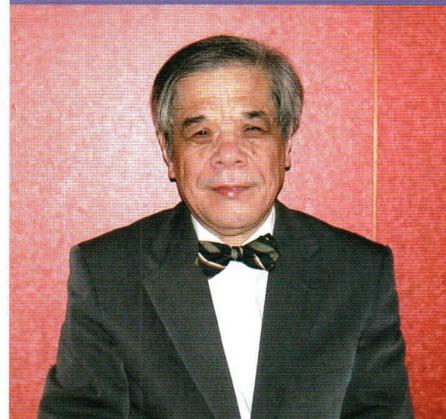
竺 覚 暁

私の仕事

「乱読」と

「雑学」

同窓生
からの
便✉り



日本人ライブラリアンは私だけである

「船頭多くして舟、山へ登る」という諺がある。私の仕事はこれに近いところがあって、現在、山へ登るまでにはなっていないが、座礁寸前といったところであろうか。つまり、性格も質も異なった幾つかの領域で仕事や研究をする羽目になってしまい、もとより能力には限りがあり、時間にも限りがあるわけだから、どの領域でも虻蜂取らずになりつつあるということである。つまりは「雑学」なのであって、従って母校同窓会誌という場で「私の仕事・研究」について語るなど鳥辭がましい限りなのであるが、畏友初田亨教授のたっのご依頼なので恥を忍んで筆を執った次第である。

私の専門とする領域の第一は「建築論」と「西洋建築史」なのだが、これをやろうと思ったのは建築学科三年の頃で、卒業論文では建築美学をテーマにした。その時に痛感したのは哲学及び哲学史に関する知識と語学力の欠如であった。そこでこの領域の基礎を学ぶために、郷里へ帰って富山大学文学部文学科哲学課程へ学士入学をした。ここでの卒業研究はカントの「判断

力批判」をハイデッガーの存在論を援用して読み直すというものであった。この研究の過程でハイデッガーの思惟は建築論として読めることに気付いたのである。ハイデッガー哲学の核心は人間存在すなわち「実存」を「世界内存在」と定義したことにあるが、この「内」の構造が「住み着いている」ことだと彼は言う。つまり「世界内存在」は「世界に住み着いている存在」即ち「世界居住存在」なのである。「実存」の構造としてのこの「居住」の構造を探るということであるから、これは正しく建築論なのである。詳しい経緯は省くが、この「世界居住構造」が端的に象徴的に現れているのが宗教建築である、と言うわけで「ギリシア・ローマ神殿建築の空間概念」をハイデッガーを援用して研究し、これを東京大学への学位請求論文とし、後に出版したのであった。

この研究の過程では建築史以外の領域を広く渉猟することが必要であった。哲学は勿論だが、ギリシア・ローマ神話宗教史や、調和比例論、宇宙調和論などのギリシア数学史、古代宇宙論史、古

代科学技術史なども相当読まなければならなかったのである。このことが第二の仕事の領域、科学技術文化史、科学技術稀観書研究に繋がって行ったのであった。

勤務校の金沢工業大学は1982年に従来の大学付属図書館を廃止して全く新しい概念の大学図書館としてライブラリーセンターを創設したのだが、私は1978年にこのライブラリーセンターの企画を命ぜられた。この企画の中には「工学の曙文庫(The Dawn of Science and Technology)」と呼ばれる科学技術稀観書のコレクションを創ることがあり、その構成と蒐集も私の担当となったのである。これは先述の様に私が古代科学技術史を多少嚙っていたので命ぜられたのであった。

このコレクションはゲーテンベルグが活版印刷術を実用化した1450年頃以降、現代までに出版された重要かつ主要な科学技術業績の初版本を蒐集するというもので建築書も含まれる。私はこの蒐集は体系的なものでなければならぬと考え、数学、物理学、電気・磁気

学、化学、天文学、建築学等の分野においてどのような書物が1450年以降出版されて来たのかを調査して、その出版目録と主要書の解題を出版した。最終的にこの目録は六千点強の日欧併記のデータベースに成長した訳だが(翻訳には苦勞した)、このなかの重要なものから蒐集して行くという方針を採ったのである。蒐集を始めてから既に四半世紀経ったわけだが、現在一千点を越え、我が国では唯一にして最大、第一級の科学技術稀覯書コレクションに成長した。この種の蒐集では世界でも五指には入るという海外からの評価も頂いている。

この中には誰でも知っているコペルニクス、ガリレオ、ボイル、ニュートン、フック、ラヴォワジェ、キャヴェンディッシュ、ヴォルタ、アンペール、ファラディ、キュリー、ラザフォード、アインシュタイン、湯川、ワトソンなどによる、高校の理科教科書に出てくる様な定理、原理が始めて発表された初版本が含まれているのは勿論、それらの間を繋ぐ業績初版も蒐め

られている。我が国には一点しかないというものも多いが、世界に一点しかないというものもある。ちなみにそれはロバチェフスキーの非ユークリッド幾何学の初版である。

この蒐集を行うためには、その科学技術領域において何が重要で何が重要でないのかを見極めることが必要であるから、当然に科学技術史を勉強しなければならなかった。何しろオークションで初版本を落として蒐集すると言う世界なので、大金を払って変なものを掴んでは責任問題である。その意味でも勉強も真剣にならざるを得なかったのであるが、これが第二の専門になったのはもう一つ理由があって、それはライブラリーセンター設立の年に金沢工業大学では科学技術史を全学生必修とすることになり、私にも科学技術文化史を担当することが命ぜられたからである。研究はともかく教えるとなるとまた別の責任が生ずるので、科学技術史領域での確固とした訓練を一度受けたいと考えた。そこで1985年から二年間、

マサチューセッツ工科大学の客員研究員として建築史の研究をする傍ら、同大学院STS(科学・技術・社会)プログラムに兼任して科学技術文化史を勉強したのであった。

第三の専門は、研究・教育ではなくて実践の領域であるが、図書館情報学である。1978年に勤務校のライブラリーセンターの企画を命ぜられて以来、現在も同センターの運営に携わっているのだから、私の図書館勤務も四半世紀に及ぶわけである。同センター館長に任ぜられてからも十年経つのであるが、これは全国の大学図書館館長のなかで、ひよっとしたら最長不倒記録かもしれない。これは私がビブリオフィルというか非常に本好きなので、あいつなら本、書物のことが分かるだろう、ということで図書館企画を担当させられたらしい。確かに読むことが私は大好きなので、面白ければジャンルを超えて何でも読む。「乱読」なのである。語学を勉強したのだから、要するに読める範囲を拡げたかったからということに尽きる。



金沢工業大学ライブラリーセンター



金沢工業大学の曙文庫室内の笠覚晩教授

とはいえ単なる本好きでライブラリアンが勤まる訳はない。とりわけデジタル情報技術が図書館を大きく変革させているこの時代に於いておやである。図書館が学生や教職員に対し如何に優れたサービスを行うかを企画、実行しなければならないのだから、絶対に実務的な訓練が必要である。そこで1990年から一年間、世界最大の図書館であり指導的ライブラリーである米国議会図書館の幹部養成プログラムに国際研修員として参加し実務の訓練を受けた。このプログラムを修了し議会図書館長から認定証を貰ったとき、私はライブラリアンとして認められたわけである。ちなみに現在に至るまでこのプログラムを修了した日本人ライブラリアンは私だけである。

帰国して、また建築学科とライブラリーセンターを往復する生活が再開したわけだが、1992年に、酒井悌ライブラリーセンター初代館長が企画して開館以来十一回に亘って毎年継続して開催してきた「金沢工業大学・図書館・情

報科学に関する国際セミナー」と題する国際会議が、同館長の逝去によって中断してしまった。翌年、大学は私にこの国際会議の再開を命じたのである。そこで私は会議名を「金沢工業大学・図書館・情報科学に関する国際ラウンドテーブル」と変更し、当面のテーマを「デジタル・ライブラリー」ということにして、この会議の企画委員会をワシントンD.C.に設置した。委員は私と米国図書館界のキーパーソン達であるが、中心人物は米国議会図書館副館長のディアンナ・マーカムである。その時々で最も刺激的なデジタル・ライブラリー活動を実践している図書館専門家を数人米国から招聘して講演を行い、その後で日本の図書館専門家とじっくり討論をして貰うという会議である。幸い評判が良くてこの会議も1994年の第一回から2004年の第十四回まで続けることが出来た。米国でもこの会議は有名になって、1994年から1998年までの五回分の講演論文は、ディアンナ・マーカムが編集し私が序文を書いて、「

Development of Digital Libraries」と題した書物として2001年にGreenwood Pressから出版された。ちなみに1999年から2003年までの五回分の論文も2005年に同社から出版される運びになっている。

この様に図書館情報学の実践が私の第三の領域になってしまったのだが、面白いことに、第二と第三の領域がブーメランの様に帰帰して第一の領域に結びついていったのである。というのは、先述の「工学の曙」文庫には当然、建築稀観書の蒐集が含まれている訳だが、この建築書もウイトルウィウス、セルリオ、パラディオ、ドロールム、ブロンデルやルドゥー、ライトやコルビュジェに至る体系的な蒐集が出来ている。この文庫のキュレーターないしレアブック・ライブラリアンとしての私には、この建築稀観書の解題を整備する任務があるわけだが、これらの建築稀観書の内容は建築論なのだから、それは建築論史の研究になるのである。この研究の為には「工学の曙」文庫所蔵のものばかり

ちく かくぎょう

竺 覚 暁

1942年5月6日生まれ

略歴

- 1961年 富山県立富山高等学校卒業
- 1966年 工学院大学建築学科卒業
- 1969年 富山大学文学部文理学科哲学課程卒業
- 1969年 福井高等学校建築科教諭
- 1971年 金沢工業大学助手
- 1972年 金沢工業大学講師
- 1976年 金沢工業大学助教授
- 1981年 金沢工業大学教授
- 1981年 金沢工業大学ライブラリーセンターSL室長兼務
- 1984年 工学博士(東京大学)
- 1985年 マサチューセッツ工科大学客員研究員(1987年まで)
- 1990年 米国議会図書館国際研修員(1991年まで)
- 1994年 日本建築学会図書館長(1995年まで)
- 1995年 金沢工業大学ライブラリーセンター館長兼務、現在に至る

連絡先

石川県金沢市三小牛町2-6-2

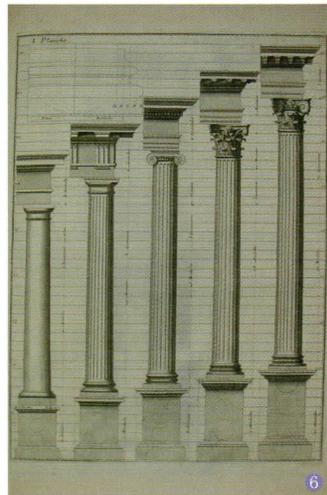
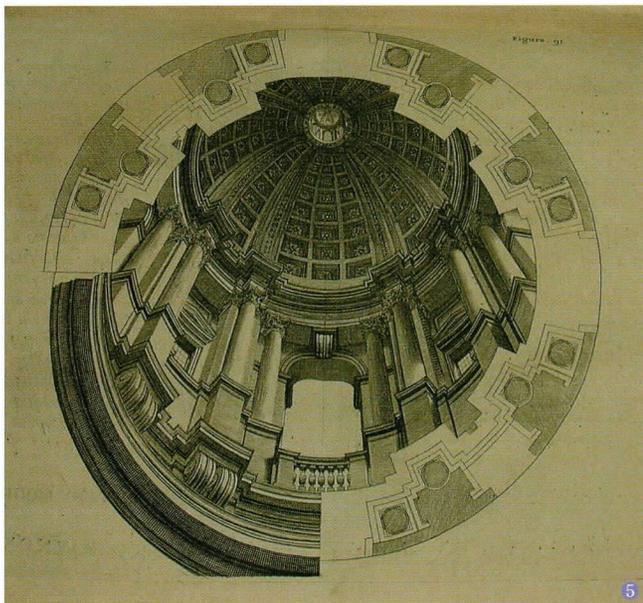
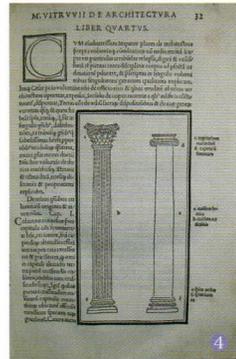
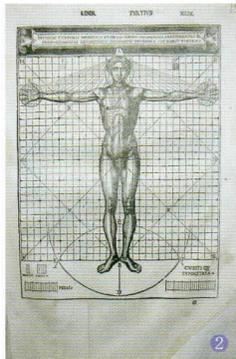
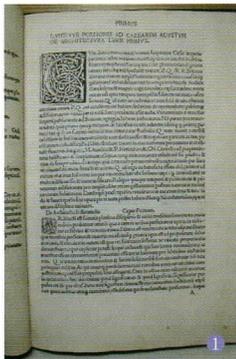
E-Mail : chiku@neptune.kanazawa-it.ac.jp

りでなく、十五世紀から二十世紀までの建築書を幅広く調べ、相互の影響や連関を見なければならぬ。建築稀観書のコレクションの良く集められて整ったものはやはり米国に多く、例えばコロンビア大学エヴァリイ建築・美術図書館所蔵のもの、ジョンズ・ホプキンス大学図書館のファウラー・コレクション、ナショナル・ギャラリーのマイラード・コレクションなどがその例である。また英国王立建築家協会(RIBA)のコレクションも素晴らしい。私は先述の様に勤務校主催の長年に亘る図書館情報学国際会議の企画を通じて米国の図書館界には知人が多い。コロンビア大学図書館長やジョンズ・ホプキンス大学図書館長等とも親しいので、これらのコレクションの直接調査や読ませてもらうことを度々行うことが出来た。またこれからも行わなければならないが、十五世紀以降二十世紀までの建築稀観書の実物を最も多く見た日本人は私であるだろうと自負している。科学技術稀観書蒐集や図書館の仕事がなければ、こういった建築書史、建築論史の研究領域は生ま

れてこなかったと思うし、この書物と建築という私の好きなもの二つが複合した領域を、現在も研究できることは幸せであると思っている。

以上の諸領域は総て勤務校、金沢工業大学に於ける活動であるが、工学院大学のような東京にある大学とは異なって地方にある大学は、さまざまな地域活動を行わねばならない。石川県には建築学科を持つ大学は金沢工業大学しかなく、富山県にはないので、石川県と富山県の歴史的建築の調査、記録、研究、保存など建築文化財関係の仕事や、景観行政、町づくりなど様々な領域で、県や市町村の行政部局に協力して活動しなければならない。長年続けて来たこうした活動のなかにもユニークな例があるのだけれども、与えられた紙数はとくに尽きているので紹介は割愛する。

こうして振り返って見ると、私の仕事は常に「書物」とその周囲を巡って展開してきたのだということを改めて認識させられた。今は「雑学」が「雑な学」で終わらないように努力している。



①ウイトルウィウス「建築十書」1497年初版。ウイトルウィウスは前一世紀のローマの建築家。彼の書いたこの書は唯一現代まで伝わった古代建築論書で、ルネサンス建築のバイブルとなり、現代建築もある意味ではなおこの影響下にある。本書は文法学者スルプチアスの編になるもので、フィレンツェで出たその二番目に古い版。最古の版はローマで1483年に出ており、コロンビア大学のエヴァリイ建築・美術図書館が所蔵している。

②ウイトルウィウス「建築十書」チェザリアーノ版、1521年。チェザリアーノはプラマンテの弟子で、師がラテン語が出来ずウイトルウィウスが読めなかったので、イタリア語訳版を作った。これが最初のウイトルウィウス近代語訳版である。またイラストレーションが美しく最も美しい建築書の一つとされている。

③ウイトルウィウス「建築十書」バルバロ版、1556年。バルバロはヴェネツィアの大貴族でパラディオの庇護者。これまでのウイトルウィウスの編や訳が不完全なのに業を煮やして正確なイタリア語訳と注釈を行おうとした。パラディオが図版を担当している。

④ウイトルウィウス「建築十書」フラ・ジョコンド版、1511年。イラストレーションの立った最初の版。

⑤ポッツォ「絵画及び建築透視図法」1693年。ポッツォはイエズス会士でバロック期教会を荘厳するために、教会天井画を恰も天空に繋がる行く空間として描き出す騙し絵的透視図法を開発した。これを「クアドラトゥリス図」と呼ぶが、これはその最初の教本。

⑥ペロー「柱の五種のオーダー」1683年。ウイトルウィウス建築論の裡で最も普及し実践されたのはそのオーダー論であって、ヨーロッパ各地へ広がった。これはフランスに於ける定本となったオーダー論。

松本正富 建築の 設計から 研究へ

同窓生
からの
便✉り



社会人入学を経験して

2000年に谷口研究室の修士課程を修了した後も、年に1、2度は谷口先生にお会いする機会が続いていますが、いつも挨拶代わりに「NICHE、届いてます？ 今度、同窓生からの頼り、お願いするね。」と声をかけられ、「ええ、まあ…」とテキトーに答えつつも、それはチョットご勘弁と内心ハラハラしておりましたが、とうとう正式なご依頼を頂戴し、マナ板の鯉よろしく、寄稿させていただきます。

（社会人学生のこと）

私は、渋谷で設計事務所を営んでおりましたが、バブルもはじけた後の1988年、経済活動に流される日々の業務に疑問を抱きつつ、“この先、住宅やるならコートハウス”と思い、谷口研究室の



ゼミ生による座位の実験風景

門をたたきました。当時すでに37歳、二十代の若者と机を並べるのに若干の抵抗もありましたが、なんと50代の同級生もおり（建築会社の社長さん）、ホッとしました。また、年を取っていればその分だけ先生方も一人前扱いして下さるし、こちらも要領良さ（ズル賢さ）を身に付けた分、八方美人的にかわいがってもらえたように思います。修論の研究時には、安原先生や荻原先生（当時）の研究室にも調子よく出入りさせていただきました。

そのうち、“どうせなら学会の研究論文として形に残したい”などと欲がわき、性懲りもなく千葉大学自然科学研究科の博士課程に進学しました。ここでは、住宅計画を専門とする服部岑生先生につきましたが、谷口先生との関連も依然と続いており、その後も結局3本の学術論文のご指導をいただきました（工学院に学費はお支払いしておりませんが…ゴメンナサイ）。特に、“立川の米軍ハウスの研究の話があるけど、一緒にどう？”なんて声をかけていただいた時は、つい調子よい返事を

したものの、コレハ大変だと内心困ったものですが、結果としては住宅総合研究財団から助成金までいただいて研究論文に仕上げることができ、今に思うとなんと幸運だったことでしょう。

（川崎医療福祉大学へ）

そんな折、千葉大学博士課程の1年次に、ひょんなことから岡山県倉敷にあります川崎医療福祉大学の友人から教員としての声がかかりました。大学教員に興味なくはありませんでしたが、まさか自分がと思いましたし、これまでの設計事務所を一旦整理することにも若干の抵抗がありましたが、設計活動を続けながらの研究にも時間的・経済的な不安もありましたので、コリャ渡りに船という感じでちゃっかり赴任いたしました。私の博士論文の研究課題は「都市型独立住宅」に関するものですが、倉敷に来てからもインターネットを通じて、谷口研究室とのやり取りが続く中でご指導・ご協力を頂き、何とか3年間での学位取得にこぎつけました（感謝）。

(現在の研究課題について)

川崎医療福祉大学は、その名前の通り医療福祉や健康科学の立場から生活環境を捉えて行くことを目標に掲げた大学です。私はこの環境デザイン学科で、建築設計分野の講義を受け持っていますが、当然ながら一般的な建築知識だけではなく福祉住環境に関する専門知識が要求されます。そこで、前述のごとくチャッカリと進めてきた研究課題を軌道修正する必要に迫られました。ということで…現在は、高齢者施設の生活環境に関する研究を行なっています。

ご存知のとおり、新築の特別養護老人ホームは原則として全室個室となりましたが、居住環境整備の側面では大きな期待が寄せられているものの、介護体制に関する更改やホテルコストに関す

る懸念も依然と存在しています。当大学も関連施設として特養を持っていますが、これが築30年を過ぎ、ちょうど現在は建替えの途中で大規模処遇からユニットケアへの移行の過程にあります。そこで、学生とともに調査に入りながら、入居者の生活状況の変化や活動量の変化について研究を進めています。また昨年度は、高齢者の座位環境の改善を目的とした、人間工学的な実験も行ないました。高齢化社会の問題がますます深刻になりつつありますが、たとえばほんの少しでも役に立てる研究ができればと模索する毎日です(カッコつけすぎ)。

(最 後 に)

いろいろと調子いいことを書き連ねましたが、ここ数年まるでダボハゼのように脈絡なく動いている自分の良し悪しの



CIB HOUSE(千葉県市川市)

判断は将来に委ねるとして、少なくとも工学院大学に社会人入学したことが、私の転機となったのは確かなことです。ここ数年、職業大学院等の機運も高まっているようですが、工学院大学は当時より広く社会人に門戸を広げていたうえ、新宿という利便な立地も魅力で入学の決断をしたものです。大学の教員は一般に変人が多いですが(怒らないで!)、建築は社会性が強い学問ですので比較的接し易い先生が多いのも確かに思います。きっといい意味で終身雇用が崩れ(そう信じるしかない!)、仕事に関する価値観も急速に多様化する現代で、一定の社会経験の後にアカデミズムを味わうのも乙なものと思いますが、皆さんはいかががお考えでしょうか。



restaurant&bar GAB(渋谷区宇田川町)



OZONE住空間ラボ(新宿パークタワー6F)

● profile

まつもと まさとみ

松本正富

略歴

- 千葉県立千葉高校出身
- 1983年 東京理科大学 工学部 卒業
- 1993年 松本正富デザイン事務所 開設
- 1996年 株式会社TEAMコムに改組
- 2000年 工学院大学大学院
修士課程修了(谷口研究室)
- 2003年 千葉大学大学院
自然科学研究科博士課程修了
工学博士
- 2001年 川崎医療福祉大学
医療福祉環境デザイン学科 講師

連絡先

川崎医療福祉大学
医療福祉環境デザイン学科
701-0193 岡山県倉敷市松島288
TEL/086-462-1111
FAX/086-463-3508
E-mail/
jungbu@mw.kawasaki-m.ac.jp

楠 昭

街づくりに
参画して
学んだこと同窓生
からの
便り

東戸塚の街造りは私のライフワークでした。

〔熊谷組設計本部に入社〕

昭和49年(1974年)オイルショックを背景に山下研究室を卒業した私は、山下先生の紹介で先輩の片男浪さんによって、新本社が竣工したばかりの熊谷組本社設計部に入社しました。

当時は土木で有名だった熊谷組は、福井から東京へ進出した新宿区筑土八幡(飯田橋)を拠点に建築のシェアを70%に増やそうと建築の社員を増員中でした。社内には「黒部の太陽」で語り継がれて来た先輩もまだ現役でいて、馬力もあり社会情勢の波に乗り、破竹の勢いで成長している時代でした。

入社してからは、忙しい設計業務の中、企業スポーツの都市対抗野球や社会人バスケットボールの応援は年中行事で、仕事の合間を楽しみながらも残業の毎日。それでも卒業後数年間は空き時間を見つけては大学の研究室へ通い、エネルギーあふれる後輩の新しい感覚にふれたり、山下先生のコンペのお手伝いや谷口先生と趣味の登山の話に耽る日々でした。

〔現場経験と新設会社に出向〕

入社5年目、社会的な風潮で会社も海外への進出を拡大。不動産の取得による再開発や造注と業務の分野が広がり海外転勤の難を逃れた私は、横浜支店で現場経験を積み、その後新しく設立した不動産会社への出向となりました。その時から少し私の人生観が広がったような気がします。

新しい会社は、自社所有の遊休不動産を商品化して、売却、賃貸する、まさに造注のための不動産会社として設立しました。どんぶり勘定のゼネコンマンと1円単位で計算する銀行屋とで作った会社で世界も価値観も違った人との共同作業は大変な反面、得るものは大きく、土地の整理、企画、近隣交渉、実施、販売、賃貸等を少人数でこなし、親会社の力も借りて、様々な事業を展開。その夢も膨らむ中での7年間の出向は私にとって社会勉強や不動産の基礎も身に付けられる有意義な時間でした。

〔東戸塚の街づくりに参画〕

熊谷組に復帰した私に待っていた仕事は、東戸塚の街づくりの担当でした。既に先輩達によって街づくりの道筋はつけられ、駅を造り、公園・学校を造り、集合住宅もほぼ全体像が見え、いよいよ街づくりの核となる中央街区で担当の一員となりました。

東戸塚を取り巻く歴史は古く江戸時代にさかのぼります。まず江戸時代に東海道が整備され、保土ヶ谷宿と藤沢宿の距離が長い為その間に戸塚宿が造られました。その街道に沿って明治20年、国鉄東海道線が国府津まで伸び、戸塚駅が誕生します。

そして東戸塚駅は保土ヶ谷駅と戸塚駅の駅間が9.1kmと長くその間に新しい駅を造ることで陸の孤島から脱却しようと、住民と民間企業の力で街づくりを推進して来たものです。

その東戸塚の事業は昭和38年(1963年)からはじまりました。

※東戸塚の街づくりの経緯

昭和38年／東戸塚駅建設の第一歩を記す(現地調査開始)

昭和39年／周辺開発約80万坪の総合マスタープランの作成

昭和45年／東戸塚品濃中央土地区画整理組合設立

昭和51年／熊谷組事業に参画で具体化に向けて前進

昭和55年／国鉄横須賀線に「東戸塚駅」開業

昭和56年／熊谷組による「ニューシティ東戸塚」着工

昭和60年／中央街区に「特定街区」の手法決定(中央街区:東戸塚駅前の4.3haの敷地に、丘陵の高低差を利用して都市軸上をデッキで駅と直結した商業施設と超高層マンション4棟とを配置した複合建築が特定街区に認定された)

私は平成元年、この中央街区に一棟目の超高層を着工したところから参画、しかしその後バブルがはじけ全ての事業が一時中断、延期を余儀なくされます。平成7年、市況が少し落ち着いた時点で、企業の姿勢とプライドをかけて、街づくりの完成に向けて、事業の再開をはたし、今は最後の追い込み中です。

提 案

オーロラシティと環境共生都市

東戸塚東口の区画整理60haの内、熊谷組所有地17haの開発が「ニューシティ東戸塚」のブランドで進む中、街づくりの中心を成す中央街区では「憩いとゆとりのある空間の提供」「品揃

えの提供」「安心と環境に優しい施設の提供」「地域と一体となった街づくり」をコンセプトに都市型百貨店と量販店を専門店をつないだ2核1モールの地域密着型ショッピングセンターとして平成10年8月に着工。46,000坪の建物を1年3ヶ月という短期間で平成11年10月には竣工、「オーロラシティ」としてオープンさせることが出来ました。そこまでは社会情勢の変化、周辺道路整備、商業施設間の調整など膨大な条件を整理し、工事竣工間際までは戦いの連続でした。

また事業主の熊谷組、テナントの西武百貨店、ダイエー3社共、それぞれ社内事情は違え、窮地にある中、共に励まし協力しあい、竣工オープンしたときは感激もひとしおでした。

そして、オーロラシティには特定街区により公開された屋上の有効空地(オーロラウオーク)を生かし、ソーラー発電、ハイブリット照明、ビオトープ等の環境共生都市の試みも行い、この中央街区に計画された4棟の超高層マンション(平成18年2月竣工)の庭としての造り込みも試みました。このオーロラウオークと屋上はフリーマーケット等としても活用され、様々なイベントで賑わいをみせてきています。

(地図に残る街づくり)

「ニューシティ東戸塚」に携わって

東戸塚は旧東海道の街道沿いの斜面を削った荒地の頃から約 30年以上の時が流れ、道が出来、住宅が建ち、

人が住み、集う「街」となりました。東戸塚の街造りは熊谷組で社会人としての私のライフワークでした。そして街づくりには多くの人が携わり、さまざまな人々の協力と、努力の結果、造られていくことを実体験できました。

現在ニューシティだけで3,000戸(約1万人)以上の方が住み、駅の乗降客数も10万人を超えました。周辺には多くの施設が出来、地域の拠点としての「街」の賑わいを見せ、住む人や集う人が皆自分の庭のように誇らしげに街のことを語るのを聞く時、デベロッパーとしての冥利に尽きます。

私も完成間じかの街づくりからは少しずつ離れてきました。仲間達と苦勞して作り上げてきたこの街がさらに時代と共に成長して、どのようにその姿を変えて行くのか、外から見るのが楽しみです。

(転籍と趣味のきりえ)

社会情勢の変化の中で「熊谷組」の名称も今期で幕を閉じます。私は昨年住宅事業に専念する「熊谷土地建物⑭」に転籍しました。長年の実績を基礎に、数少ない資産を有効に活用する為、等価交換事業とし、「モンヴェール四ツ谷」と「クイーンズパレス東戸塚」でデベロッパーとしてマンション分譲事業に取り組んでいます。

また、プライベートでは社会人になってから 趣味で「きりえ」をはじめました。自分で選んだ様々なテーマを通して、また新しい世界を発見するのも楽しみのひとつです。毎年横浜の仲間と関内他で作品展を開いています。一昨年、上野の東京都美術館「日本きりえ美術展」にも出展しました。

是非、気が付いて、時間がありましたら一度覗いてみてください。



Queens Palace
東戸塚(武番館)

OZONE住空間ラボ(新宿パークタワー6F)

● profile

くすのき あきら

楠 昭

北海道北見出身・北海道立札幌北高等学校卒
1974年 工学院大学建築学科(山下研)卒業
同年 株式会社熊谷組本社設計部 入社
2003年 熊谷土地建物株式会社、代表取締役

162-0821 東京都新宿区津久戸町2番1号
TEL:03-3260-3191 FAX:03-3260-3194

罇沢 曜

プロジェクトを 通して 学んだこと

同窓生
からの
便✉り



社会人ドクターとして本学に復帰しました

(はじめに)

私は望月洵先生のご指導のもと1997年に修士課程を修了し、現在勤めている横河設計に入社しました。今まで構造設計に関わりながら、企画から基本計画、設計および監理まで幅広く経験させていただきました。ここでは、入社してから関わった印象深いプロジェクトについて簡単に紹介しますが、まず、私が構造設計の分野を選んだ経緯について少し触れておきたいと思います。現在の会社に入社する前は、大学で建築を学びながら5年間土木設計の分野で主に橋梁設計に関わってきました。その中で国内外の美しい橋梁や構造物に興味を持つようになりました。特にRobert Maillartの作品の研ぎ澄まされた構造美に見せられ、建築においても構造の分野を専攻しようと思ったわけです。望月洵研究室には、構造建築家の書籍が数多く納められており、Pier Luigi NerviやFelix Candelaなどの作品に影響を受けました。研究室に所属してからは、耐震壁に関する研究を行いな

がらも、Felix Candelaの来日予定に併せて企画されたミラグローサ教会の約半年間におよぶ模型製作(RC造シェル構造、Scale:1/4)を任されるなど、幅広い経験をさせていただいたことが現在の仕事に生きていると思います。

(これまで関わったプロジェクトから)

■大規模医療施設新築に伴う建設地における地震動評価および構造設計
(静岡県立静岡がんセンター:1998~1999)

建設当時延床面積で日本最大の免震病院建物を静岡県東部地域に計画し、建設地周辺で想定されている大地

震に対する病院機能の維持を可能にするための性能指向設計を行いました。設計にあたり、想定東海地震に対して敷地周辺の地下構造の推定と最先端の強震動評価手法に基づき建物の構造的、機能的安全性を確認するという当時としては画期的な設計を行っております。設計における地盤構造の推定および地震動評価に関しては、東京工業大学大学院総合理工学研究科 翠川教授、山中助教授、および本学の久田教授にご協力いただくことができ、本設計の成果は建築物の耐震設計における先進的な試みとして第12回世界地震工学会議などで発表する機



静岡県立静岡がんセンター(2002年竣工)

会をいただきました。

このプロジェクトは入社2年目から3年目にかけて経験し、意匠・構造・機械設備・電気設備の合わせて10名以上の設計スタッフとともに進められました。そのなかで、構造設計における様々な試みを実践して得る物は非常に大きかったと思います。また一方では、設計者として担当分野に固執せず、プロジェクト全体を見据えた総合力が重要であると強く感じました。このプロジェクトは、私の設計に対する意識を変えるきっかけとなり、その後の仕事における様々な場面でこの経験が役に立っています。

■県庁舎建物の免震レトロフィットにおける設計および現場監理 (山梨県庁舎本館:2000~2002)

入社4年目から6年目にかけて、県庁舎建物として日本で初めてとなる免震レトロフィット計画に、設計から現場監理まで一貫して携わることができました。既存建物は同郷の出身である内藤多伸博士と明石信道氏の設計による由緒ある建物です。内藤多伸博士は望月先生の恩師でもあり、設計前に望月先生を尋ねたときに、内藤さんに墓の下から怒られるような設計をするんじゃないぞ!と叱咤激励されたことが印象深く思い出されます。その言葉は、竣工までの苦しいときに私の原動力になりました。このプロジェクトは、竣工後40年近くが経過した庁舎の耐震補強方法として建物を免震化し、庁舎を使いながら機能性・意匠性を損なうことなく耐震性を向上させるというものです。設計においては、新しい免震レトロフィット工法の開発を行うなど、特殊な改修工事に対

応した様々な工夫を実践しました。また、耐震改修に併せて設備機器の全面更新による信頼性の向上と省エネルギー化、来庁舎に配慮した施設整備や執務環境の向上などを図ることによる庁舎全体のリノベーションを提案し、実現することができました。地震動評価においては、久田先生のご協力をいただき、糸魚川-静岡構造線を震源とする地震動に対する精度の高い推定を行い、想定される大地震に対する庁舎機能の維持を可能にしています。このプロジェクトに対する社会的な関心は非常に高く、工事期間中には4回にわたる報道機関公開と、延べ400人を超える見学者が訪れ、大学院の授業の一環として本校の学生を対象にした見学会も開催しました。改修工事は2002年に竣工し、現在、山梨県と建築研究所のご協力をいただいて強震観測を実施しています。このプロジェクトは、静岡がんセンターの設計で養った知識と経験をベースに、リノベーションという新たなコンセプトへの挑戦でもありました。この経験を今後の地震対策と建築技術の発展に役立てていきたいと考えています。



免震レトロフィット工法



山梨県庁舎本館(1963年 既存建物竣工、2002年耐震改修竣工)



施工を担当した建築JVの方々の竣工記念写真
(筆者は右から3番目)

(今 後 に 向 け て)

これまで建築の仕事に関わってきた経験の中で、特に印象深いプロジェクトを紹介しました。これらの仕事を通して建築に向き合う意識はとでも強くなったと思います。また、本学で学んだことや土木設計における経験は、現在の私を形成する大きな要素になっています。これまでに携わったプロジェクトでは、本学をはじめとする研究機関とのコラボレーションにより様々な革新的な成果を上げることができました。このことがきっかけとなり、私は本年4月より社会人ドクターとして本学に復帰しました。進歩発展し続けている建築研究分野への精通と技術開発が建築を設計する上でも非常に重要になると考えたためです。今後は、今まで養った知識と経験を生かし、研究開発においても成果をあげたいと考えています。

profile

まずざわよう

罇 沢 曜

略歴

東京都、國學院高等学校出身

1997年

工学院大学大学院
工学研究科建築学
専攻修士課程修了
(望月洵研究室)

2004年~現在

工学院大学大学院
工学研究科建築学
専攻博士後期課程
(久田研究室)

1992年~1997年

大成建設株式会社
土木設計部

1997年~現在

株式会社横河建築設計
事務所 構造設計部

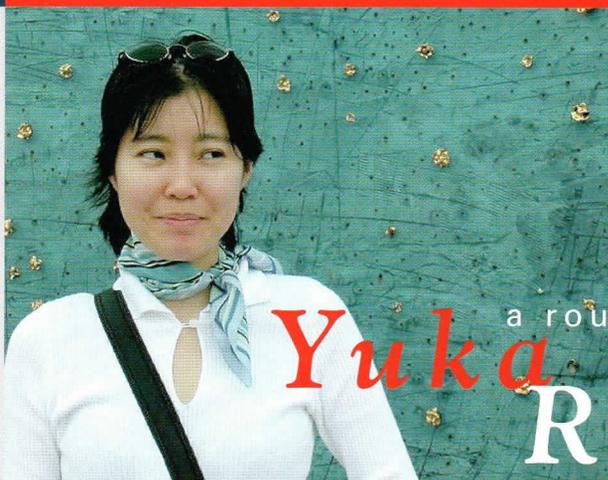
連絡先

〒153-0064 東京都目黒区下目黒2-20-28

Tel: 03-3492-7441

E-mail: masuzawa@yae.co.jp

スイスでの 8年間



a round the world
Yuka Raeber

スイスの建築専門出版会社

チューリッヒ本社の建築専門出版社PSA Publishe社に勤めるようになってから早くも2年と4ヶ月がすぎようとしています。私はここで主に日本の建築家の方々のためのウェブサイト〈www.japan-architects.com〉の企画、制作を担当するかたわら、www.world-architects.com 〈http://www.world-architects.com/〉に掲載されているスイスをはじめとする7つの国々の建築事務所を紹介するウェブサイトの企画、制作をしています。

この会社に勤めるようになったのは、別に出版関係に強い興味をもっていただけという訳でもないのですが、偶然が偶然を呼ぶというような不思議な縁で、この日本の方々のためのウェブサイトの企画に参加し、責任者となりました。

PSAPublishers社はもともと建築書籍を出版していましたが、その書籍をもとにしたウェブサイトが、時代の流れによりメディアの中心となることを確信していた設立者のハンス・デマルメル氏とアンドレス・ジック氏は、この企画に焦点を置くことにしました。スイスをベースとして、ニューヨーク(アメリカ合衆国)、ドイツ、オーストリア、ベルギー、フィンランド、日本とこれまで7つの国々のコンテンツポリシー、アーキテクチャーに関わる建築事務所を紹介するサイトが現在の運営の中心です。

ワールドアーキテクツのサイトを制作することは、同時に建築業界の新しい動きに常に敏感でなくてはなりません。欧州各地で開かれる建築シンポジウムや、展覧会などの情報、サイトのクライアントである建築家の方々からおられてくる情報はもちろん、様々な新聞、建築雑誌をリサーチして、サイトに参加してもらいたい建築家の方々に積極的にこちらからご連絡したりと、建築事務所で働いていたときはまた違う様々な能力を要求されます。ニューヨークオフィスの方々とサイト制作に関することで

電話とメールのみでコーディネートしたり、営業担当者や、プログラマー、グラフィックの方々と打ち合わせしたりと、多くの場面で人と関わる仕事でもあるため、特に頻繁なコミュニケーションが必要です。私にとっては、第3外国語であるドイツ語で毎日仕事をしているわけですが、幸い日本語を使う機会も多くあり、それほどストレスではありません。

出版社はチューリッヒ中央駅から徒歩すぐの市街地に位置し、すぐ近くには美しく水量の豊富なりマット川が流れ、古いゴシックのお城をまねて建設された国営の博物館とその広大な緑の庭園があります。会社がある地区は、すぐ近くに芸術大学をはじめとして様々な学校が立ち並ぶ地区ですので、学生も多いですが、駅に近く、便利なことから、出版関係や、グラフィック、建築事務所も多く見られます。

お昼を食べにすぐそばのテイクアウトのタイ料理屋や、洒落たカフェにいくと、偶然に友人の建築家や、ウェブサイトのクライアントに出会ったりします。特に夏の昼食時などは社長のハンスが先頭をきってリマット川の遊泳場上に飛び出していくのを最初の年に経験したときは、なんとのんびりした会社かと驚きましたが、今ではときどき私も泳ぎにいたり、緑豊かな公園でゆっくりと昼食をとったりすることが日課となりました。もちろん締め切り日や、決済などが近いときは、そんな悠長なことはしていませんが、この会社のとてもカジュアルで自然な雰囲気は、これまで経験した幾つかの会社とは違うものです。

ETHへの留学

ここで、出版社に勤める以前の経過も、簡単に時間の流れにそって説明したいと思います。

今から8年前、私がチューリッヒ空港に降り立ったとき、まさかこんなにスイスに長居することになるとは夢にも思いませんでした

した。そのときはスイス連邦工科大学（通称チューリッヒ工科大学ETH）の建築学科に留学するつもりでした。まずは大学から指定されたドイツ語の専門学校に1年間通い、大学の授業についていけるだけの語学力をつけました。スイスはヨーロッパの中でもまれに見る多言語国家で、ドイツ語をはじめ、フランス語、イタリア語、そして英語が、日常的に話されています。しかしチューリッヒを初めとするドイツ語圏では、大学の授業はすべてドイツ語であるため、まずはドイツ語の能力が絶対に必要不可欠なのです。1年間語学学校に通ったとはいえ、やっと日常会話ができるようになった程度で、建築学科への編入はかなりきつかったです。幸いにも、建築の勉強は語学だけでなく、模型やドローイングなどで“プレゼンテーション”することが主体となりますから、言葉で補えない分、物理的な道具で私は常に大学の教授と話していました。遠い極東（この言い方はとても古くさいですが）からわざわざやってきた日本人学生ということで、恩恵も受けましたし、もちろんたくさん理不尽な目にもあいました。欧米に留学した学生が経験するカルチャーショックも何度となく味わいました。

大学へは5セメスター（学期）から編入できましたので、それから8セメスターとディプロマセメスターまでの合計13セメスターと試験期間の約3年間をETHで過ごしました。スイス連邦工科大学は、スイスの理系で一番難しい大学ではありますが、日本の大学と違う点は、この大学へは最初かなりの人数が入学してくる事です。最初の2年間は2つの試験で学生ははてんこ舞いします。この2つの大きな試験に合格しない限り上の5セメスターには上級できません。私が在学していたころは、最初の前期試験での合格者数は毎年50%程度、後期試験は75%という感じでしたから5セメスターにいる学生はそれなりに勉強熱心か、要領がよいかのどちらかでした。

この大学生活で特に印象に残ったのは、この大学の学生たちは本当に勉強熱心ということでした。母国語を話すスイスの人

々が本当に毎日毎夜、設計室でスケッチや模型作りに励んでいるのに、言葉にハンディのある私がさぼってはいは、ますますおいてゆかれるばかりですから、最初の2年間は、ほかのみんなに遅れないようについていくのだけで精一杯でした。3年目はさすがに要領を得て、自分の仕事のスタイルというものを確立することができました。体があまり丈夫な方ではなかったため、毎晩徹夜などしていれば、体を壊しますから、朝から晩の12時までみっちりさぼらずに勉強するようにしていました。

そんなこんなで大学もやっと最終のディプロマセメスターまでたどりつき、7、8セメスターを通じてお世話になったドイツ人のヘルムート・シュピーカー教授のところで最後の設計となりました。このシュピーカー教授はETHに26年来られる選任教授で、私が卒業する1年前に、本来の教職は退任なさっていたのですが、当時何人か残っていた教え子のために、退任なさっても2年間はディプロマセメスターのみを受け持たれていました。私はそのセメスターでたった一人の彼の教え子でしたから、ほかのアトリエでは一人の教授に約20人の学生がつくのが普通でしたが、私の場合は1対1の全くの個人授業で大変勉強になりました。当時の私のつたないドイツ語にも飽きずに辛抱強く聞いてくださった先生には、本当に感謝しています。

ディプロマのテーマはヴェネチアのヴィエンナーレにスイス・パビリオンを設計するというものでした。その7セメスターで一度スイスのモスクワ大使館というテーマに取り組んだこともあり、スイスのアイデンティティーをコンセプトとして結晶させることが、第一の課題でした。試行錯誤の上、ヴェネチアという水の都にちなんだ、水をテーマとした回遊庭園式のパビリオンを提案しました。形やマテリアルは現代スイス建築に特徴的なコンクリートやガラスを使ったシンプルな形にしました。シュピーカー先生の最終評価は、水を使った回遊式の空間操作はどこか日本の香りがするねということで、まずまずのできでありました。



- ① チューリッヒ市内のシュタデルホーヘン駅上の遊歩道
- ② Eシュタデルホーヘン駅（カトララーバ設計）
- ③ 同駅のプラットフォーム
- ④ リマット川からチューリッヒ中央駅と博物館を見る
- ⑤ 出版社近くのリマット川の游泳場

- ① ETHの新しい生物化学学部棟
(マリオ・カンビ設計)
- ② ETHの建築学部と
新しい生物化学学部棟



チューリッヒの建築事務所での仕事

設計終了後、最終のディプロマ試験までの6ヶ月間に、チューリッヒのマーク・リーフ・アーキテクトツという小さな建築デザイン事務所でプラクティクムも経験しました。これはいわゆる日本式の設計事務所でのアルバイトで、敷地の測量から、模型づくり、CAD、写真のモンタージュ、建材の注文などを担当しました。マークはチューリッヒの若手建築家で、スイスの“ヘルツォーク&デューラ・ミュロン”などを代表するシンプルでモダン、素材を追求する建築家の影響をたくさん受けていました。チューリッヒの動物園拡張計画をはじめ、スイス万博のコンペ、住宅、都市計画スタディーと幾つかの楽しいプロジェクトに関わることができました。マークがとても気さくで、チームプレイヤーであったこと、またアジアに興味をもっていたことなどもあり、模型づくりや、設計を通して、自分の提案ができる機会がたくさんあり、とても充実した時間でした。

ディプロマ試験に合格したときは、本当にうれしかったです。今考えても、あの頃のドイツ語の能力でよく合格できたなあと思います。5科目の必修科目の筆記と口頭試験と、3科目の選択専門科目の論文提出と口頭試験がありました。特に印象に残っているのはランドスケープの選択科目で、英語での口頭試験に最高点をもらったことです。その年のテーマであった英国風景式庭園について、本3冊を熟読し、試験に望んだこと、またそのテーマに自分自身も非常に興味があったことが、うれしい結果となりました。

ETH卒業後は、やはりチューリッヒ市内の中堅建築事務所である、CAPSという建築事務所に勤めました。フランス人であるクリストフ・カルボン氏が率いるこの事務所では、ヨーロッパに本社のある幾つかの大手有名ブランド会社(宝飾、モード関係)の、世界中の支店を設計していました。仕事が仕事だけに、事務所内は大変国際色豊で、従業員のほとんどが、英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語を話していました。私は特に、“アジアと日本”の店舗の担当者でしたが、時には北米やドイツ、イギリスの物件などにも関わり、大変勉強になりました。この事務所に勤務していた時は、やはり時間に追われていましたが、1年半という短い期間に、20件以上の物件に関わり、すべてが竣工したことを考えると、ものすごいスピードで働いていたと思います。

クリストフの事務所を退社した後は、しばらく失業していましたが、偶然にも、工学院大学時代の恩師である澤岡教授の建築研究のお手伝いをすることになりました。その時はスイスの古い建物を再利用した建築例について調査し、資料を翻訳し、最終的にレポートを作りました。このときのレポートや資料作りは、今になって考えてみれば、現在のサイト制作へのきっかけとなりました。現在の出版社での仕事にも、リサーチや

レポートはかかせないので、何事も無駄になることはないと思うと思います。

8年間を振り返って

今年の8月でスイスに移住して以来8年がすぎようとしていますが、こんなに長い年月がすぎってしまったということが信じられません。文字通り片道切符で、チューリッヒ空港にスーツケース2つで降り立ったときには、これほど長期滞在するなどは夢にも思いませんでした。チューリッヒ工科大学に留学して学位をとったら帰国するかな、などと軽く考えていました。ここまであきらめずにやってこれたのは、一重に大学時代若気のいたりから、外国留学などと言い出した学生の言葉に、快く推薦状を書いてくださった恩師の澤岡先生と、言い出した後に引かない娘を、快く旅立たせてくれた家族のおかげであると感謝しております。もちろん、スイスに来てからの私の生活を援助してくれたパートナーのフィルと、こちらで知り合ったたくさんの日本人、スイス人の友人の精神的なささえなしでは、これほどスイスという国を好きにもならなかったと思います。

最後に、恩師の澤岡先生へ

先生が書いてくださったETHへの推薦状は、私の留学と卒業を可能にしたばかりではなく、私のスイスでの建築に関わる生活の中で、自分の能力を常に発展しなくてはという動機を与えてくれるものでした。今でも、文面を思い出すたびに、学生時代の怠け者だった自分が脳裏に浮かび、フィルと二人で苦笑いする日々です。

Yuka Raeber

(ユカ ロイバー)

●卒業年度

1995年3月(澤岡研究室)
大阪府 天王寺高校出身

●略歴

1991-95 工学院大学建築デザイン学科卒業
1996-99 ETH建築学科 dipl. Arch. ETH
1999 Marc Ryf Architekten, Zurich
2000-2001 CAPS Ltd. Zurich 店舗設計
2002- PSA Publishers Ltd. ウェブサイト企画、制作

Yuka Raeber 住所

Altstetterstrasse 117 8048 Zurich, Switzerland

メールアドレス yr@psa-publishers.com



Spain 色

a round the world

紋出口

東研究室



9月4日から11日までの8日間、スペインを訪れました。
スペインの都市は、侵入者たちの影響下で特色づけられたところ
です。また、イスラムの影響は、地中海から遠い北部には比較的少
なく、地中海気候の南部に多いです。今回私は、マドリッドとバル
セロナを主に回りました。マドリッドは、イベリア半島の中央に位
置し、標高650mとヨーロッパでは一番高度にある所です。

1561年、フィリペ2世がトレドから首都を移動して以来、マドリ
ッドはスペインの中心として栄えてきた都市です。バルセロナは地
中海に面しており、古来から交易の中継地として発展し、スペイン
の中でも最も強くローマの影響を受けた反面、イスラムの支配が短
かったため、スペインの中央部とは異なる独自の歴史を歩んできた
地域です。

ガウディに出会ってから、スペインという国にも興味を持ち始め、
街並みや作品を実際に見て、触れてみたいと思っていました。
これから、私を感じ得たことを書いていきたいと思います。

町並み

私は、初めに首都マドリッドを訪れました。ヨーロッパというと、昔の建物を残している町並みを思い浮かべます。マドリッドもそうであり、100年単位の建物はざらで、古いものを大切に作る民衆の生活と建物のもつ重厚さが程よく合っているように感じました。特に感じたのは、建物の高さや配色の調和がうまくとれ、町並みの木々も日本に比べ背が高く存在感がありました。



セゴビアの街並



トレド旧市街地(世界遺産)

日本の都市では、平屋や高層ビルが混在したり、都心の過疎化傾向があるのに比べ、スペインは5階から8階くらいの建物で、色もくすんだベージュや煉瓦色、灰褐色などのシックなトーンが基調となっており、丸瓦・平瓦がうまく溶け込んで、素晴らしい町並みを形成していました。また、修復時に厳しいほどの調和を義務づけられる地区も多いそうです。しかし、このような建物にもオートロック式施錠が付いていて少し残念に思いました。

バルセロナで思ったことなのですが、日が沈み暗くなると、有名な建築物だけでなく、普通のアパートやマンションもライトアップされているところもあり、とても美しかったです。これも、昔の町並みを残しているからできることです。また、都心には一軒家を見ることはありませんでした。町を外れると、分譲住宅のように、同じ形状が並んだ、一軒家を見ることができました。



カテドラル(トレド)

パティオ

パティオとは中庭のことで、5月の花の咲き誇る季節になると、家々の中庭やバルコニー、格子窓などが鉢植えの花や観葉植物で埋め尽くされ、美しさを競い合う、パティオ祭りが開催されます。このコンクールのために1年中、頑張っている人もいます。

日本に帰ってきて調べたところ、元々、パティオは集合住宅の共同所有の庭という考え方で始まったとされ、スペインのゴールドバで、日々の手入れにいそしむという習慣が定着したようです。また、お客様を招きいれたらまずパティオへ案内するのが礼儀だそうです。

マドリッドの街を見ていて、一軒家というものを見かけませんでした。したがって、壁に四角く囲まれた中庭を共同で使用したりしているようです。中庭なので門の格子から覗ける程度でしたが、とても美しかったです。



王宮(マドリッド)



カテドラル(セゴビア)

スペインの住宅

スペインの建築物は日本と作り方が随分違うなと感じます。まず、柱ばかりといった感じの枠だけの構造物が出来上がり、柱と柱の間にレンガを埋めていきます。地震がないからできることで、躯体に関していうと日本とは比べ物にならないくらい、コストがかからないと思います。また、窓の外側に直射日光を遮るためにブラインドシャッターがついていました。レンガは地下の水蒸気を吸い上げる自然の摂理に合っています。これは井戸水の原理に近いところがあるように感じられます。夏は冷たく、冬は暖かくということです。また、パティオがあるので、大いに利用し調節できるのだと思います。

でぐちあや
紋 出口

出身高校/私立十文字高等学校
大学/工学院大学工学部建築学科
2000年入学 2004年卒業
研究室/東研究室
就職先/積水ハウス株式会社
設計課 コーディネーター
配属先/東京城東営業所
住所/東京都江東区亀戸2-35-13 新永ビル1・2階)

スペインの習慣 <シiestaと年越し>

スペインには、シiestaというお昼休みがあります。時間でいうと、2時～5時くらいまでです。さすがに、観光地ともなれば、お店は開いていましたが、観光の移動中に街を通ったとき、今日はお休みだろうかと思うほど、きれいにお店は閉まっていました。昼間にこれだけ街が静まり返るのを見たのは初めてです。シiestaの習慣は、警察も同じで、2時～5時くらいまで街に警察がいなくなるのには、とても驚きました。

日中仕事をする、太陽で身体が参ってしまうから、働く人の生活の知恵から、シiestaの習慣が生まれたものということを知りました。太陽が頂点にくる時間であるから、石造りの西洋建築の場合、暑さを逃れるためには部屋の中が一番よいというもの、今もシiestaが受け継がれている理由のひとつではないかと思えます。

年越しの話もしたいと思います。日本では、年越しそばですが、スペインでは年越し葡萄です。スペインでは、新年に鳴る12回の鐘の音と共に葡萄を食べるといった習慣があり、鐘の音と共に12粒食べることができると、その年は健康に過ごせるといった言い伝えがあるようです。元旦は重要視されないのですが、このような習慣があり、面白いとおもいました。

バルセロナでは、ガウディの作品を中心に回りました。本やテレビなどで見たことがあるものはもちろん、言葉でしか知らなかったものを実際に見て、ガウディの伝えたかったこと、表現したかったことを私なりに感じることができました。自然を感じたままに素直に形にできるガウディはやはり素晴らしく、すべてが違う表情をしていました。

サグラダ・ファミリアは寄付金だけで工事が行われていて、年に2回の募金で集められたお金と、観光客の入場料から成り立っています。今回行って、初めて知ったのですが、サグラダ・ファミリアはあと30年くらいでできるそうです。その訳は、オリンピック以降、観光客も増え、10～20人で行っていた工事も現在では150人で作業しているからです。サグラダ・ファミリアの完成した姿を見るのは楽しみであるけれど、工事している姿を見られたことも光栄です。そこで、汗を流して真剣に陽気に工事している人達を見て、ガウディが現代の人に残してくれたものを感じました。ガウディが詳細の図面を残さなかったのは、その時その時の人の感性やアイデアが混ざり合って、歴史をつくっていくため、そんな印象を受けました。スペインができていったようにサグラダ・ファミリアもできるのだと思ってしまいました。



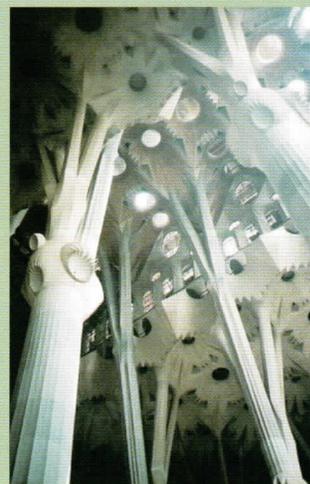
カサ・パトリヨ



サグラダファミリア

おわりに

今回、大きく分けて、スペインの4つの都市に行くことができ、それぞれの“色”に、バルセロナでは、念願のガウディの作品に触れることができました。短期間ではありましたが、歴史・文化・世界遺産・建築など、たくさんの方に触れることができました。全く違う文化の土地にいったことで、自国の経済が発展したことを感じたり、日本や自分の考え方を見つめなおす機会を持つたと思います。ガウディの作品を実際に行き、そこで過ごしてみて、芸術的かつ機能的、自然との調和、仕掛け、本当に不思議なものでした。ブルジャワがたくさん存在し、出資者がいた大帝スペインであったからこそ、ガウディは存在できたのだと改めて感じました。これから、サグラダ・ファミリアの経過・完成を必ず見たいと思います。今回の経験を、今後の活動にも活かすことができるよう努力していきたいです。



サグラダファミリア

建築体験から 得たものの

ヨーロッパ 環境共生 まちづくり 研修ツアーを 終えて



パリ、ボンビドーセンター、
パリの街中にこの原色の建物がある
物議をかもし出したのが良くわかる

a round the world



アムステルダムの路面電車、
子供が落書きしている
ようなペイント、
茶目っ気がある



ドイツ・
ミュンヘンの
中央広場近く、

自分のストックとすることが重要と思うようになり、
2004年建築ツアーの参加を決めた。
旅行の発案段階から参加し、研修先は、
引率の東先生と相談して、オランダ、フランス、
ちよっとのスイス、ドイツ、スペインの五カ国を巡ることとした。
参加人員を募り、30余名での研修となった。

オランダ、老人の集合住宅、
突出部に住む老人と目が会う。
真四角の建物だと
体験できなかった。

東研究室
建築学科・建築コース3年
濱奈津子





パリのメトロ、タイル貼りで光の反射があり、独特の雰囲気



ノートルダム大聖堂、朝一番に訪れたので朝のお祈りをしていた、観光客が多い



フランスの地方都市、落ち着いてゆったりしている。町並みも整っていた

聖堂の空間

馴染みのない聖堂という空間は、宗教的な施設ということもあって、よそよそしく感じられた。無宗教の人間が物見遊山で聖堂を訪れるとは、どう考えてもばちあたりだと思ったからだ。しかし、その興味本位の見物で私は貴重な体験をした。ノートルダム大聖堂での朝の礼拝の体験と、ロンシャンの教会での光の体験である。ノートルダムを訪れたときは、日曜の朝9時ごろだった。神父さまの説教が側廊に反響して、身体に伝わる。朝の日射しがステンドグラスを照らし、説教が神さまのささやきに聞こえてくる。なんとも不思議な体験だった。コルビュジェのロンシャンの礼拝堂では、数々の幾何学ステンドグラスの窓や塔状の吹き抜け空間から、色彩と共に「降りてくる」光が象徴的だった。否応なく厳粛な心持ちになってくる。その後、思いがけず晴天に見舞われ、雲間から射す光に、もしかしたら本当に神さまがいるのではないかと思ったくらいだ。身体を経験から精神へ訴える空間の力というものを、これほどに感じたことはなかった。建築は人間をつくるといっても過言ではない。具体的なものであるために、設計段階とは違った力を持つこともありうる。建築をつくるということが、恐ろしいとさえ思った。



パリの北駅、日本の駅と異なり明るく、照明も可愛い

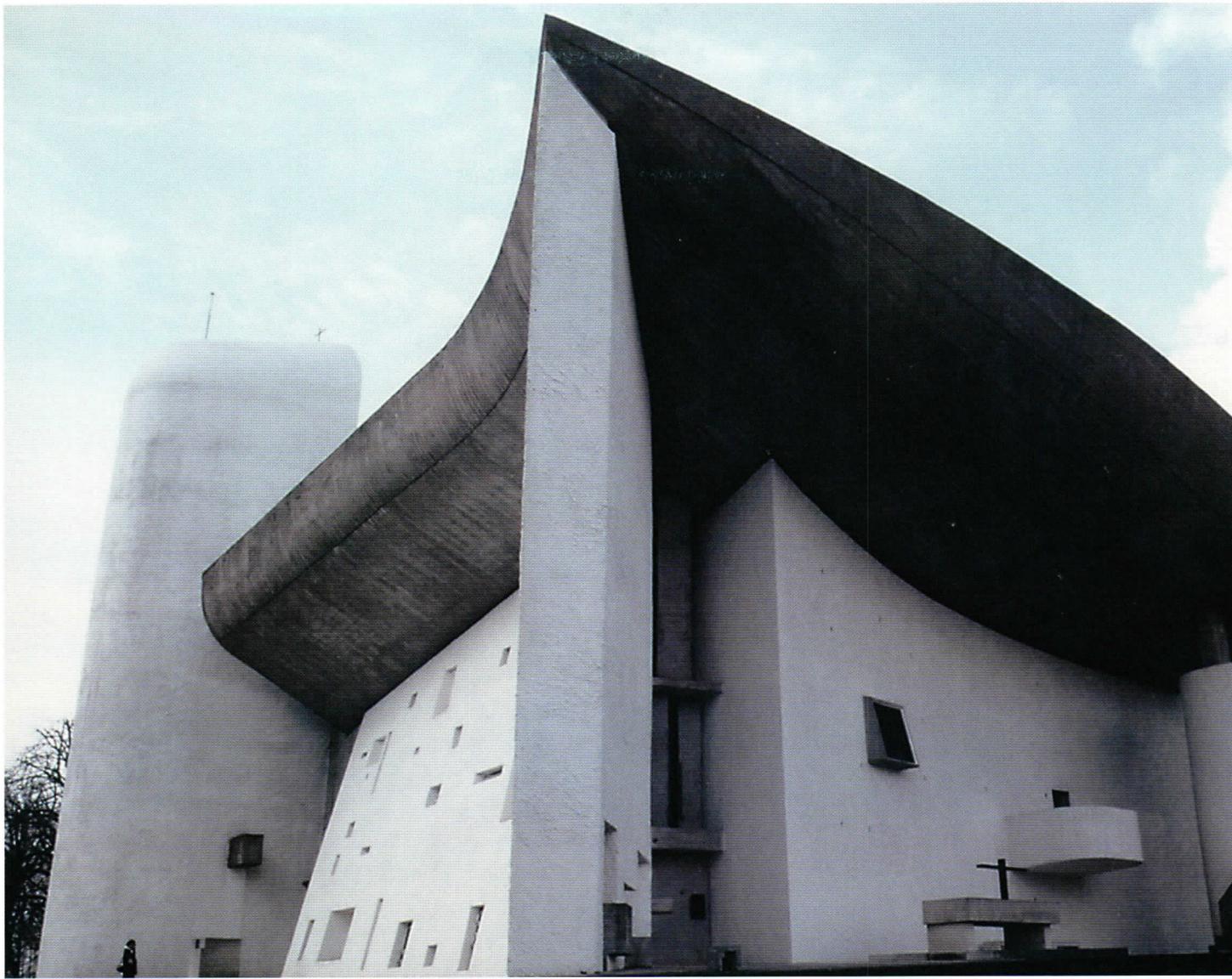
生活を楽しむ人々

アムステルダム空港を降りたときに感じたのは、日本の公共施設特有の、官製のちゃちな感じがないことだった。まちなみも、古い建物と新しい建物が一緒になって、その場所から自然に立ち上がったように空間がつくられていた。ヨーロッパの人々は住生活を大事にしているとよく言われるが、住に限ったことではなく、彼らは単に自分の生活を楽しんでいるだけのように見えた。部屋のカーテンを変え、花を飾り、おいしいパンを買い、まちの中を散歩する。自分の身体スケールでの生活を充実させること、その生活の延長が、部屋から建物、まちなみへと拡がって、まちの担い手のアイデンティティを反映することに繋がると考えられないだろうか。私的空間が公的空間やまちの景観を形成する要因となるとすれば、いかに私たちの生活の質というものが、貧弱で浅薄であるかがわかる。一応の体裁だけを整えた「普通」の生活。生活の舞台としての建築は、主体的な行為を誘発させる可能性をもつべきである。「日本人は働き過ぎる」と言われるのは、現代日本の生活の質の低さの、端的な描写であると思った。

スペイン研修の断念

ドイツでの研修も終盤を迎え、ハイライトであるスペインを訪れる前日、大変なことが起こった。2004年3月11日、スペインのマドリードでスペイン史上最悪の爆弾テロが発生した。死者200人、負傷者1,400人を超える大惨事となった。スペイン国内は3日間の喪に服し、私たちが主催の旅行社の判断でバルセロナ行きを断念することとなった。充実していた旅行であっただけに、全員が楽しみにしていたガウディの作品を見ることが叶わず、意気消沈としてしまった。

日常の中に突然すべてを覆す出来事が起こり、様々なことが頭を巡った。生命の危険を感じるというよりは、順調に進むはずのことが断ち切られるという困惑を感じ、事件の淵に立って初めて、自分の介在し得ない世界が動かす力を実感することになった。理解も把握も何もできないのだから、私の知らない理不尽なことが背景にあるのだろう。今回の事が突然起こったように思えるのは、自分自身の無知のせいである。自分の無知と軽薄を恥じると共に、知らないことを知ろうとする努力、見えないものを見る想像力を持つ必要を絶対的に感じた。知らないことは罪である。本当に恥ずかしい。



パリセーヌ川沿いの露天本屋、
収納されている本達、
その姿も美しい



ドイツ、
シュバルツバルトの黒い森、
倒木の根元で、
森の管理人にガイドしてもら

おわりに

このように振り返ってみると、考えて信じていたことは、殆ど紙の上の話でしかなかった。当然そうあるはずであろうという理屈とは、少々異なる実感を得ることになった。また、ヨーロッパを見ることでしぜん、日本と日本で育ってきた自分を見つめるようになった。ますます、体験というものの情報の濃度を感じ、日常を離れる必要を感じている。日々の精進、努力も今以上に必要であることも。

最後に、このヨーロッパ建築ツアーの企画に賛同していただいた皆さん、相談や引率を快く引き受けて下さった東先生、わがまを聞き入れて下さった近畿日本ツーリスト渋谷支店の皆様に深く御礼申し上げます。

私自身について

建築学科・建築コース3年 2002年入学生
現在 東研究室に所属 千葉県立小金高校出身

今回の「ヨーロッパ環境共生まちづくり研修ツアー」は、本来企画はなく、旅行参加希望の強い有志によって、建築系学科にて企画賛同者・参加確約者をパンフレット(別紙「ヨーロッパ建築探訪・事前申し込みについて」参照)で募り、最少催行人数の参加確約のもと実現へこぎつけた経緯があり、東先生や企画賛同者の協力がなければ実現しなかったものです。そのため、文章末尾に感謝の言葉を挿入させていただきますこと、お許し下さい。

メールアドレス:d102115@ns.kogakuin.ac.jp

ロンシャン教会堂、
滅多に晴れないのに青空がのぞく、
神様が晴らせて
くれたのかもしれない

フランクフルト空港、
ガラスの透明感のある検閲所、
日本のような窮屈さがない



ドイツ、シュタムハイム青少年の家、
手づくりの建物にみんなが集う

記

旅行成立人数／20人

旅行期間(予定)／3月中旬～下旬の二週間程度(日本から移動などで、正味10日ほどになります。)

※帰省される方などの事情も考慮し、3年前期授業開始の直前になるかと思われます。現在協議中なので、諸事情によって変更になることも考えられます。ご了承下さい。

視察予定地(代表的建築)／

スペイン・バルセロナ(サグラダ・ファミリア／アントニオ・ガウディ、バルセロナ博ドイツ館／ミス・ファン・デル・ローエ) オランダ・アムステルダム(高齢者用集合住宅／MVRDV、ユトレヒト工科大学エデュカトリウム／レム・コールハース) ドイツ(エコハウス)

※視察地は一例です。現在この3候補が挙がっていますが、この期間で廻れるのは4カ国が限度です。※ 各視察地で、半日ほどの自由行動が許されています。

引率／建築学科 環境コース／東 教授

予算／約35万円

※別添資料の「ヨーロッパ建築ゼミナール事務局」企画のものでは、二週間で約47万円かかります。 以上

なお、この企画が成立するかどうかは、参加確約の人数にかかっているため、上記の内容は変更することもあります。企画段階のものであるため、参加者の総意によって、できるかぎり希望のプランに近づけることが可能です。要望があれば、できるだけ取り入れていきたいと考えています。学生からの提案としてこの企画を提案していますので、企画・立案に協力していただける方は、一声かけていただきたく思います。御意見宜しく願います。

ここでお願いがあります。

本企画の参加が現時点(2003年10月現在)で確約できる人数が、20人を超えれば、本企画は成立し、水面で検討して来た内容も、全学生向けに公表することになります。更に、その人数が多ければ多いほど、旅行会社から提示される旅行見積りが安くなっていきます。つまり、この企画が成立する時点での参加人数が20人を超えればそれだけ、旅行予算が安くなるわけです。

現時点で参加の確約ができる方は別紙の参加確約者名簿に、学科／コース、学籍番号、氏名、視察地に加えたい地名や建築物を明記して頂きたく思います。加えて、この企画をより参加しやすいものにするために、参加を確約できる方を募っていただけたらと思います。宜しくお願いします。

ツアー成立までの経緯

ヨーロッパ建築探訪・事前申し込みについて

03/10/27 D1-02115 濱 奈津子(企画)

<本旅行の企画にあたって>

毎年、学科担当の東教授が企画されていた建築旅行が、昨年アメリカ旅行の中止もあり、今年は企画されない見通しであることがわかりました。建築を学ぶ学生にとって、海外の有名建築に触れ、実際にその空間に身を浸すことは、何物にもかえがたい貴重な経験です。その上、本学の学生による団体参加で、専門知識をもった東教授が引率して下さり、他の建築ツアーよりも安価で旅行できます。しかも、個人旅行では外から見るとしかない建築物も、団体なら実際に中に入ることが可能な場合もあります。この企画を来年に実施するとすると、時期としては3年生の春休暇になってしまい、就職や進路のことで、旅行どころではない多忙な状況が予想されます。

若いうちに色々なものを吸収したいと思うのは、至極当然のことです。自分への先行投資と思って、是非この企画に賛同していただければと思います。偉大な建築家は皆、旅行家でもありますから。

はじめに

2004年1月1日、成田から12時間のフライトを終え、ジョン・F・ケネディ空港に降り立った。ニューヨークに来るのは初めてである。そして、初めての海外一人旅でもあった。期待と不安の入り混じった旅のはじまりである。今回、私は人工的な大都会の中に位置し、憩いの空間となっている「アトリウム」「ポケットパーク」を重点的に見てきた。

ニューヨークと聞いて忘れることができないのが、あの事件である。同時多発テロから2年以上が経ち、ニューヨークの街そしてニューヨーカー達は何事も無かったかのように活気に満ち溢れ活動していた。グランド・ゼロがあるロウアーマンハッタンはウォール街があり高層ビルが高密度に建っている地区で、歩いていると突然視界が開け、その場所

がグランド・ゼロだった。

WTCが消えた時の感情は衝撃などと言う一言ではとても表現しきれないのであった。あの時ニュースで見たまさにその現場が目の前にあることがとても不思議な感じだった。フェンスには黒いプレートがあり、犠牲者の名前が刻まれ、その中には日本人の名前もあった。また、折鶴も結び付けられていた。歩道では、多くの人々がアメリカ民謡であるアメージング・グレースを歌い、涙していた。

このようなニューヨークで過ごした9日間で私が学んだこと、感じたことを書きたいと思います。

街並み

ニューヨークの街並みへの印象は、中・高層の建物が高密度に建ってい

て、建物の壁には落書きがしてあり、汚く、息苦しいような印象をもっていました。しかし、実際行ってみるとそうではないことが分かりました。中・高層の建物が高密度に建っていて、たまたま建物の壁の落書きを見つけることができたのは事実でしたが、決して息苦しさを感ずることはありませんでした。それは、車道と歩道の幅員が大きく関係しているように思われます。日本ではあまり見ることがないような幅員が20~30mもある道路が作られ、歩道も十分幅員が確保されていました。そのほとんどが一方通行という事におどろきました。また、歩道に電柱が立っていないことが開放感をあたえる要因になるのだと実感しました。

建物は、高さや配色が考えられていて、直線の道路と建物がうまく調和されていて街並みが美しく感じました。



グランド・ゼロ



フェンスにかかる黒いプレート



ソーホーに残る
カースト・アイアン建築

アトリウム ポケットパーク パルク オアシス 都会の



a round the world



船から自由の女神を望む



チェルシーにある住宅街



ベイリーパーク



エクイタブルビルのアトリウム

憩いの空間 「アトリウム・ ポケットパーク」

今回、アトリウムとポケットパークを調査することが、旅の一番の目的でした。ニューヨークの中心業務地の一つであるミッドタウンは数多くのアトリウムとポケットパークが集中的に分布している地域です。

IBMビル、トランプタワービルなどの低層部は特色あるアトリウムが人々に公開され、ミッドタウンで働く人々の憩いの空

は季節的な関係もあり、あまり利用している人々を見ることができませんでしたが、公園内に滝や樹木があり、想像ではありますが、アトリウムと同じように夏は憩いの場となるのではないかと思います。

現地に行ってみて、アトリウムとポケットパークはそれぞれが独立して成立しているのではなく、二つが同じ地域に配置されていることにより、さらに有効な空間となるのだと思いました。冬は、アトリウムが憩いの場となり夏はポケットパークが憩いの場となることにより、一年を通して市民のための憩いの空間が確保され、有効に使うことができるのだと考えました。このような空間が東京に少ないこと

が多いように感じたので帰国してから調べてみると、ミッドタウンに住んでいる人々の約40%は徒歩で通勤しているとのことでした。東京都心4区(千代田、中央、港、新宿区)の徒歩通勤率は約25%で、ミッドタウンの徒歩通勤率が高いことが分かりました。

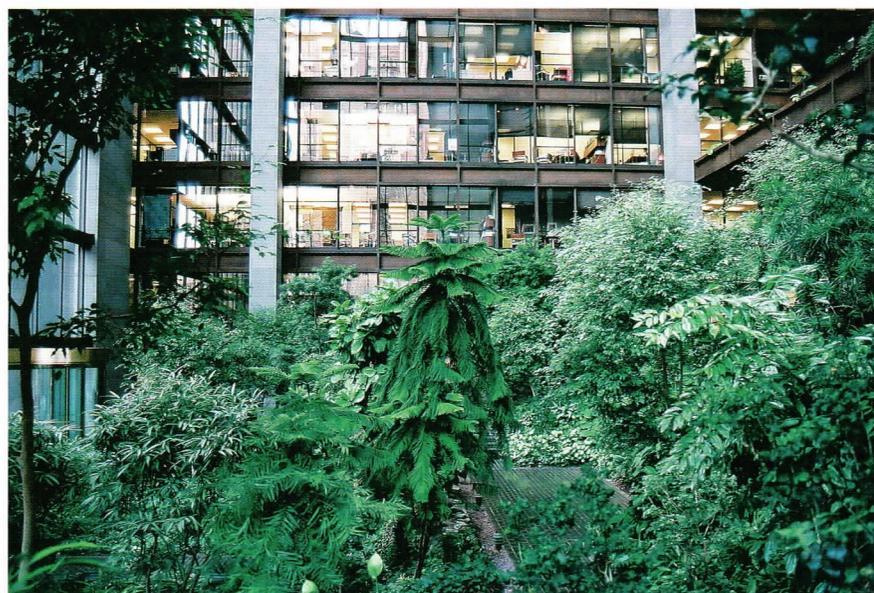
人種の サラダボウル

ニューヨークの街を歩いていると、様々な肌の色、言語を使う人々と出会います。世界中から人、物、情報、金が集まるニューヨークならではの事だと思いました。人の価値観、習慣、文化の違いの多様性に驚かされました。日本のような単一民族の国で生活していたらあまりそのような事に気づかずにいたかも知れませんが、ニューヨークで気づくことができ今後の人生の中で大きな財産になったような気がします。

最後に

9日間という短い期間ではありましたが、ニューヨークで様々な建築や文化に触れることができました。都心での憩いの場は、アトリウムとポケットパークが共存することにより有効な空間として成立することが分かったことが最大の収穫でした。

現在ニューヨークは不安定な世界情勢の中心にあります。国際問題を抱えている人類の一人として、日本という住み慣れた土地を離れ、ニューヨークという世界の中心地に行くことができ、様々な文化や価値観に触れ、問題を知ることができ、日本という国そして自分というものを改めて見つめ直すことができたと思います。そして、今回知ることができた建築、文化、そして経験を今後の人生に生かせるよう励んでいきたいと思っています。



パークフォード財団のアトリウム

間となっています。冬の気温が氷点下にまでなるニューヨークでは、暖房が効いているアトリウムが人々にとって、とても重要な空間であるように思いました。

いました。会話をしたり、読書をしたり、話をしたり、各自が自由、かつ有効にアトリウムを使っていて、生活の一部になっているように思えたのが印象的でした。

また、ベイリーパークやグリーンエイカーパークなどのポケットパークでは今回

が残念であります。

朝の地下鉄

東京では既に当然のようにになっている朝の通勤ラッシュですが、ニューヨークのそれはどうなのかと思い実際に乗ってみました。実際乗ってみると東京の通勤ラッシュとは比べ物にならないくらい空いていました。都心にもマンションなどの住居



IBMビルのアトリウム

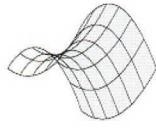
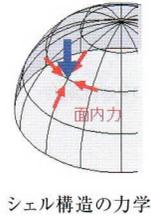
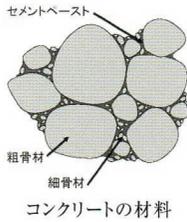


グリーンエイカー

飯島 貴智

2003年3月
工学院大学 工学部
建築学科卒業
2003年4月
工学院大学 大学院
工学研究科建築学専攻
修士課程入学
東研究室





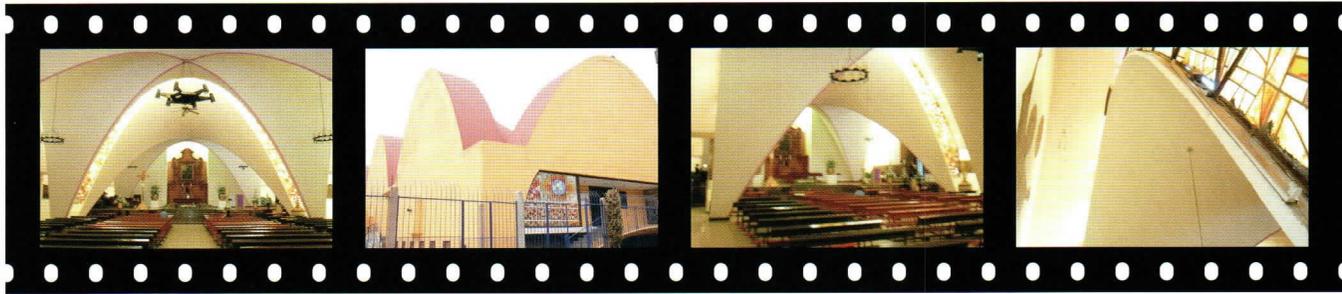
コンクリートとシェル構造

コンクリートはセメント、粗骨材、細骨材、水で構成されており、型枠の形状次第で自由な形状が作れる。

シェルは構造物の大きさに比べて非常に薄い材料で作られる曲面板状の構造である。局部的には曲げ応力も作用するが、ほとんどの力を面内力として伝達させるのが特徴である。HP (Hyperbolic Paraboloidal) シェルは放物線運動が曲線群と曲線群と直線群によって織りなされて構成された立体曲面である。

フェリックス・キャンデラ

キャンデラは1910年にスペインに生まれ、スペインの内戦の勃発で1940年にメキシコに亡命した。キャンデラが建築の仕事に携わるのはメキシコに移ってからである。それからR.マイヤールの設計理念を元にシェル構造を作りはじめた。多くのシェル構造の実現はキャンデラの優れた計算能力と直感に加え、低賃金の労働力が得やすいメキシコという土地柄と、当時のこの国の建築法規が厳しくないことが要因である。



サン・アントニオ・デ・ラス・ウェルタス教会

15m四方の鞍型HPシェルを交差させ3連続に並べたもので、高さ7.5m、シェルは厚さ4cm、基礎では10cmに補強されている。シェル間にスリットを設けてアーチ光が導かれる。

メキシコ!

a round the world

建築見

フェリックス・
キャンデラを訪ねる

学

1950年~60年代に
世界的に注目を

シェル構造を用い
浴びたフェリックス・

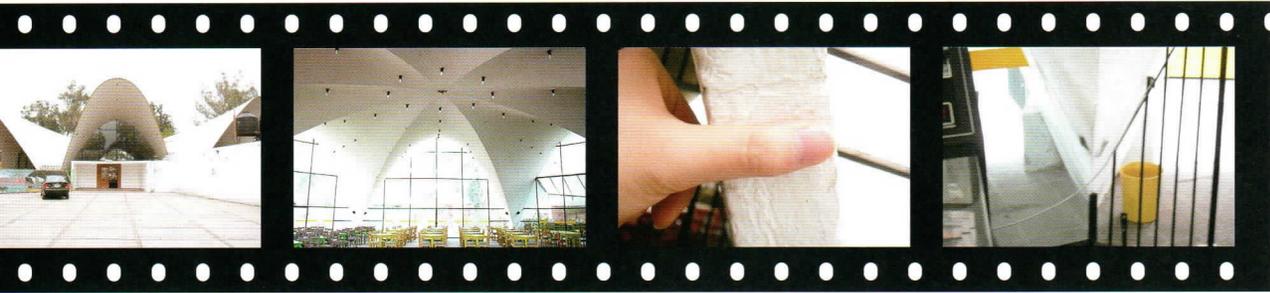
キャンデラという構造家がいた。キャンデラは自由度な形態を目指し、曲面、薄さ、光といった要素を建築にうまく取り入れた。

本報告は数ある作品のうち、メキシコシティのコンクリートシェルの作品を紹介する。



サンタ・モニカ教会

8枚の放射状のHPシェルが中心に向かって傾いた巨大柱で支持されている。シェル間にスリットを設けて光を導くことで外観にはない優美で求心性のある空間である。



レストラン・ロス・マナンティアレス

船遊びの名所ソチミルコにあるスパン30m、中心からはね出し先端まで21mの4つの鞍型交差シェルを組み合わせている。シェルは厚さ4cm、基礎では12cmでエッジに梁をつけず薄さを際立たせる構造は非常に軽快である。



イグレスΙΑ・デ・ラ・ヴィルヘン・ミラグローサ教会

設計、施工の一切を請け負って建てた最初の教会である。80枚のHPシェルを組み合わせた倒立傘型シェルで構成されている。複雑な柱のプロポーションはコンクリートならではである



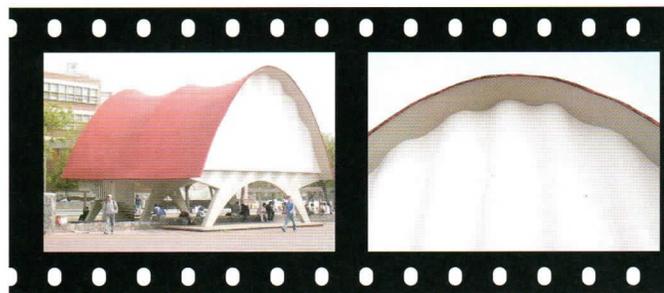
サン・ヴィセンテ・デ・パウエル礼拝堂

3枚のHPシェルの組み合わせでシェルの結合部分にはステンドグラスによるスリットがとられている。



ヌエストラ・セニョーラ・デ・ラ・ソレダ礼拝堂

スパンは対角線方向に各々25m、30mで単一のHPシェルである。



宇宙線研究所

メキシコ自治大学内にあるスパン10m、頂部の厚さが1.5cmの2連鞍型HPシェル構造物である。この「薄さ」が世界に彼の名を記憶させるようになった。

西村 武

Takeshi Nishimura

設計

駒澤大学
附属
高小
苦小
高等
学校

未来を拓く

魅力的な

キャンパス

札幌で事務所を開いて、かれこれ35年になる。気付いてみると教育と福祉関連の建物を多く手掛けていた。人生の丁度「要となる環境づくり」が少子高齢化でクローズアップされるようになって久しい。

既存建物の老朽化と開校40周年記念事業として設計させていただいた高等学校である。めまぐるしく変化する社会環境を視野に入れた新しい時代にふさわしい教育環境が求められ

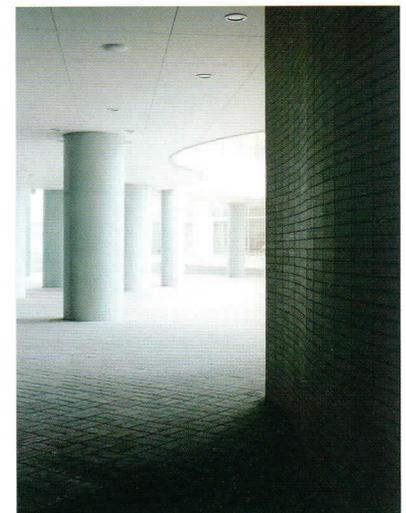
た。そこで多世代に渡る地域の人々がボランティア活動・生涯学習等、様々な機会を通して集まり交流できる「地域のコミュニティーセンター」としての機能を持った教育環境を提案した。

学校は社会的インフラであり、そこから輩出される子供たちも社会の財産であることから学校は、より公共性を担う施設となるものと考え、積極的に利用され「地域と結ばれる学校教育環境」を目指した。





アプローチに配した多くのゲートの重なりがシーンを分節し、シーケンスを作ることで、世の東西を問わず歴史的にも深い意味を持つ「学びと門」を意図している。



ランダムに立つ木立のような柱、風の流れを視覚化したウェイブーフ…新旧様々なテイストの各ブロックを2階レベルの渡り廊下で繋ぐことにより地上を自由にし、上部の渡り廊下はゲートとして空間を仕切ると共に柱の重なり、重層性が創作的出会いの場を演出する。

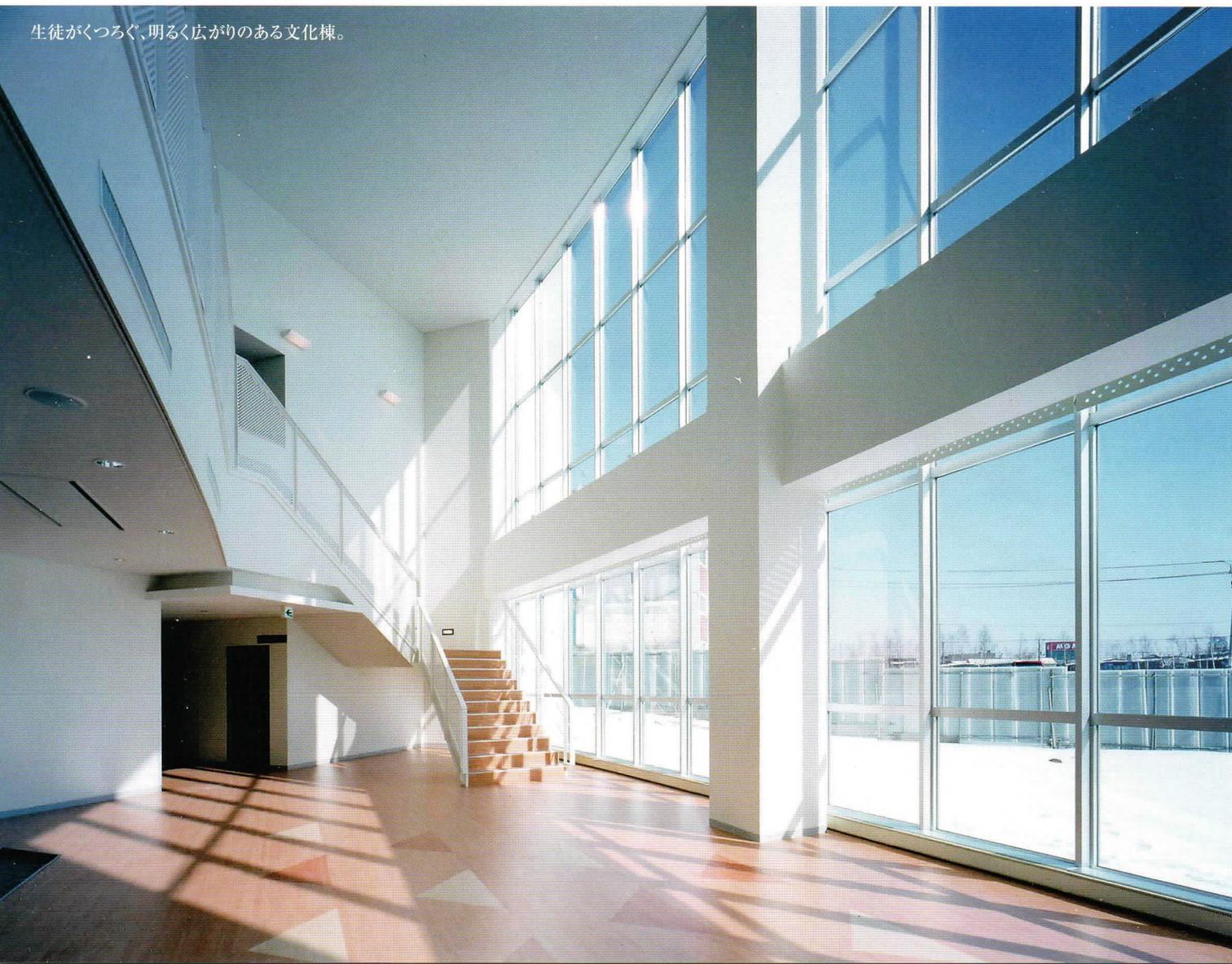


■アトリウムのある教育空間 都市の公共的イメージを注入

環境負荷・稼働効率から建物は北国型のコンパクトな都市空間的設計手法を採用している。建物の中に取り込んだ「内なる都市空間(アトリウム)」はその連窓と回廊をオフィスのファサードやバルコニーに見立て「公共的都市の一断

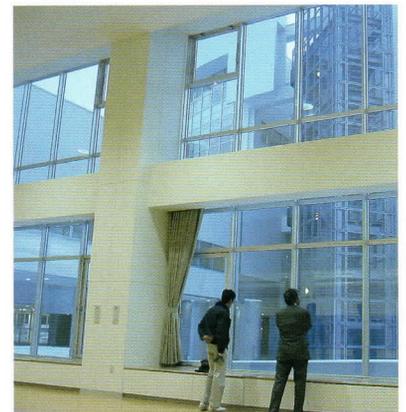
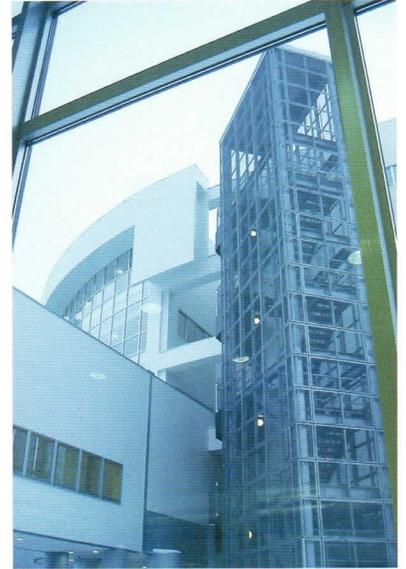
片」をイメージしている。サークルライン(回廊)が建物の中を通り抜け、周辺に生徒のための小さな対話の場を設けると共に廊下(路地)と階段は各階とイベントホール(広場)を繋いでいる。アトリウムとこれを巡る回廊・バックヤード付ステージとスタンド(大階段)は「回遊式庭園であり劇場空間」という多様性を内包し「社会性と自制心」を育てる「公共的空間概念」をキーワードに構成している。

生徒がくつろぐ、明るく広がりのある文化棟。





外部からは、大きなガラス面を通して活気のある活動風景を見ることができる。



ガラスを通した内外の重層性が、空間の奥行きを感じさせる。…光庭から廊下をはさんでガラスごしに石庭を見る。



イベントホールは休み時間を利用して部活による新入生勧誘パフォーマンス等、教室に面したギャラリー(廊下)スタンド(大階段)からながめる「学年をこえた劇場空間」となっている。



2004年 8月 第86回
全国高校野球選手権大会
優勝
駒大苫小牧高校



■設計手法

設計には、段階別に相互のコミュニケーション用にとアニメーションCGを使い、景観のみならず内部に至るシミュレーションを行なっている。これは単に意図の伝達や共通認識だけではなく製作の際、制作側に多くの検討を伴うことを意味する。

■後記

まだ4月にスタートしたばかりだが、来校者の多いことに安堵していると共に「まず知ってもらい、来てもらい、共に行動する地域の教育拠点にしたい」という関係者の初期の意向に応えられたことを満足に思っている。さらに「まちづくりは人づくり」とする考えのもと、地域の活動を受け入れた様々な利用形態で、今後多くの「教育の種」が実を結ぶことを楽しみに見守っていきたいと思っている。



コンピューター室だけでなく、生徒が身近に触れられるラウンジホールにも端末を設置。



西村 武 (にしむらたけし)

北海道 上川町生まれ (北海道立旭川東高等学校卒業)

1940年3月1日生まれ

1962年3月 工学院大学建築学科卒業 (横田研究室)

1962年 (株)熊谷組入社

1969年 (株)西村建築設計事務所設立

現在に至る

日本建築家協会 北海道支部 会員

北海道建築士会 札幌支部 会員

北海道建築士事務所協会 副会長

札幌設計会 副会長

札幌商工会議所 部会役員

札幌まるやまライオンズクラブ 元会長

賞

1988年 北海道帯広美術館構想設計 特別奨励賞

1996年 北海道立北方四島交流施設構想設計 特別奨励賞

1999年 工学院大学学園創立115周年記念体育館プロポーザル 優秀賞

2001年 北海道立栗山高等学校プロポーザル 入賞

〒060-0062

札幌市中央区南2条西13丁目318番地

TEL : 011-231-6303

FAX : 011-281-3984

E-mail : narc@n-arc.co.jp

駒澤大学 附属 苫小牧 高等学校



明るく開かれたガラス張りのレストランとミニコンビニが校舎棟と文化棟との間の広場に沿って開かれている。



石田 亨

Kyou Ishida

設計

ブルー
青山
ビル

街や人と
インタラクティブに
発光するスキン

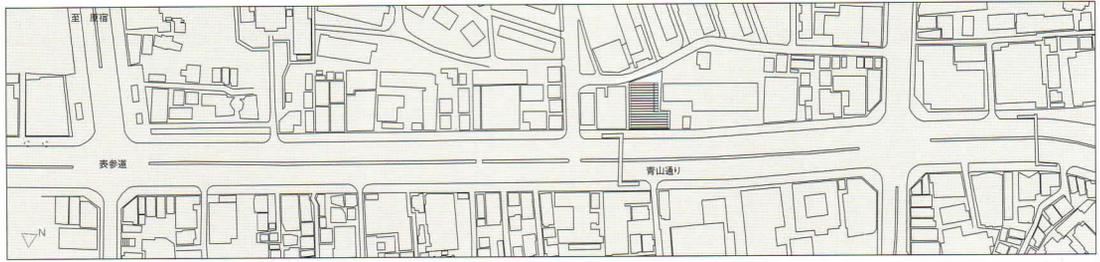
大学を卒業して既に10数年の年月が経ってしまった。
日建設計に入社し様々な物件に携わってきたが比較的大型な物件が多かった気がする。

当社の意匠設計業務においては、規模によって違うが殆ど2～3名のチームにより設計を進める。プロジェクトによっては異なるが、私の携わった大型物件は途中参加で設計を行う場合が多かった。その中でも本件は比較的小規模な(日建の中では)青山通りに建つ賃貸オフィスである。本件は初めてのクライアン

トであったのと、学生時代青山に住んでいたこともあり、業務委託から竣工に至るまで担当として参加でき、良しも悪しも特に思い入れが強い建物となった。

設計当初、チーム内のコンセンサスを得るために、明確な目標と図式を打ち立てた。この目標は矩形のレンタルスペースの徹底と経済的な探求であり、「矩形のレンタルスペース」とそれをサポートする「それ以外のスペース」により新しい賃貸オフィスの図式を描くことであった。





また新しい建物のあり方を模索するため、表層部分を単なるカーテンウォールやフレーム、設備といった単一の機能に分化しないで、境界を構成する要素を矩形のスペースを包み込む被膜的な構造と捉え「スマートスキン」と称した。それを青山通りのコンテキストの中にローカライズさせることであった。

この図式を実現させる為以下に提案を行った。レンタルスペースは、不整形な敷地の形状のなかで取りうる最大の矩形を確保した。階高を抑えるため、H型鋼フレームを桁行に1.8mピッチで配置した。さらにすべてのフレームをレンタルスペースから追い出し、文字通りの無柱空間となった。高密度で林立するH鋼のフレームは、耐火検証法を用い東面ではダブル

スキンの中に、南北面では外部に、いずれも耐火塗装のみでそのまま露出させた。

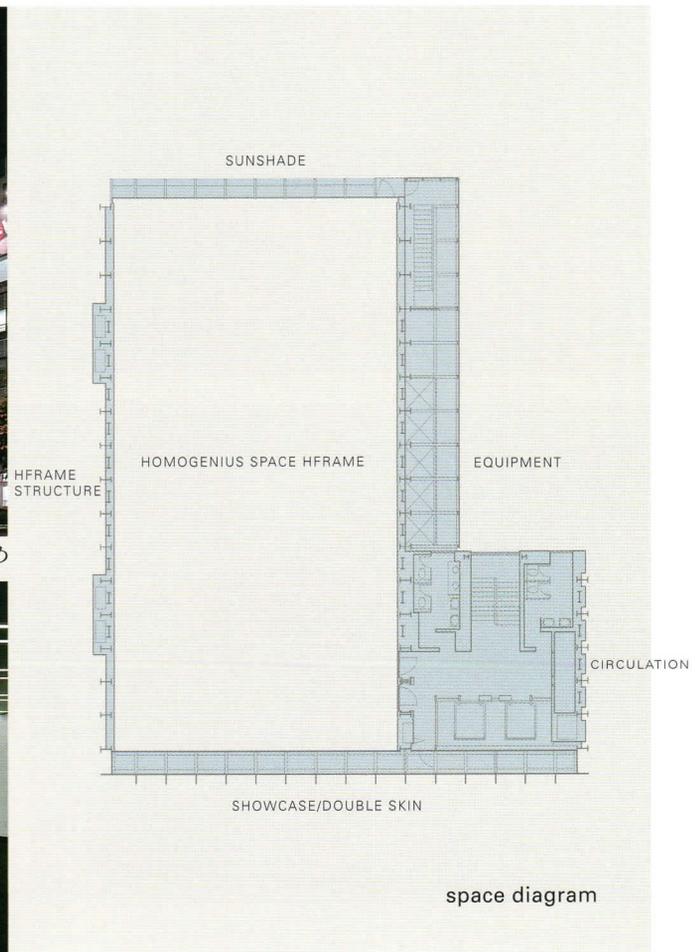
青山通りに面する東面は、レンタルスペースからエレベーターを一まとめに包み込む巨大なガラスとし、環境面ではダブルスキンとして機能させているが、ショーケースとしての利用も積極的に提案している。アウターのスキンは19mmのフェイスガラスを、タペストリー加工を施したガラスリブで支持した。ガラスリブにはコンピューター制御で自在にコントロールが出来るLEDを組み込み、青山通りの騒音や人の動きに対しインタラクティブに反応して発光パターンを変化させる仕組みとし、青山ならではの「スマートスキン」が現実のものとなった。



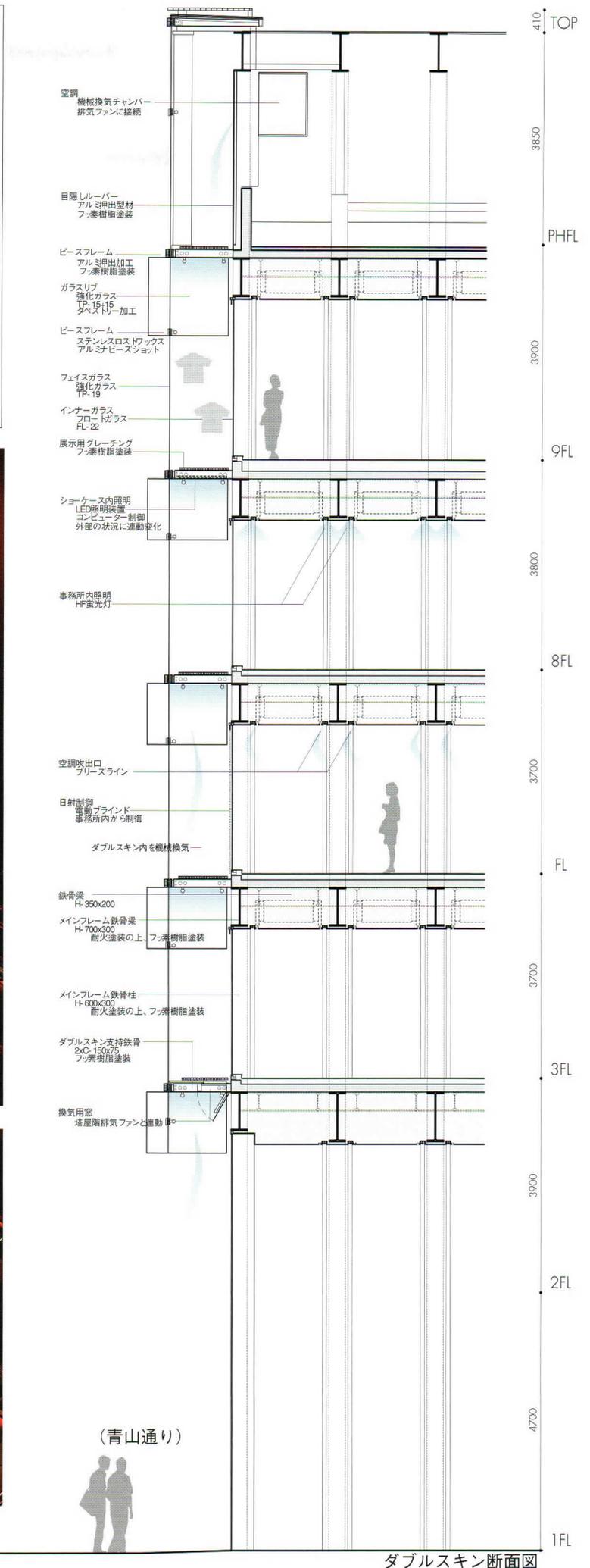
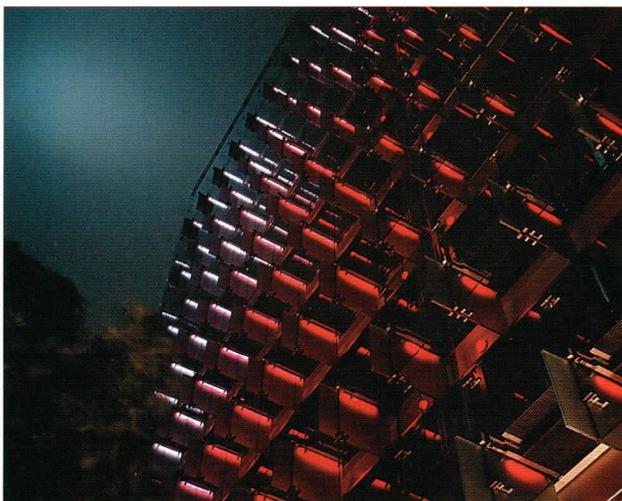
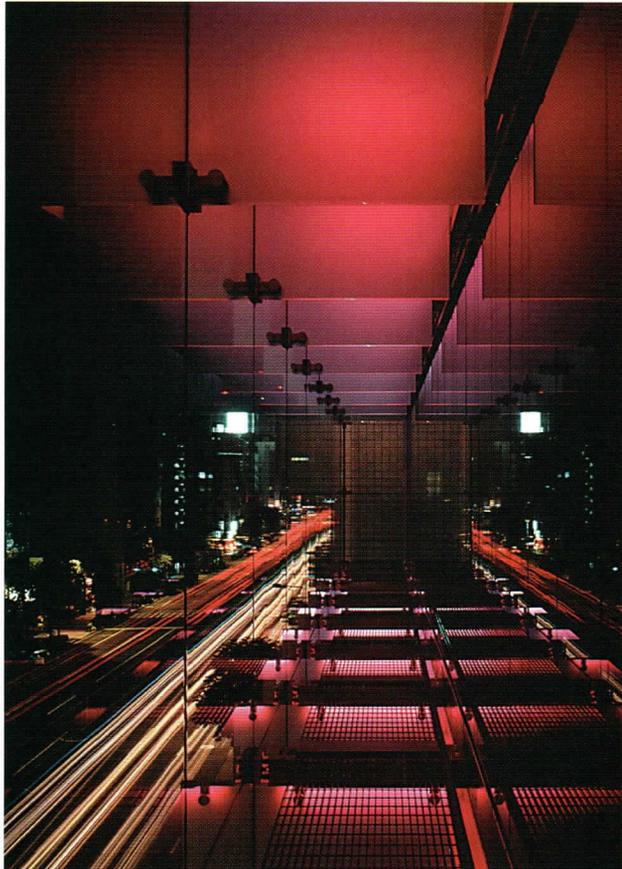
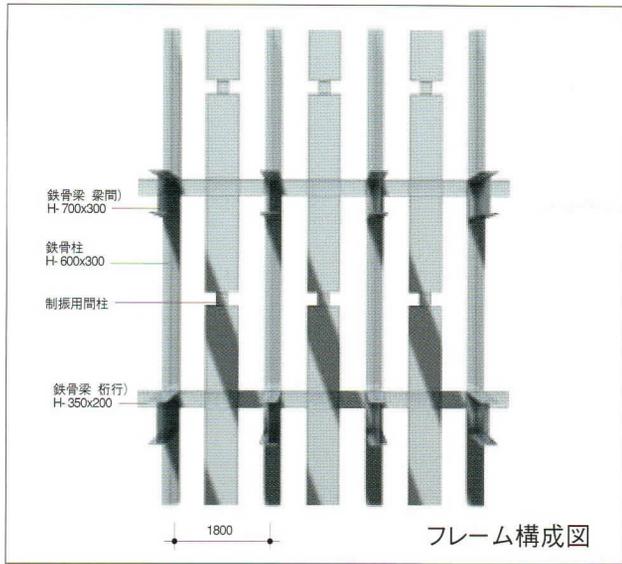
青山通りからの眺め



柱型すらないレンタルスペース



space diagram

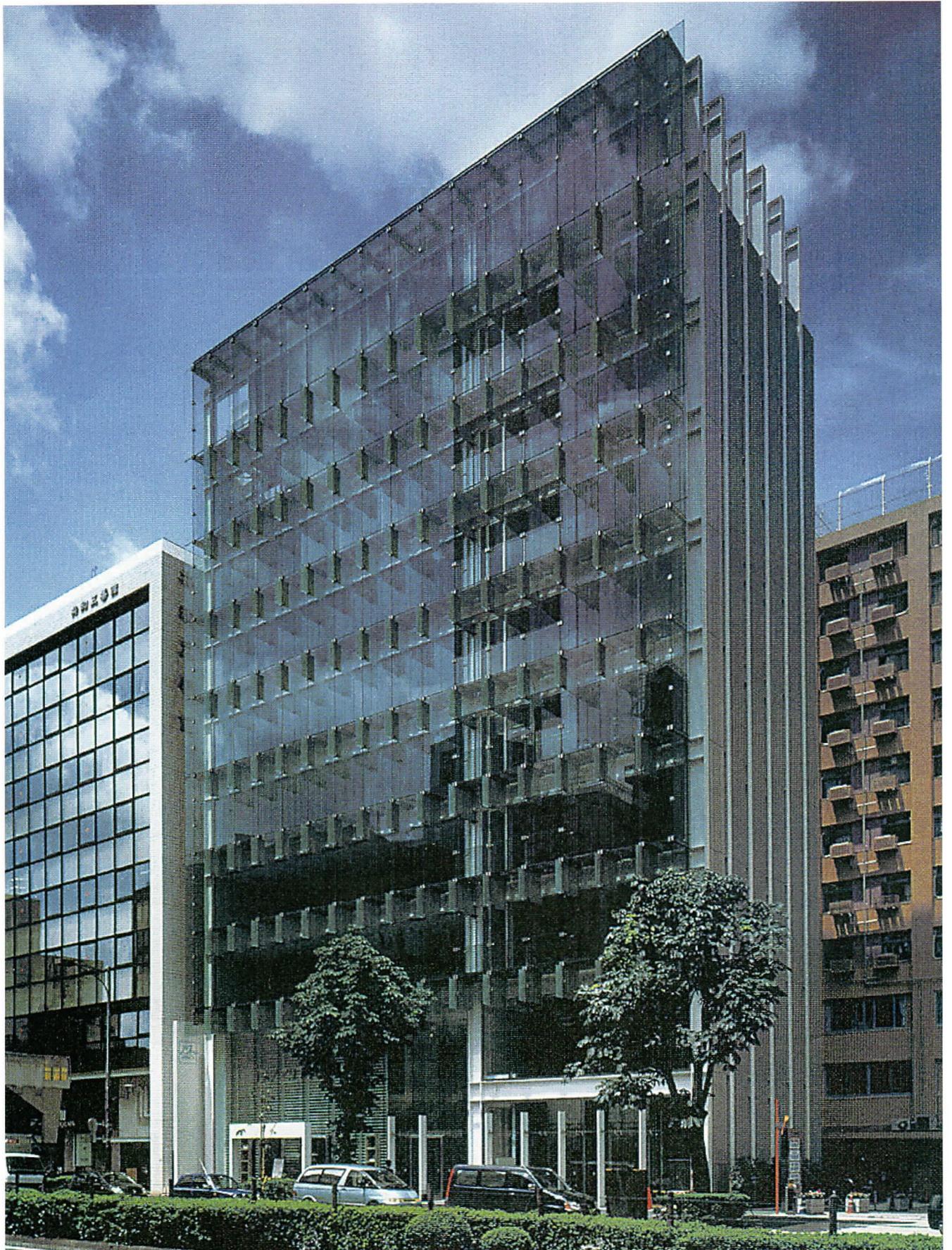




石田 亨 (いしだ・きょう)

1984年3月 茨城県立水海道第一高等学校 卒業
1988年3月 工学院大学工学部 建築学科 卒業 (谷口研究室)
1990年3月 工学院大学大学院 修士課程 終了 (山下研究室)
1990年4月 株式会社日建設計 入社
現在 同社 設計室 設計主管
〒351-0011 埼玉県朝霞市本町2-3-25-901
TEL・FAX / 048-469-0956 mail : ishida@nikken.co.jp

ルネ
青山
ビル



澤崎 宏

Hiroshi Sawazaki

設計

夢
み
な
と
タ
ワ
ー

木造としては国内最大級の
高さを誇るチューブ構造で
構成している

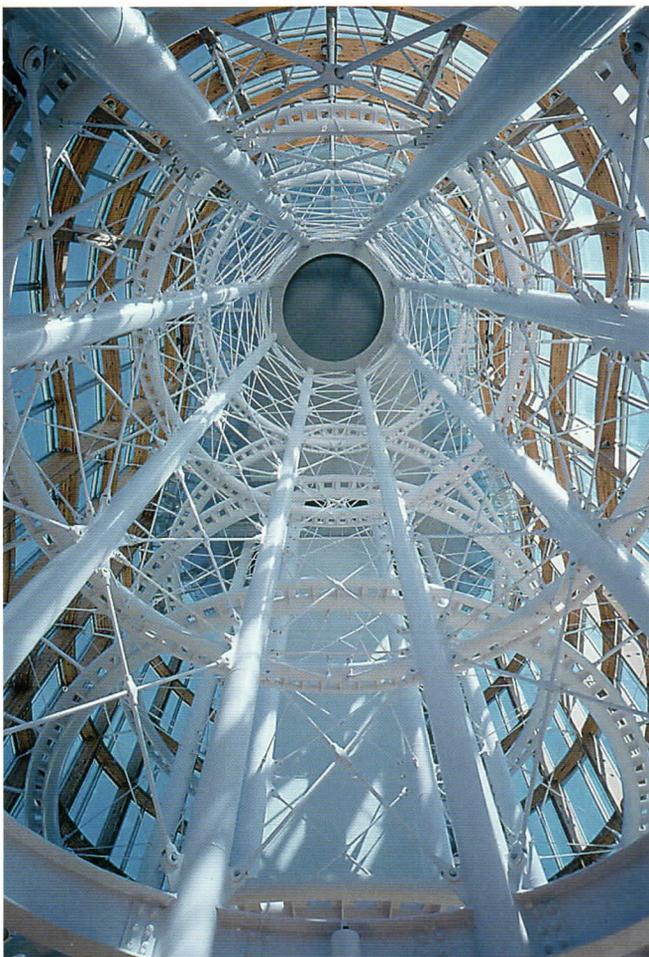
この施設は、鳥取県が「環日本海交流」をテーマとして開催した、JAPAN EXPO 山陰・夢みなと博'98のシンボルパビリオンである。また、開催後も恒久施設として、対岸諸国との経済と文化の交流、人と地域の交流を実践的に促進する活動拠点の整備を鳥取県境港市の新港湾地区のFAZ認定を受けて推進してきた中核施設である。

この建築は「大山」と計画地の長白山を結ぶ景観軸を機軸

に配置し、低層棟は「外剛内柔」、タワー棟は「外柔内剛」という2つの異なる構造空間で構成している。低層棟はホールや展示場など交流機能で、国内でも最大級のタイルを打ち込んだPC板の多層ドームで中央の3層吹き抜けのエントランスホールで一体化している。

展望タワー棟は、木造の格子で組まれたアトリウム空間の上に展望フロアをのせている。





この構造は、コア部分のテンセグリティ構造と木造としては国内最大級の高さを誇るチューブ構造で構成している。木材は、林産県である鳥取県をアピールするため鳥取県産の杉を集成材として使用した。

この建物は、設計着手時に阪神淡路大震災に遭遇し、防災拠点の施設であることや新しい構造技術を採用していることから徹底的な風荷重および地震に対する検討を行った。また、地盤に関しても液状化対策としてソイルセメント柱列連壁工法による地盤改良を行った。この建物が竣工して2年後、2000年10月に震度6強を観測した鳥取西部大地震に遭遇し本施設の周辺地域は、液状化現象の被害にみまわれたが、本施設の建物の損壊や地盤沈下、液状化などの被害は回避できた。

この建築の取り組みとして、建築形態と空間、機能の特質を見極め、使用する素材や工法と構造技術を融合させたハイブリット構造のあり方を提案している建築である。







澤崎 宏 (さわざきひろし)

1957年8月2日 東京都大田区に生まれる。

学歴

1981年3月 工学院大学工学部建築学科卒業 (山下研究室)

職歴

1981年 株式会社 計画・環境建築・YAS都市研究所入社
建築家 木島安史、橋本文隆に師事

2000年 同社 代表取締役東京事務所長

2001年 香川県 サンポート財団 サンポート高松賑わいづくりアドバイザー
香川県立 (仮) 情報通信科学館整備事業 (PFI事業) 審査委員委嘱

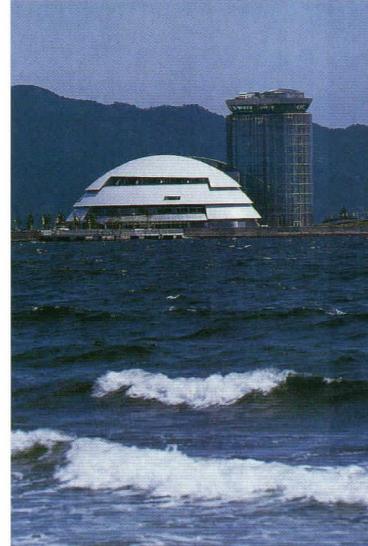
2003年 国土交通省四国地方整備局 パブリックスペース懇談会 委員委嘱

2004年4月 株式会社 計画・環境建築 代表取締役社長 就任

資格

一級建築士 登録番号 186957号

夢
みなと
タワー



高橋 憲一郎

Kenichiro Takahashi

設計

Misty
Mountain
Restaurant



霧降山の
レストラン

国立公園内の敷地で
設計が出来ることは
設計者冥利に尽きる

日光の霧降高原、霧降の滝を正面に望める位置にコンクリート造の円形の旧観瀑台の建物はあった。ここが建築計画の敷地である。ここに新しいレストランを造ることである。滝に向かって左側に日光連山が眺望出来、右側には今市の街並みがかすかに見え、滝の音、鳥の声、木々を渡る風の音以外

は静寂そのもの、時には全てを覆い尽くす霧に包まれる。時がゆったりと流れる。

こんなに恵まれた、国立公園内の敷地で設計が出来ることは、設計者冥利に尽きる。周辺の自然環境を損なわぬよう、取り壊される旧観瀑台の基礎部分を利用する事によって、新たな



2F展望コーナーより正面に霧降の滝をのぞむ



大谷のアプローチより山のレストラン正面を見る。両側はもみじの林

擁壁や土木工事を避けることが出来たが反面、新たに計画する建物は、円形の建物の基礎の影響を受けることとなった。

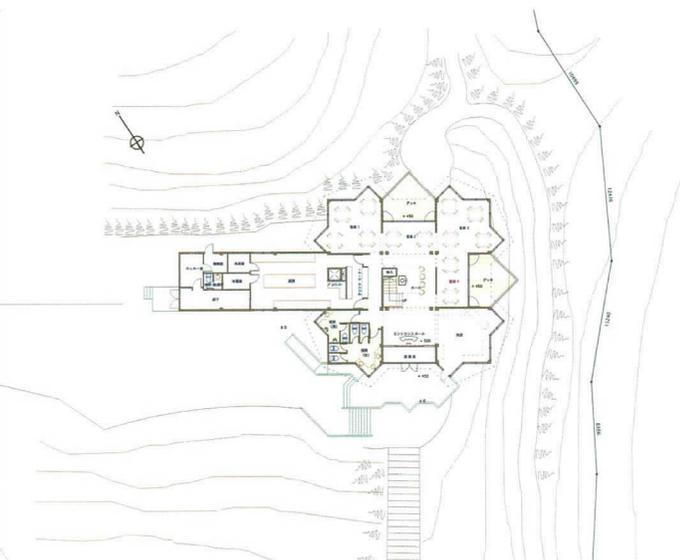
施主は日光の山内で明治の館（コロンビアレコードを日本に設立したアメリカ人のかつての石造りの別荘）という名前のレストランの経営者。一階平面は、入口を入ると正面にデッキ越しに霧降の滝が見える。この南北の軸と、東西の軸上にデッキが設えてある。客席は4ブロックに分かれ、入口の右側はこのレストランの名物である、チーズケーキやヨーグルト等を販売している。軸の交点にあたる所は薪ストーブがおかれ、その背

後に2階へ上がる階段がある。二階の滝が見えるスペースは、レストランの計らいで、一般開放し、食事をとらなくても滝を楽しむことが出来る。二階には、大きなデッキが厨房の上に造られており、直ぐ脇にはバーコーナーがある。

建物の構造はヘビーティンバー（木造大断面）工法と呼ばれる、カナダ・アメリカではごく一般的な工法である。幸いカナダのプリティッシュコロンビア州の木材伐採現場で木橋の材料として使用されていた（60年前に伐採されたダグラスファー丸太）リサイクル材を入手する事が出来、これを使用した。恐らく



霧降の滝の観瀑台への小径より建物を見上げる





レストラン入口のホール正面が滝の方向、暖炉のマンツル部分は大谷石

400～500年は経っていると思われる。惚れ惚れするような木である。

柱のサイズは300×300梁は200×500と全て無垢材を使用、骨太の空間を作り上げている。レストランは通年営業を行うとの方針のため、冬のため、断熱化・開口部の作り方について最新の注意を払った。全床壁と匹敵するぐらい開口部からの熱損失が起こるため、サッシは最低限でもペアガラスは必要であった。木造に建物にふさわしく、開口部の木製サッシはアメリカから輸入した。まだまだ国産と比較してコス

ト的に割安感がある。断熱材は外壁側にウレタンボード、内壁側に20キロ相当のグラスウールを使用。仕上材は、外壁は北米の針葉樹で最も耐候性の高いウエスタンレッドシダーを、床にはヘムロックを使っている。

照明器具もなかなか気に入った物が見つからなく、結局インターネット上で調べ、アメリカから輸入する事とした。建物がオープンして1年経つが、時々訪問し食事をするが、うれしいようで、怖いようである。



トイレ内部モザイクタイルは米国より輸入



客席内部柱・梁はダグラスファー（米松）
壁はウエスタンレッドシダー（米杉）



中央にある暖炉



高橋 憲一郎 (たかはし けんいちろう)
1969年 工学院大学建築学科卒業 (武藤研究室)

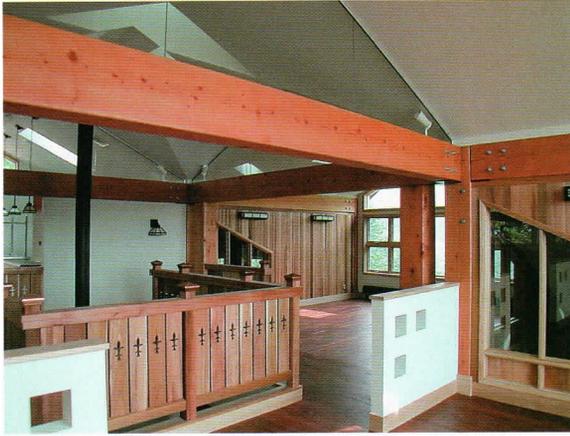
職歴

1974年 カナダ・トロント市
WEBB・ZERAFA・MENKES・HOUSDEN 設計事務所入所

1977年 カナダ・ブリティッシュコロンビア州
林産業審議会東京事務所入所 技術顧問
2×4工法プロモーション、主に技術指導担当

1988年 有限会社 蔵建築設計事務所設立
(免許) 一級建築士登録番号 71513号

霧降山の レストラン



2階の客席部分を東側より見る



キャンティレバー上にあるデッキ部分

1F厨房の上はデッキになっており、外で食事をとる事が出来る





1996年鹿児島県北西部地震の被害調査のため羽田空港に集った当時の院生達('97、'98年度修了生)

また逢う日まで ニ ー チ ェ の 原 稿

工学院大学 教授
広 沢 雅 也

2005年3月に定年で13年間お世話になった工学院大学を辞めることになりました。あつという間に過ぎ去った感じを拭えない13年間ですが、記憶をたどりながら主な出来事を記してお別れの挨拶にかえさせて頂きたいと思います。

大学に来る以前は28年間、旧建設省建築研究所(略称、建研)に所属し、主として建物の耐震性に関して柱や壁の実験をしたり、建築基準法関連の規定の原案やその解説案の作成などをしていました。

また、建研が筑波研究学園都市に移転する以前は、新宿の百人町に研究所

があった関係で、工学院大学の4年生の卒論指導をお手伝いしたり、また2部の学生の何人かが私の研究室などで助手として勤めたりして、当時から本学とは浅からぬ関係にありました。

そんな御縁もあって、そろそろ建研を勇退する時期に大学から教員としてお招きいただき、超高層校舎が出来て間もない本学に移ってきたわけです。

研究所に居りました頃から、新宿や筑波に近い大学から毎年2~5人程の4年生を卒論指導のために受け入れていました。特に、筑波では自分のアパートに卒論生を寝泊りさせて、卒論以外にも一

緒に酒を飲んだり、テニスをしたり昼夜にわたり色々と指導したものです。

このような経験があったものですから、職場が大学にかわっても研究は勿論、教育も建築構造の分野なら特に困ることもないだろうと思っていました。

しかし、実際には授業アンケートなどで思い知らされたわけですが、特に、1年生を相手にした構造力学、IIの講義ではなかなか学生から合格点をもらえませんでした。熱心にはやるが、早口だし、板書が汚いし分かりにくいということでした。自分では改善の努力をしているつもりでしたが、アンケート結果には、

その成果が殆んど出ませんでした。本学建築学科卒業生の中に構造嫌いが多いとしたら自分の責任も少なくないとお詫びしたい気持ちでいっぱいです。

一方、3年生、4年生を対象とした鉄筋コンクリート構造や専攻ゼミおよび卒業論文の指導では、一応のことができたと思っています。特に卒業論文などについては、1995年の阪神大震災による建物の被害とこれをきっかけにして盛んになった既存建物の耐震改修の動きが原因となって実社会に連動したテーマを選んでもらうことが容易になりました。

阪神大震災とこれにつづく1996年の鹿児島県北西部地震では、種々の地震被害関連調査を行いました(写真1、2参

引用されています。

また、翌年の鹿児島県の地震被害は死者はゼロ、全半壊建物数は100棟以下で、神戸の被害に比べれば雲泥の差でしたが、学校校舎に多くの被害が出て、この時にも、研究室で調査チームを組んで被害調査に出かけました(写真2)。調査は3日間だけでしたが県庁からの情報をもとに効果的に調査を行うことができ、いくつかの論文をまとめることができました。

これら2つの地震被害調査の結果、鉄筋コンクリート建物の柱梁接合部の地震被害例を多数見出し、接合部の耐震性能に関する研究を研究室のライフワーク的な研究テーマとして、以後ずっと続けることになりました。広沢研究室の卒論

ネができました。卒論生の約40%程度がこの分野のテーマで卒業論文をまとめ、就職した学生も少なくありません。

また、文部科学省による私学などの助成制度で地震防災関連のテーマが採択されることがしばしばみられますが、前述した学術フロンティア制度でも本学の提案が採択され、多額の研究助成金を得て柱梁接合部の他に、二次壁付柱の実験研究が行われています。これらの研究成果は既に、既存建物の診断や耐震改修にも適用されてきています。

以上のように、私が本学に着任して3年経たない内に起った阪神大震災は、主として研究面で非常に私の研究室に大きな影響を及ぼし、多忙の連続でし



1996年鹿児島県北西部地震で著しい被害を受けた県立宮之城高校(柱と梁の軸心が大きく偏心している)



テニスや酒を楽しんだ'93年卒業の第1回広沢研卒業生の富士吉田セミナー校舎での合宿スナップ

照)。阪神大震災関連の調査は、関東地方の建築構造分野の教員によるボランティア活動として、公共建物と分譲集合住宅の構造被害に関する詳細調査を行いました。前者として学校校舎など28棟、後者として民間マンション等37棟について被害程度を調査し、補強の要否を判定しました。この調査には各大学の教員23名、学生や大学院生56名など合計121名が参加しましたが、工学院大学は私が発起人となってこのボランティア活動の事務局を務めた他、学生など約25名が参加しました。この調査結果は本学総合研究所年報第1号に詳しく掲載されており、また、その内容が日本建築学会等の各種の被害調査報告書に

生の約1/3が柱梁接合部関連テーマで卒業論文をまとめています。現在継続中の学術フロンティア関連プロジェクトでも接合部関連で実験研究費をいただき、近藤龍哉研究室と共同で、大型実験を継続しています。

一方、近年阪神大震災を契機として動きはじめた既存建物の耐震改修は学校校舎を中心に全国的な進展が見られます。この分野では1970年代から診断基準の作成などに関わってきた関係上、東京、埼玉、千葉、神奈川等多くの公的機関による耐震改修事業に協力した結果、手元に非常に沢山の技術資料が蓄積されると共に、学生のインターンシップや就職先としての設計事務所などのコ

た。研究面ではかなり満足できるものでしたが、教育面では、研究室の学生の指導の内、人としての付き合いが殆んどできなかったことが残念かつ学生に申し訳なく思う次第です。神戸の地震以前では学生と一緒にスポーツを楽しんだり(写真3)、酒を飲んだりしていましたが、特にここ数年は学生との付き合いが不十分で、どうにもならない自分を歯がゆく思う次第です。

身近なことだけで紙面が終わってしまいましたが、とにかく充実した13年間を過ごさせていただき心から感謝しています。

工学院大学建築系学科 Home Pageの紹介

19

2004年（平成15年）8月現在、
編集部で確認できたHomePageは、
建築都市デザイン学科7件、
建築学科12件がありました。
それぞれのHomePageのアドレスを
ご紹介しますので、皆様直接ご覧ください。
追加のHomePage、およびOBの皆様の関係する
HomePageで会員相互の参考になりそうなものが、
ございましたらNICHE編集部までご連絡ください。
連絡先：miu@tkg.att.ne.jp

http://



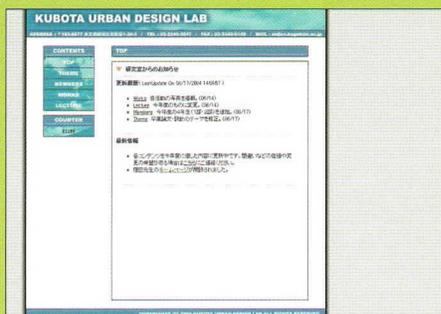
遠藤研究室
www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1018/



大橋研究室
www.ns.kogakuin.ac.jp/~dt72069/



小野里研究室
www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1026/



窪田研究室
www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1029/



谷口研究室
www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1022/



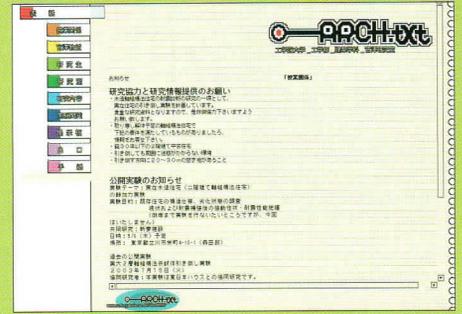
沢岡研究室
www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1021/



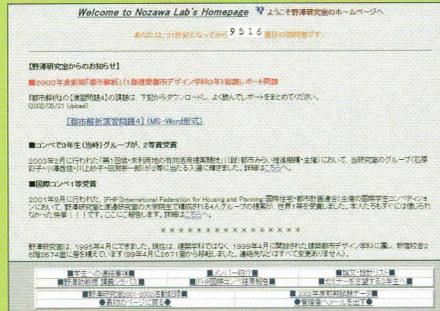
後藤研究室
www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwa1023/



久田研究室
kouzou.cc.kogakuin.ac.jp/



宮澤研究室
www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1019/



野澤研究室
giants.cc.kogakuin.ac.jp/nozawa_lab/



宮城研究室
www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1017/



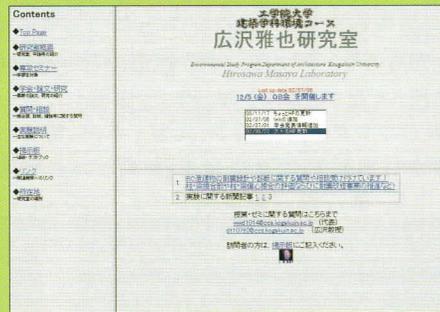
中島研究室
www.ns.kogakuin.ac.jp/~dt13029/



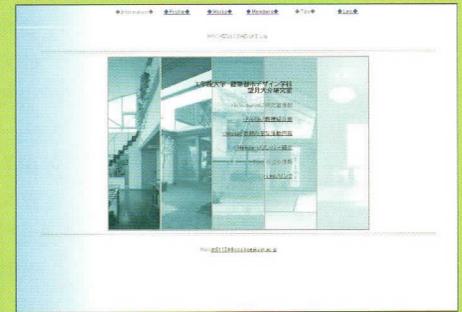
初田研究室
www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1015/



村上研究室
www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1028/



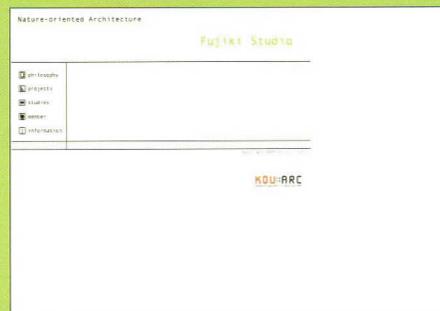
広沢研究室
www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1014/



望月研究室
www.ns.kogakuin.ac.jp/~dt61124/



野部研究室
www.ns.kogakuin.ac.jp/~dt13006/



藤木研究室
www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1034/



安原研究室
www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1016/

安原 治機 (やすはら はるき)

建築都市
デザイン学科



建築都市 デザイン学科の近況

学科だより ②

建築系学科の現状

建築都市デザイン学科の近況と申しまして、昨年私が本欄に書いた以降、大きな変化はありません。

建築学科では、受験者が減少し、偏差値の低下した環境建築コースの合格者を減らし、建築学コースの合格者を増やしました。その結果、2年前に定員を大幅に超過した学年とほぼ同数の入学生数となりました。

教育課程では、3年後期から開講するセミナーの研究室への入室（これらの学生のほとんどは4年の卒業研究、卒業設計を同じ研究室で行います）の制限がなくなり、学科、コース間で自由に移動できるようになりました。この結果、口の悪い人は、入る所は別々、中は混浴のようだと言いますが、実態は正にその通りです。しかも、公募で採用した若手教員は、学科、コースという既存の垣根を越えて、複数の研究室で協同研究を行っています。伝統ある工学院大学建築系学科の伝統は残しながらも、時代に対応した新しい方向も打ち出さないと、老舗・安住し倒産した“福助”のようになる恐れがあります。

建築学科の2コースも初めての卒業生を送り出しましたが、前述のような状況ですので、就職先に差異はありません。

昨年ご報告した、建築系学科の将来構想については、後述するとして、まず、建築系学科の現状を報告致します。

建築学科・建築学コースの入学定員（学則定員あるいは文科省定員）は90人、建築学科・環境建築コースは70人、建築都市デザイン学科は70人のところ、2004年5月1日現在、建築学コースの1年～4年が各154(33)、112(17)、160(29)、152(27)人、環境建築コースが64(17)、63(14)、96(15)、55(12)人、建築都市デザイン学科が80(15)、88(30)、105(35)、66(18)人の正規在籍生と建築学コース29(0)、環境建築コース17(1)、建築都市デザイン学科15(2)の5年以上の留年生がおります。なお、カッコ内は女子学生の人数です。

在籍専任教員数は32人で、年齢構成は60歳代が9人、50歳代が11人、40歳代が6人、40歳代以下が6人となっております。（2005年3月31日時点）

2010年までに定年を迎える教員は私を含めて9人（内本学出身者7人）、10年後の2013年までに定年を迎える教員は私を含めて16人（内本学出身者11人）です。現在そのまま本学出身の後継者が育たなければ、2013年には、66、61、48歳の3名となります。

建築系学科の将来構想

一昨年度、建築系学科に将来像検討タスクフォースが、安原以外は30代後半から40代前半の若手、中堅教員がメンバーとなって発足しました。

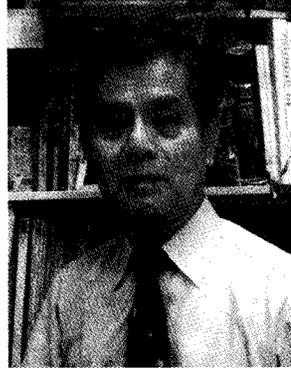
2003年2月に答申を提出し、3月の建築系学科の承認を受けて、昨年度建築系学科将来検討委員会が発足しました。将来像検討タスクフォースの委員長であった安原は主任教授となったので、建築系学科将来検討委員会の委員長は遠藤教授（44歳）に引き継がれました。

一方、三浦学長、木村副学長を中心とした学長室（三浦学長になって発足した新組織）も18才人口の減少（2007年には、大学・短大を合わせると「志願者数」と「定員」が一致する大学全入時代に入る）、四工大（工学院大、武蔵工大、芝浦工大、東京電機大）の中で単一学部は本学だけなどに危機感を持たれ2003年11月、21世紀プラン作成委員会（Phase I）を設置しました。ここで、2002年から検討を重ねてきた建築系学科タスクフォース答申を紹介いたしました。

その後、21世紀プラン作成委員会（Phase I）の案に建築学部構想が盛り込まれ、21世紀プラン作成委員会（Phase II）で詳細を検討して2004年7月26日の教授総会で承認されました。

しかし、大学側の支持を得ただけでは実行できるものではありません。なぜか経営者（理事会、特に現段階では常務理事会）の支持が得られていません。また、建築系学科内にも強く反対する少数の教員います。この同窓会誌を発刊している建築同窓会や校友会も積極的に賛成しているかどうか不明です。

今回の改革が実行できなくても、建築系学科がすぐ駄目にはなりません。しかし、改革の中心となった30代後半から40代前半の若手、中堅教員のポテンシャルの低下は避けられません。



第2部近況というテーマで原稿の依頼を受けたが、正直なところ、年々歳々大きな変化がある訳でもなく、昨今の状況は前任者の東教授が書かれた昨年の報告で、簡潔に且つ十二分にその目的を果たしていると考えられる。従って、内容的には昨年の現状報告をトレースする形になってしまうが、2、3の具体的なデータを示しながらご報告したい。

まず受験者数の減少であるが、これは少子化の動向と相まって全国的にみられる現象であり、何も本学に限ったことではない。そのことを前提として本学2部の状況を見る。

表は過去10年間の2部の入試方法別受験者数の推移である。今から10年前('95年)を100とすると'96、'97年度(女子は'97、'98年度)の2年間は若干増加したものの、その後は減少の一途を辿っている。2001年度は40%台まで下がってしまったが本年度は56%までに回復した…。とはいうものの、全体の凋落傾向は如何ともしがたい。しかし、これも他科と比較すると22%や45%まで減少した学科もみられ、建築系学科はそれなりに頑張っているが、2部の存続には一抹の不安が残る。

本学2部の入試方法もここ数年は、いかにして優秀な学生を集めるかを模索してその選抜方法も①一般入試、②センター入試利用、③指定校制推薦、④公募制推薦、⑤社会人特別選抜、⑥本学高校推薦、⑦本学専門学校推薦の7つの多岐にわたるようになった。

そうした中で、今年度はたまたま「社会人特別選抜」入試の面接を担当することになったが、その時の印象について述べると、受験者のほぼ全員が目的意識がはっきりしていて、向学心が強く、物事に対する洞察力の高さを感じさせるものがあった。

ある受験者は日本の大学を卒業後、アメリカの大学院(修士)を修了し、「国連関係の仕事で東欧の紛争地に入り、そこで被災者たちを助ける国際援助の人々(専門家)の橋渡しをするなかで、建築家の仕事の素晴らしさに接し、自分も建築家かになることを志した。一度日本に帰国し(結婚したので)建築の勉強をしている間は国連関係の仕事は、インターネットなどを通して、関わりを続けながら卒業後には再び国連に戻って仕事をしたい」と語っていた。同様な目的意識のはっきりした受験生は多く、こうした「社会人特別選抜制」をもっと積極的に社会へアピールし、カリキュラムも改革してそれだけで一つのクラスが出来ないものか。

つぎは、入り口に対して出口であるが、その一つの指標ともいえる2部学生の研究セミナー着手資格判定(2部の学生には1部の学生の卒業研究に相当するものとして〈研究セミナー〉を課している)によると、2004年度はストレート組では75.4%の学生がその資格を得ている。この値は1部の建築系学科の卒業研究着手状況に比べ10%程度低くなっているが、2部の厳しい勉学状況を思えば、もともと1部と同じ4年間で卒業するシステムに無理があるといえるであろう。

次に学生諸君の授業中の様子についてであるが、これは私が担当している3年前期のことになる。ここ数年2部の学生諸君の方が1部の学生より私語が少なく静かであると言えよう。その中でも特に、教室の前の方で真剣な顔をして受講しているのは、先に言った社会人特別選抜制で入学した学生諸君である。

学科だより② 第2部建築学部の 近況について

過去10年間の2部建築学部受験者の推移

年度	一般入試受験者	センター入試	指定校特	公募	社会人特別選抜	本学高校	本学専門	合計
1995	296(46)	-	-	35(6)	30(4)	0(0)	0(0)	361(56)
1996	338(30)	-	-	46(8)	43(12)	0(0)	10(1)	427(51)
1997	287(41)	-	-	46(6)	47(17)	0(0)	11(3)	391(67)
1998	247(38)	-	-	48(6)	26(14)	0(0)	13(4)	334(62)
1999	158(29)	-	-	35(4)	27(4)	0(0)	4(0)	224(37)
2000	105(19)	-	-	37(4)	19(3)	9(0)	8(0)	178(26)
2001	96(17)	-	4(0)	20(3)	25(7)	1(0)	8(0)	15(27)
2002	92(13)	33(4)	14(0)	22(3)	18(8)	3(0)	0(0)	182(28)
2003	135(13)	45(11)	10(0)	14(5)	19(10)	4(0)	4(0)	231(39)
2004	105(16)	44(11)	21(5)	13(1)	17(7)	3(0)	0(0)	203(40)

1995年度の受験者数を100とした時の各年度の割合

	全体	女子
1995	100.0	100.0
1996	118.3	91.1
1997	108.3	119.6
1998	92.5	110.7
1999	62.0	66.1
2000	49.3	46.1
2001	42.7	48.2
2002	50.4	50.0
2003	64.0	69.6
2004	56.2	71.4



専攻の近況

大学院建築学

学科だより ④

大学院としての背景

本学大学院は1964年4月に修士課程、その2年後に博士課程が設置されて以来40年が経過しました。この間、学内施設の整備、指導教員層の拡充、大学院進学者の増加など建築学専攻の大学院教育は大幅に充実されました。

初期には約300名の建築学科卒業生のうち、大学院進学者は15名程度でしたが、本年度は建築系学科卒業生322名の18%の59名が建築学専攻修士課程に進学しました。現在の建築学専攻の在籍者は、1年次65名(社会人3名)、2年次78名(社会人6名)、博士課程3～6年生13名(社会人7名)が在籍し、大学院総数が156名に達しています。修士学生143名のうち、女子学生が19%です。また、技術系(構造・生産・設備)が全体の22%に対して、計画系(設計・都市・計画・歴史)が78%で多数を占めています。

長引く不況で設計事務所、建設業など採用側が学部卒業生を企業内教育で戦力化する人事政策から、即戦力となる修士課程修了者を優先的に採用する方向へ変化しており、特に設計、研究などの職務ではこの動向は顕著です。大学院進学動機は様々ですが、計画系への大学院進学者が圧倒的に多い背景には、全般的な高学歴化の進展とともに、採用企業側のニーズの変化も大きく関係していると考えられます。計画系では設計プロジェクトの実践を通じて建築知識の高度化と建築家・設計者としての職能教育を受けることを希望する学生が多く、技術系では構造設計や研究開発の職務の希望者が大学院での専門教育や研究を通じて専門性を高めたいという学生が多いようです。

大学院教育の環境

大学院生を指導する大学院教員は近年充実され、現在21名に達しています。その反面、大学院の教育・研究施設は大学院生数に対して十分とはいえません。建築学専攻は、計画系と技術系では学習基盤が異なり、計画系は新宿校舎の大学院生室、設計室、CAD室などで教育、研究および設計プロジェクトが進められていますが、学生数に対して大学院生室や設計室が不足しており、学生諸君に不便を掛けているだけでなく、入学者数を絞らざるを得ないのが実情です。一方、技術系では研究室は新宿校舎、実験室は八王子校舎に持ち、特に近年整備された地震防災・環境センターなど大型実験施設は、高度な建築技術研究に大いに貢献しています。この実験施設は文部科学省からの補助もあり、本学教員だけでなく外部機関・企業との共同研究にも活用を義務付けられています。これら施設の運用・維持管理には専任教員だけでなく技術教員の配置が急務であります。

博士論文、修士論文および作品について

平成15年度は、建築学専攻から計画系1名と技術系1名が課程博士として博士(工学)の学位を授与されました。なお最近5年間の課程博士29名のうち、建築学専攻が10名を占めています。15年度の修士修了者45名のうち修士作品が11名、修士論文が34名でした。修士作品は、現在の建築状況を反映してか街作りや保存・再生・コンバージョンに関するものがほとんどでした。修士論文のうち、計画系の論文が18件、技術系の論文が16件で、それぞれの研究室の専門に応じて多岐にわたっています。

社会人・留学生と大学院

修士学生のうち社会人は6%の16名ですが、博士後期課程では13人中7名が社会人です。本学新宿校舎の立地は社会人の大学院教育に適した条件もあり、社会人大学院生は年々増加していますが、その過半数が他大学出身者であり、残念ながら本学出身者はまだ少数です。社会人学生は学習意欲が高く、専門分野の学習目的が明確で、一般学生にも極めて良い影響を及ぼしています。本学の卒業生諸氏にも生涯教育の一環として、あるいは専門分野の専門性を高めるために、あるいは博士の学位取得のために社会人特別選抜の制度を活用されることを望みます。



2004年度 大学入試について

学科だより 5

現在、建築系学科の入試委員は、後藤 治先生と私の2名です。2004年度の大学入試状況について報告いたします。

長引く不況はようやく脱しつつある昨今ですが、2004年度入試は建築系学科にとっても厳しい結果となりました。表にありますように1部建築学科、建築都市デザイン学科とも2003年度に比べ、2004年度は受験者を大幅に減らしています。これまでの受験生の数の変化を見ますと2001年度から2002年度には受験生を減らし、2002年度から2003年度には受験生を増やしています。受験生が増えた年には厳しい合格点を設定して、翌年の受験生を減らし、逆に受験生が減った年には甘い合格点を設定して翌年の受験生を増やす、というあまり芳しくないサイクルを続けているようです。2部建築学科についても全く同様であり、2002年度から2003年度へは受験者数は増加したのですが、2004年度は減少してしまいました。入学者数は毎年そろえなければなりませんので、合格点が毎年変動するのは致し方ない面もあるのですが、このようなことをあまり続けると受験生の信頼を失いかねません。このため昨年度から将来の入試を検討するワーキンググループを建築系学科の教育委員会の下に置き、適正な入試の対策を練っているところです。さらには建築系学科を将来の社会的な要請に答えるよう、改革を目的とした将来計画委員会を設け、大きな組織変革を画策中です。卒業生の皆様の真摯なご意見を頂ければ幸いです。

こうしたなか、少しでも優秀な学生を確保しようと、2005年度入試では様々な新しい入試制度を設ける予定です。まず1部入試に関してはA日程・B日程に加え、従来のサテライト入試(地方会場)に代わり、1月29日と早に入試日に行うS日程入試を設けます。SはScholarを意味し、上位合格者には学費の全額相当額を奨学金として給付します。サテライト会場数も増やし、全国13会場(札幌、仙台、郡山、水戸、高崎、宇都宮、富山、長野、静岡、名古屋、大阪、広島、福岡)および東京会場(新宿、八王子)で実施します。さらにセンター入試も従来の方法(C-I日程)に加え、自己採点終了後に出願が可能で、出願締切日も3月5日と遅く設定したC-II日程を設けます。

本学建築系学科の優秀な人材確保のために、今後さらに皆様のご協力をいただければ幸いです。本学の詳細な入試情報は、本学のホームページ(<http://www.kogakuin.ac.jp/index.html>)等をご参考ください。

2003年度・2004年度 1部建築系学科受験者・入学者状況

学科・コース	2003年度			2004年度		
	志願者数	受験者数	入学者数	志願者数	受験者数	入学者数
建築学コース	2,134	2,046	115	1,693	1,597	126
環境建築コース	746	719	66	560	532	33
建築都市デザイン学科	1,263	1,225	84	1,123	1,072	62

2003年度・2004年度 2部建築学科受験者・入学者状況

学科・コース	2003年度			2004年度		
	志願者数	受験者数	入学者数	志願者数	受験者数	入学者数
建築学科	240	231	75	160	149	25

2005年度・建築系学科入試募集人員

	第1部		第2部	
	入試種別	募集人員	入試種別	募集人員
第1部	学士編入学	若干名	編入学	35名
	指定校推薦	全学で150名	指定校推薦	全学で40名
	理科論文推薦	若干名	公募制推薦	全学で30名
	付属高校推薦	全学で130名	本学専門学校推薦	若干名
	大学入試センター試験利用		付属高校推薦	全学で10名
	C-I日程	建築24名	社会人特別選抜	全学で40名
	1月15、16日実施	デザイン9名	一般入試	40名
	C-II日程(新設)	建築5名	大学入試センター試験利用	11名
	1月15、16日実施	デザイン3名		
	一般入試			
S日程(新設)	建築18名			
1月29日(土)実施	デザイン8名			
A日程	建築76名			
2月6日(日)～8日(火)実施	デザイン36名			
B日程	建築15名			
2月17日(木)実施	デザイン6名			

※第1部の建築の人数は、建築学コース、環境建築コースの合計

Catch your dream, get the future!

建築関連資格の最高峰

建築士

★断然支持されています！

ライブ講義+マンツーマン指導

- ★完全ライブによる受講生参加型講義！
- ★受講生の理解度、学習進度にあわせた柔軟な指導！
- ★「暗記」ではなく「理解」する講義！
- ★最新の試験情報に素早く対応！
- ★個人レベルに対応する製図指導！

人気の国家資格にチャレンジ

宅建

★断然支持されています！

「理解」に重点を置いた指導

- ★初心者でもわかりやすい！
- ★既受験者でも納得！

夢を叶えるために、
未来への準備を始めませんか？

平成15年度 1級建築士最終試験
合格者占有率

No.1

合格者の過半数は、
当学院の受講生です。

当学院教室開講都道府県平均合格者占有率

全国 **707** 教室、優秀な講師陣 **1,000** 人
確かな実績に基づく指導ノウハウで合格に導きます

開講講座

宅地建物取引主任者

1級建築士

1級建築施工管理技士

2級建築士

1級土木施工管理技士

お問い合わせ・講座に関するご質問は、お気軽に最寄の当学院各校まで

総合資格学院 中部資格学院

札幌校 TEL.011-219-3511	熊谷校 TEL.048-599-3531	立川校 TEL.042-524-7841	小牧校 TEL.0568-42-1211	堺校 TEL.072-222-9311
仙台校 TEL.022-217-8421	船橋校 TEL.047-425-8941	町田校 TEL.042-724-3061	岡崎校 TEL.0564-57-8161	尼崎校 TEL.06-6430-6811
水戸校 TEL.029-300-4721	千葉校 TEL.043-290-7341	横浜校 TEL.045-316-6811	豊橋校 TEL.0532-57-0311	神戸校 TEL.078-241-1711
宇都宮校 TEL.029-835-5181	松戸校 TEL.047-369-3821	厚木校 TEL.046-226-5788	津市校 TEL.059-238-0711	姫路校 TEL.0792-24-1411
前橋校 TEL.027-226-7501	柏校 TEL.04-7168-9111	藤沢校 TEL.0466-55-2611	四日市校 TEL.0593-59-0711	奈良校 TEL.0742-30-1511
大宮校 TEL.048-642-9811	成田校 TEL.0476-24-5851	金沢校 TEL.076-237-6811	草津校 TEL.077-566-6911	広島校 TEL.082-542-3811
越谷校 TEL.048-990-6971	新宿校 TEL.03-3366-2181	岐阜校 TEL.058-277-3701	京都校 TEL.075-352-3011	福山校 TEL.084-991-3811
所沢校 TEL.04-2926-6241	新池袋校 TEL.03-3982-8211	静岡校 TEL.054-275-3311	梅田校 TEL.06-6374-1411	福岡校 TEL.092-716-2081
川越校 TEL.049-291-5211	上野校 TEL.03-3832-7201	浜松校 TEL.053-456-2211	京橋校 TEL.06-6882-8211	小倉校 TEL.093-522-7511
	五反田校 TEL.03-3495-8671	名古屋校 TEL.052-202-1751	なんば校 TEL.06-6648-5511	久留米校 TEL.0942-36-7141

<http://www.shikaku.co.jp>

Made in Dream

夢を紡いで現実を創りだすのが、
人間の仕事です。
前田建設は、夢に挑み、
21世紀を開拓します。

AIRPORT AUTHORITY HONG KONG



前田建設

〒102-8151 東京都千代田区富士見2丁目10番26号
<http://www.maeda.co.jp>

Union Kenzai Builder

会社概要

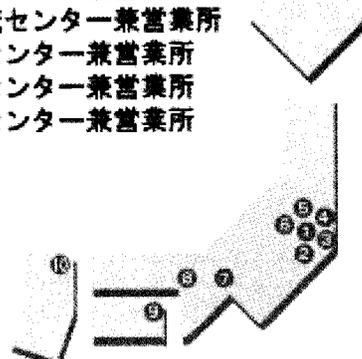
社名 株式会社ユニオン建材ビルダー
設立 1996年10月24日
資本金 1,000万円 (2003年増資計画)
売上高 101億円 (2002年度実績)
115億円 (2003年度計画)
役員 代表取締役会長 大槻克己
代表取締役社長 伊藤正一
従業員 81名 (平成15年4月1日現在)

事業内容

- 建築用材料の工事付き販売
- 建築の設計・施工
(東京都知事許可(般-10)第110691号)
- 建築材料の物流

所在地

- ① 東京本社
〒105-0013 東京都港区
浜松町1-10-17 向陽ビル7F
TEL. 03-3433-6181 (代)
FAX. 03-3433-6189
- ② 神奈川物流センター兼営業所
③ 千葉物流センター兼営業所
④ 鹿島プレカットセンター
⑤ 古河物流センター
⑥ 埼玉物流センター兼営業所
⑦ 名古屋物流センター兼営業所
⑧ 大阪物流センター兼営業所
⑨ 高松物流センター兼営業所
⑩ 福岡物流センター兼営業所



住宅イノベーション
株式会社 **ユニオン建材ビルダー**



都市環境のトータル・アドバイザー

株式会社 **フォーユー** プランニング
コンサルタント

三好 薫
井坂 光宏

東京都世田谷区赤堤 4-22-11 TEL : 03(3323)7311

<http://www.fy-g.co.jp/plan/>

KAY構造設計室

柴田 和敬

東京都台東区柳橋 2-22-3-301

TEL : 03(3865)2327

(株)設備計画研究所

志賀 常雄
山本 龍英

東京都渋谷区恵比寿南 3-1-21

TEL : 03(3760)1021

MUTOH

教えるのも、教わるのも、
MUTOHなら安心です。

設計現場の即戦力となる人材育成には、優れた教材を使用したい。
そんな声に応えるのは、やっぱりMUTOHです。
あらゆる設計現場で、高い信頼性と
納入実績を誇るMUTOHの設計製図ツールは、
教育の現場でも活躍してくれます。

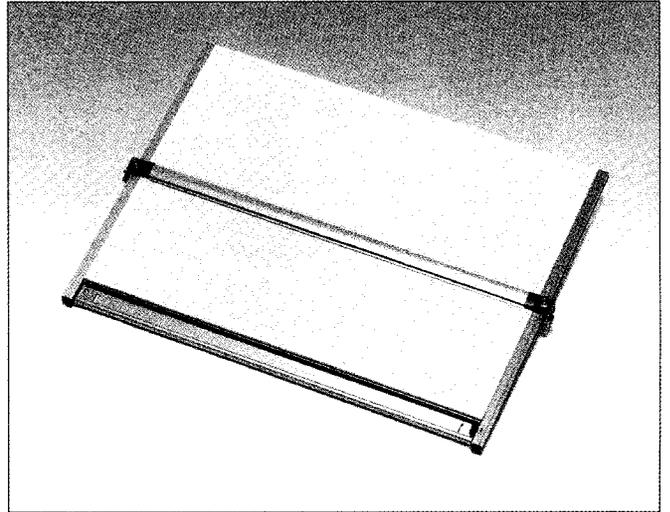
LINER BOARD

UM-09NK

■ 塩ビシート圧着鋼板製図板使用 ■

場所を選ばず高い精度と操作性が得られる
コンパクトな平行定規、ライナーボード。
耐久性に優れ快適な操作性を提供する
シンクロベルト方式を採用した本格派。
A1サイズまでの作図に対応。図面への
固定は、付属のマグネットプレートでワン
タッチ。しかも軽量・コンパクトです。簡
単に持ち運びができますので、思いついた
らそこがワークスペース。アイデアを生
み出す頼もしい片腕です。

工学院
特別仕様



株式会社 ムトー エンジニアリング 東京都世田谷区池尻3-1-3 〒154-8560 TEL(03)5486-7139(直) FAX(03)5486-7172

DS

確かな技術

×

優れた品質

||

高い信頼

第一設備工業株式会社

本社 〒104-0033 東京都中央区新川一丁目22番3号 TEL 03-355
支店 東京・長野・東関東・横浜・名古屋・大阪・広島・九州・東北
ホームページ：<http://www.issetsu.co.jp>

2-3331/FAX 03-3551-4087

空気と水のエンジニア

SUGA

風は心地よいですか、水はおいしいですか。

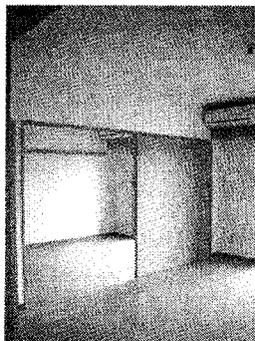
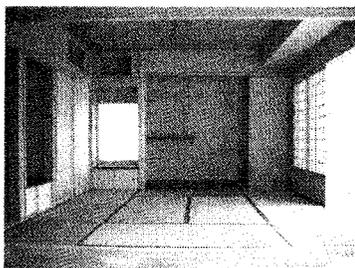
オフィス環境の快適を見つめて1世紀
わたしたちは空気と水のエンジニア 須賀工業です
ビル設備のご提案を通して、都市再生のお手伝いを続けています

空気調和・給排水衛生設備
創業1901年

須賀工業株式会社

本社 〒110-0005 東京都台東区上野5-18-10
電話 03(5688)8100
URL <http://www.suga-kogyo.co.jp/>

新しい家。これから増える
アルバムの最初の1ページに、
私たちが建築した建物を入れてください。



新築・建替・増改築など
構造・工法問わず。
建物のことなら何でも
お気軽にお問合せください。

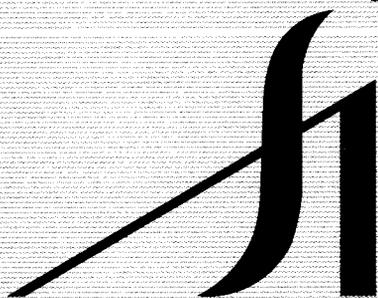
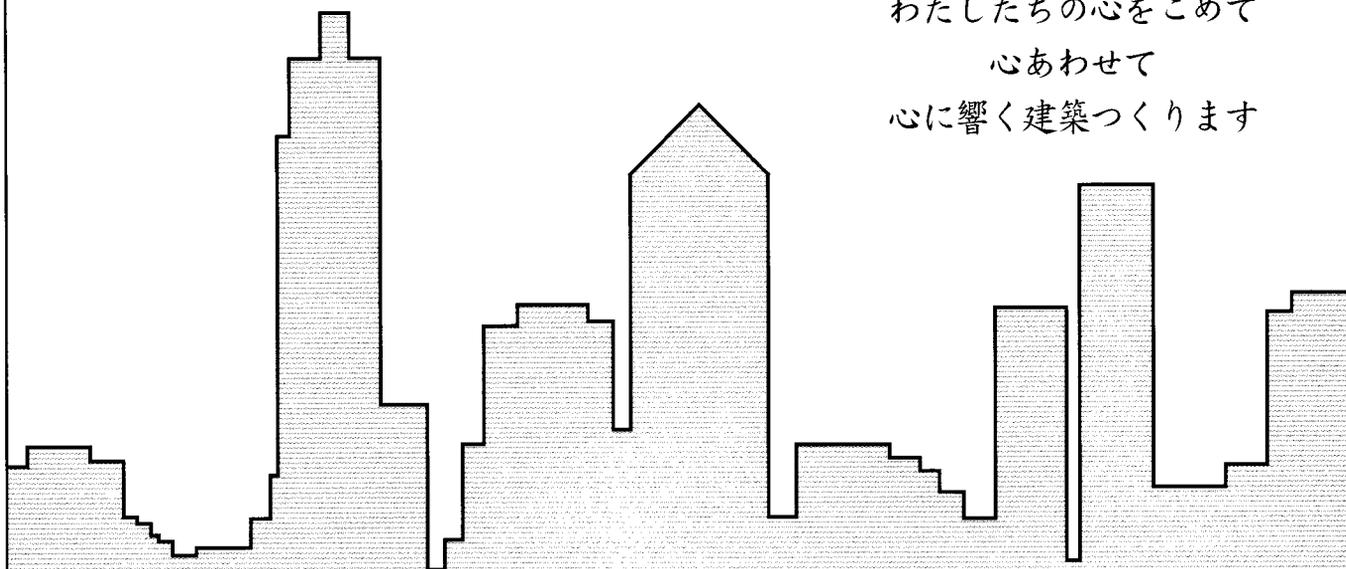
株式会社 中島建設

〒228-0813 神奈川県相模原市松が枝町4番5号
TEL.042-733-7000 <http://www.nakajimax.co.jp>

ISO9001/14001 認証取得
国土交通大臣 許可(特-14)第19807号

NAKAJIMA

わたしたちの心をこめて
心あわせて
心に響く建築つくります



薩摩建設株式会社

〒164-0001 東京都中野区中野6丁目3番12号

Phone 03-3360-8861(代)

Fax 03-3362-6245

より快適な
水環境をめざして。

文明の栄えた土地には、必ずといっていいほど豊かな水がありました。
自然に恵みを与え、生命を育み、人々の暮らしをつるおしてくれる“水”。
地球規模の環境汚染が問題となっている今、
西原は、都市のより快適な水環境の創造を通して、
社会に貢献してまいります。



水と人のあいだに

NISHIHARA

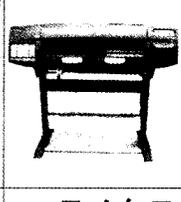
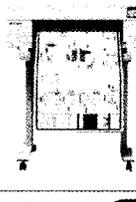
株式会社 西原衛生工業所

ダイワリサイクル 工学院OB特価実施中!

同じ工学院卒なので
良品を特価でご用意
致しました
担当:若林

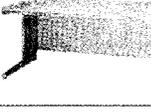
新品同様の中古を使って、OA機器・オフィス家具・ビジネスフォンを数ランク上のクラスで安く揃えませんか?

各種中古OA機器を大特価販売! 安心の1ヵ月保障、格安での保守契約も行っております!

おすすめ商品		複合機(コピー・FAX)		カラー複合機	
大特価 キヤノン 現行機! PIXEL CLC1160  プリンターサーバ PS-NX400W搭載 画像編集ボード装着 A4フルカラー11枚/分 A4モノカラー42枚/分 3段給紙 ダイワ特価 ¥682,500	 キヤノン MEDIO GP-255FP 毎分25枚機 4段給紙 専用台 メーカー希望小売価格 税込価格 ¥210,000	 リコー imagio Neo C325 コピー・FAX・プリンター ドキュメントBOX・スキャナー 4段給紙・両面ユニット メーカー希望小売価格 ¥1,830,000 税込価格 ¥577,500	 キヤノン IRC3200F コピー・FAX・プリンター ドキュメントBOX・スキャナー 4段給紙 メーカー希望小売価格 ¥1,590,000 税込価格 ¥577,500		
	複合機(コピー・FAX・プリンター)		カラープロッター		
 リコー Neo 220 コピー・FAX・プリンター 4段給紙 メーカー希望小売価格 ¥768,000 税込価格 ¥315,000	 Hewlett-Packard DesignJet 500PS A1版 Adobe PostScript 3対応 メーカー希望小売価格 ¥373,113 税込価格 ¥157,500	 Hewlett-Packard DesignJet 1055CM A0版 メーカー希望小売価格 ¥1,780,000 税込価格 ¥320,000			
カラーコピー機	A2版対応複合機	カラーレーザープリンター	モノクロプロッター		
 リコー imagio Color 5105 フルカラー 毎分14枚 モノカラー 毎分51枚 ソーター付き 税込価格 ¥315,000	 リコー MF-3540N コピー・プリンター 毎分35枚 5段給紙 メーカー希望小売価格 税込価格 ¥367,500	 キヤノン LBP-2260 A3対応 2段カセット メーカー希望小売価格 税込価格 ¥73,500	 Hewlett-Packard DesignJet 430 A0版 メーカー希望小売価格 ¥458,000 税込価格 ¥126,000		

一流メーカー品のオフィス家具(オカムラ・イトーキ・コクヨ・ウチダ)を
中古とは思えない高品質で定価の**80%OFF**~

スタッフのイチオシ!

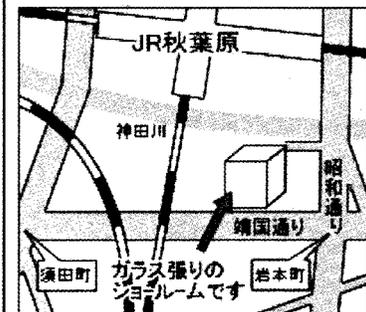
片袖机	平机	ワゴン	肘付チェア	肘無しチェア	肘無しチェア	おすすめセット
W1000×D700×H700 税込価格 ¥13,600~ 	W1200×D700×H700 税込価格 ¥14,700~ 	税込価格 ¥8,400~ 	税込価格 ¥10,000~ 	税込価格 ¥8,400~ OAタイプ 	税込価格 ¥6,300~ 	イトーキ 平机 W1500×D700×H700 + ワゴン セットで! 税込価格 ¥29,400-
会議テーブル	ミーティングチェア	両開き書庫	ユニット書庫	ロッカー	パーティション	 定価 ¥144,000-
W1500×D750×H700 税込価格 ¥15,750~ W1800×D750×H700 税込価格 ¥18,900~	税込価格 肘無し ¥4,200~ 税込価格 肘付き ¥6,300~ 	税込価格 ¥15,750~ 	両開き+ラテラル 税込価格 ¥29,400~ 両開き+両開き 税込価格 ¥29,400~	3人用 税込価格 ¥15,750~ 4人用 税込価格 ¥19,800~	税込価格 ¥9,450~ 	

ビジネスフォンシステム(メーカー希望小売価格の約1/3で購入できます)

お買得プラン ベーシックプラン
NTT α-RX SOHO・ベンチャー向
 α-RX×4台 TA×2台
 主装置1台(ISDN2回線)
 メーカー希望価格 ¥273,000-
Daiwa特価 ¥80,850-
 (標準価格) (税込価格)
 標準工事費 ¥86,625は別途 (税込価格)

多機能プラン ISDN専用・外都転送
TAMRA デジタルPV824 ナンバーディスプレイ
 TAMRAデジタルPV824×4台
 主装置1台(ISDN2回線)
 メーカー希望価格 ¥420,000-
Daiwa特価 ¥96,600-
 (標準価格) (税込価格)
 標準工事費 ¥86,625は別途 (税込価格)

多回線プラン 端末20台迄増設可能
NTT α-RX
 α-RX×8台 TA×4台
 主装置1台(ISDN4回線)
 メーカー希望価格 ¥367,500-
Daiwa特価 ¥135,450-
 (標準価格) (税込価格)
 標準工事費 ¥152,450は別途 (税込価格)



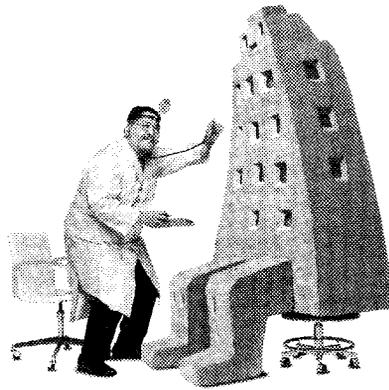
中古OA機器販売のDaiwaです。

なんとデジタル式コピー機・普通紙FAX・コピーFAX兼用機
 カラーコピー機・PC用レーザープリンタが定価の8~9割引。
 ビジネスフォン・ISDNターミナルアダプタも格安にて販売中!
 全商品完全にメンテナンス済み、店頭にてOA機器展示中!
 コピー機は使って安心のメンテナンス保証が付けられます。
 お近くの方は是非一度お越し下さい。遠方の方にはDaiwaの
 ホームページにて最新価格をお知らせしています。

激安

TEL: 0120-9999-39 TEL: 03-3634-8190
 http://www.daiwa-recycle.co.jp e-mail: daiwa@daiwa-recycle.co.jp

20歳過ぎたら
健診を。
人間の話では
ありません。



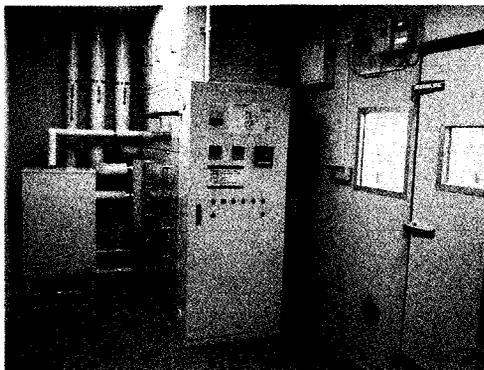
KANDENKO

電気設備など、中から疲れやすくなって
いるビルは、関電工でリニューアルを。
ビルを診断、設計、施工してビル内環境
を改善します。設備に関することは、ビル
のドクター関電工にご相談ください。

ビルの誕生からリニューアルまで
総合設備の

関電工

あらゆる生気象環境をシミュレーションする



人間環境計測制御システム

人間環境計測制御システムは、生気象環境をシミュレーションしながら、
各種環境情報と生体情報を同時計測・集録します。
運動選手の精神的な強化策が叫ばれている昨今、環境の変化や心と
運動機能のかかわり、メンタルトレーニング等、科学的に解明することが
できる画期的な試験・研究システムです。

資料請求・お問い合わせは

ABBE アーベ科学株式会社

〒160-0015

東京都新宿区大京町 29 番地

<http://www.abbe.co.jp>

Phone:03-3359-0361(代) Fax:03-3341-7913

一級建築士事務所

有限会社 **權建築設計事務所**

代表取締役 田中正裕 (昭和52年建築学科 山下研究室卒)

〒176-0005 東京都練馬区旭丘1-39-8 パレージビル201号室 TEL 03-3950-4120 FAX 03-3950-4124 <http://www1.odn.ne.jp/kaiarch/>

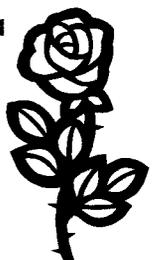
工学院大学 建築系学科同窓会誌

NICHE 広告募集します

問い合わせ先

工学院大学谷口研究室 電話03-3340-3529 FAX.03-3340-0588

NICHE 編集担当者 大場光博 E-mail : miu@tkg.att.ne.jp



きりえ/楠 昭さん

藤原智弥



表紙デザインコンセプト:森羅万象

我々人間の文明の発達とそれに伴う都市化がもたらした地球環境への様々な脅威は、建築活動が大いに関わっています。快適な生活を送る上で、自然を切り開いていくことは避けられないことかもしれません。しかしこれからは、建築をそれ自体完結したものとしてではなく、地域さらには地球規模の環境との関わりにおいて捉えなければなりません。

藤原智弥 工学院大学大学院修士2年(谷口研究室)

新潟県立柏崎高校出身 E-Mail:fuji-tomo-0830@jcom.home.ne.jp

NICHE 2004 編集後記

平成15年11月20日(木) / NICHEの発行14,000部、透明の袋にキャッチを印刷する白色の塗装乾燥に日数がかかり、当初予定より半月遅れで発送。来年はスムーズに進めたいです。

平成15年12月 / 卒業生の感想、『周りのOBが袋に注目して「読みたくなる」?とか書いてありましたよね。あれがおもしろい!って褒めてましたよ。私もあとから見てオー!と思いました』。素直なご意見に謝々。

平成16年1月13日(火) / 年明け始めての編集会議、直前に工学院大学の『将来ビジョンについて』の会議が開催、編集スタッフ急遽出席。午後9時閉会、隣のエステック地下に移動し編集内容討議。時間が足りず後半は八王子キャンパスの再整備についての話し合いが行なわれた。時間不足で編集内容を深めるの困難です。

3月23日(火) / 編集会議出席7名。鷹野陽平さんが大学院修士了、大学院2年小野あゆみさんが新スタッフに加わりました。急に寒くなってみぞれが降ったり温度が下がり、桜の开花直前になって満開も少し遅れがちです。

5月25日(火) / 昨年担当したアンクリエが5月31日をもって解散との連絡。今年も一から出直してデザイン会社を探さねばならない。ア〜ア今年もやっぱり大変だ〜。6月初旬迄に何とか解決の糸口を見つけた〜い。

5月30日(日) / 同窓会総会開催でNICHEの説明。『同窓生が今迄仕事をしてきて、ある時キラッと輝いた時があります。ズート輝き続けている人もいます。そんなところにスポットライトをあてて、NICHEの誌面で輝いてもらいたい』『建築の卒業生は16,000人、逝去された方及び住所不明が1/3近くあり、今は11,000名に届けています。在校生を含むと14,000部。NICHEを見るみんなが刺戟されて輝きはじめると嬉しい…』、小さな石の波紋が、水面に広がるように、頑張っている方々の熱い気持ちが、同窓生や在校生に静かに届きますように…。

6月29日(火) / 今年のレイアウト、印刷担当が(株)青空広告事務所にやっと決定。5月から今夜迄、数多くの同窓生の方々からサポートを戴きました。厚くお礼申し上げます。今迄の時間のロスを、これより一気に縮めたいものです。良かった〜。

7月20日(火) / 東京都心は39.5度と歴史的な暑さ。午後5時からレイアウトの打ち合わせを青空広告事務所の森本淳二さんと行なう。1ページずつ積み木を積むようにデザインを考えながらレイアウトしますが、原稿もこれから届くものもあり、沢山書かなくてはならないTopicsの記事もあります。今年の袋のキャッチフレーズ、『同窓生全員が元気になるビタミン剤、元気な仲間の活躍を、今年も一気に読みましょう』なんてどうかな〜。

8月17日(火) / 7月に入り毎週レイアウトの打ち合わせを続けています。原稿に写真が不足したりいろいろ不備もあり、催促していますが中々返事がこなくて困っています。しかし、NICHEを受けとった同窓生がみんな元気になるように希望しています。『編集方針は雄大で慎重に、原稿は伸び々と前向きに、レイアウトデザインはフレッシュで斬新に、個性ある誌面づくり』を目指します。

9月14日(火) / 「NICHEはただ今、〈同窓生1万人運動を展開〉しています。ご協力いただける同窓生、あなたにお願いします。元気のいいNICHEをあなたの出身高校や企業などに1部お届け下さい。あなたのまわりにひとり、工学院の仲間を増やしましょう」。つまり2万5,000部NICHEを発行して同窓会は対応します。活動の方向性が良い方向ならば、前に進みましょう。きっと良き日が、待っていてござる。今夜の運営委員会の後、とっても前向きな意見が飛び出します。しかし、その後の検討結果1万部増刷は資金難から今回は見送りです。

10月13日(水) / 9月から10月にかけて、連日作業が続いてメモをつける余裕がありません。まもなく印刷版下の入稿が全て完了します。今年の内容は盛り沢山。大学内の活気も溢れて伝わってきます。他大学がこんな風に同窓生の活動を伝えていないなんて信じられない。勿体ないです。今回の発行部数は15,500部、この中から1,500部を全国の高校にも贈呈します。高校の先生方も、ページをめくってくれたら、きっと感動すると思います。

さて今回のNICHE Vol.28のご感想は如何ですか、デザイナーが変わりましたので、フレッシュな誌面作りができました。編集部ではNICHE Vol.29に向けての活動を既に開始しています。ご感想や、次号に向けてのご意見、ご希望がございましたら、是非メールにてご連絡をお願い致します。今後とも工学院大学建築系学科同窓会に、暖かいご支援、ご指導をお願い申し上げます。

敬具

NICHE編集長
大場光博

連絡先《 E-Mail : miu@tkg.att.ne.jp 》

●福岡大学入試問題の解答/5番の和洋混交か、4番の和洋合奏だと思います。初田 亨

建築・土木が今求めているのは 変化をチャンスととらえる あなたの意欲と行動力です

当社は問題解決のための新しい融合システム創造を
目的としたグローバル企業集団を目指します!!

募集情報

【職種】

- ①ビル・住宅等の金物建材設計業務
- ②大手ゼネコン・ハウスメーカー・設備会社等に常駐しての施工管理業務
- ③アウトソーシングをはじめとする建築施工図のとりまとめ
- ④専用ソフトによる建築数量積算およびデータベースへの入力
- ⑤建築・土木・プラント等各分野におけるCADによる図面作成

【資格】 20～50歳程度 経験2年以上

【勤務】 都内および近郊 9:00～17:45

会社情報

設立 昭和43年9月

資本金 4億8千万円

年商 191億5000万円(2004年3月期)

社員数 2619人(2004年3月期)

主要取引先

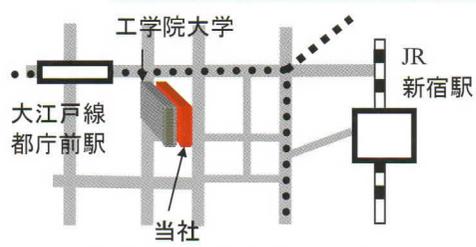
株式会社日立製作所
トヨタ自動車株式会社
日本アイ・ビー・エム株式会社
キヤノン株式会社
トステム株式会社
日産自動車株式会社
株式会社大林組
大成建設株式会社
鹿島建設株式会社
その他 一部、二部上場企業

首都圏土建支店
〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-24-1 エステック情報ビル27F
TEL:03-3346-7731 FAX:03-3346-7732
<http://www.fusione.co.jp>



募集

1. 建築建材設計業務
2. 建築施工管理業務
3. 建築施工図作成業務
4. 建築積算業務
5. CADオペレーター



交通: JR新宿駅西口徒歩5分
工学院大学ビル隣り

03-3346-7731 (代表)
担当: 酒井 紀彦
e-mail: n-sakai@fusione.co.jp



NICHE

niche (nich), n. [Fr. niche, form Lnidus a nest]

1. a recess or hollow in a wall usually intended for a statue, bust or vase
2. a place or position particularly suitable for the person or thing in it.

-webster's New Twentieth Century Dictionary-

校名の愛称「Tokyo Urban Tech」について
工学院大学ではグローバル化の一環に、校名の愛称「Tokyo Urban Tech」を商標登録として申請中です。